博　多　170

— 博多遺跡群 第 203 次調査報告 —

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第 1405 集
〈第 1 分冊〉

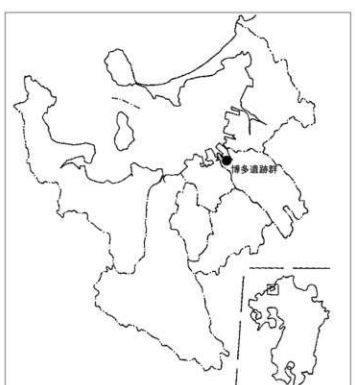
2021
福岡市教育委員会

博　多　170

－博多遺跡群 第 203 次調査報告 －

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1405 集

〈第 1 分冊〉



調査番号　1427
遺跡略号　HKT-203

2021

福岡市教育委員会

博多遺跡群第 203 次調査地点航空写真

※上が北
第 203 次調査地点

（1）203 次調査区（2 ～ 6 区）全景

（2）203 次調査区（8 ～ 11 区）全景

序

古くから大陸との文化交流の門戸として発展を遂げてきた福岡市内には、数多くの歴史的遺産が残されています。これらを活用するとともに保護し、未来に伝えていくことは、現在に生きる私たちの重要な努めです。しかし、近年の著しい都市化により、その一部が失われつつあることもまた事実です。

福岡市教育委員会では開発に伴いやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録保存によって後の時代まで伝えるよう努めています。

本書は、本市の地下鉄七隈線延伸事業に伴い調査を実施した博多遺跡群第 203 次調査の成果を報告するものです。博多遺跡群は、古代から中世を通じて、中国・朝鮮との貿易で繁栄した都市遺跡で、古くからアジアの拠点都市としての役割も果たしてきました。今回の調査でも、主に弥生時代中期から室町時代にかけての墓地や集落を確認すると共に、当時の生活用具が多数出土しました。これらは、博多の歴史を解明する上で貴重な資料となるものです。

今後、本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また学術研究の資料として活用頂ければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の作成に至るまで、本市交通局、大林・熊谷・大本・東田中建設工事共同企業体、錢高・日本国土・九建建設工事共同企業体をはじめとする数多くの関係者のご理解とご協力を賜りました。心から感謝申し上げます。

令和３年３月５日

福岡市教育委員会
教育長　星子　明夫

例　言

1. 本書は、福岡市教育委員会が地下鉄七隈線延伸事業に伴い、福岡市博多区祇園町地内において発掘調査を実施した博多遺跡群第203次調査の報告書である。
2. 発掘調査および整理・報告書作成は、本市の公共受託事業として実施した。
3. 報告する調査の基本情報は下表のとおりである。
4. 本書に掲載した遺構実測図の作成は、井上繭子、大森真衣子、加藤良彦、久住猛雄、服部瑞輝、星野惠美、細石朋希、坂口剛毅、名取さつき、藤野雅基が行った。
5. 本書に掲載した遺物実測図の作成は、担当者および井上加代子、大庭友子、熊埜御堂和香子、名取、林田憲三、平川敬治、元田晃子、山本万里子、米倉法子が行った。また、一部を株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
6. 本書に掲載した遺構および遺物写真の撮影は、担当者が行い、空中写真撮影およびデジタルモザイク合成は、写測エンジニアリング株式会社に委託した。
7. 本書に掲載した挿図の製図は、担当者および井上、大庭、熊埜御堂、相原聡子、野村美樹、林由紀子、久富美智子が行った。
8. 本書に掲載した国土座標値は、日本測地系（第Ⅱ座標系）によるものである。
9. 本書で用いた方位は座標北で、真北より0°18′西偏する。
10. 遺構の呼称は、掘立柱建物をSB、竪穴住居をSC、甕棺・壺棺をST、土坑をSK、溝をSD、ピットをSP、その他をSXと略号化した。遺構番号は上2桁が調査区、下4桁が0001からの調査区毎の通し番号である。
11. 本書で記述する輸入陶磁器、国産陶器の分類、説明については以下の文献を参考とした。
太宰府市教育委員会『大宰府条坊跡ⅩⅤ－陶磁器分類編－』（太宰府市の文化財第49集）2000年 中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社 1995年 小野正敏「15～16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』№2 1982年
12. 遺物番号は調査区毎の通し番号とし、挿図と図版の遺物番号は一致する。
13. 本書に関わる記録・遺物等の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに保管される予定である。
14. 本書の執筆は各担当者が行った。なお、金属製品・生産関連資料等の保存科学的分析については比佐陽一郎、獣骨については屋山洋が行った。遺物は一括して、Ⅲ．34・35に掲載している。
15. 付編に掲載している金属学的調査についてはパリノ・サーヴェイ株式会社、炭化種実についてはパレオ・ラボ、人骨については九州大学大学院比較社会文化研究院へ分析を委託した。なお、鉛同位体比分析については国立歴史民俗博物館 齋藤努氏、金属学的調査については大澤 正巳氏、年代学的調査については国立歴史民俗博物館 藤尾 慎一郎氏、山形大学高感度加速器質量分析センター 門叶 冬樹氏、人骨のＤＮＡ分析については国立科学博物館 篠田 謙一氏から報告を賜った。
16. 本書の編集は各担当者の協力を得て、星野が行った。

遺　跡　名	博多遺跡群	調 査 次 数	第203次	遺 跡 略 号	HKT-203
調 査 番 号	1427	分布地図図幅名	天神049	遺跡登録番号	0121
申 請 地 面 積	19,600㎡	調査対象面積	4,330㎡	調 査 面 積	2,630㎡
調　査　地	福岡市博多区祇園町地内			事前審査番号	24-1-81
調 査 期 間	平成26（2014）年9月8日～平成29（2017）年11月21日				

本文目次

第Ⅰ章　はじめに …… 第１分冊・1
1. 調査に至る経緯 …… 1
2. 調査の組織 …… 2
第Ⅱ章　遺跡の立地と環境 …… 4
第Ⅲ章　調査の記録 …… 9
1. 調査の概要 …… 9
2. １区の調査 …… 11
3. ２区の調査 …… 13
4. ３区の調査 …… 35
5. ４区の調査 …… 197
6. ５区の調査 …… 227
7. ６区の調査 …… 249
8. ７区の調査 …… 295
9. ８区の調査 …… 第２分冊・1
10. ９区の調査 …… 121
11. 10区の調査 …… 第３分冊・1
12. 11区の調査 …… 39
13. 12区の調査 …… 51
14. 13区の調査 …… 131
15. 14区の調査 …… 141
16. 15区の調査 …… 169
17. 16区の調査 …… 209
18. 17区の調査 …… 229
19. 18区の調査 …… 235
20. 19区の調査 …… 271
21. 20区の調査 …… 275
22. 21区の調査 …… 287
23. 22区の調査 …… 301
24. 23区の調査 …… 311
25. 24区の調査 …… 第４分冊・1
26. 25区の調査 …… 44
27. 26区の調査 …… 57
28. 27区の調査 …… 65
29. 28区の調査 …… 88
30. 29区の調査 …… 96
31. 30区の調査 …… 117
32. 31区の調査 …… 120

33. その他の調査 …… 124
34. 金属製品・生産関連資料等について …… 128
35. 動物遺存体について …… 243
第Ⅳ章 まとめ …… 253
1. 弥生時代中期 …… 253
2. 弥生時代後期～古墳時代 …… 254
3. 古代 …… 257
4. 中世 …… 258
5. 近世 …… 260

〈付 編〉
1. 博多遺跡群第 203 次調査出土資料の鉛同位体比分析について …… 263
（国立歴史民俗博物館 齋藤 努）
2. 博多遺跡群第 203 次調査出土遺物の金属学的調査について …… 266
（大澤 正己・パリノ・サーヴェイ株式会社）
3. 博多遺跡群第 203 次調査出土の炭化種実について …… 292
（佐々木 由香・バンダリ スダルシャン（パレオ・ラボ））
4. 博多遺跡群第 203 次調査出土試料の年代測定について …… 297
（山形大学高感度加速器質量分析センター）
5. 博多遺跡群第 203 次調査出土の人骨について …… 301
（九州大学大学院比較社会文化研究院・九州大学アジア埋蔵文化財研究センター）
6. 博多遺跡群第 203 次調査出土弥生中期人骨の年代学的調査について …… 316
（国立歴史民俗博物館 藤尾 慎一郎）
7. 博多遺跡群第 203 次調査出土弥生中期人骨のＤＮＡ分析について …… 323
（国立科学博物館 篠田 謙一）

第Ⅰ章　はじめに

1. 調査に至る経緯

平成24（2012）年8月24日付、交建第21号にて福岡市交通局建設部建設課長より同市教育委員会文化財部埋蔵文化財審査課長宛に中央区春吉三丁目から博多区博多駅中央街までの「福岡市都市高速鉄道3号線（天神南～博多）延伸工事」（工事面積19,600㎡）に伴う埋蔵文化財事前調査についての依頼がなされた。福岡市都市高速鉄道3号線（地下鉄七隈線）は、天神南～橋本間が「緊急整備区間」として、先行して整備され、平成17（2005）年2月に開業している。その後、平成21（2009）年度から本線の「天神南～博多間」延伸の検討がなされ、平成23（2011）年度に事業化された。延伸区間は約1.4kmで、工事は全線、シールド工法やナトム工法等の推進工法で行われ、祇園に設けられる中間駅（仮称）および出入口については開削工法である。

この依頼を受けて同課では、現地表面より約13～26mで行われる地中推進工法をとる工事については、埋蔵文化財に影響を及ぼさないが、開削工法を行う中間駅および出入口については、博多遺跡群の周知の埋蔵文化財包蔵地に該当するため、確認調査が必要であると判断し、平成24（2012）年10月5～16日の夜間にトレンチによる確認調査を実施した。その結果、現地表面下約70cmで遺物、遺構を確認したことから、遺構の保全等に関して交通局と協議を行い、中間駅（3,660㎡）および出入り口ほか（670㎡）について記録保存のための発掘調査を実施することとなった。 また、交通局とは別に、平成28（2016）年8月23日付で、福岡地所株式会社より埋蔵文化財課宛に中間駅と施設との連絡通路を接続する工事の事前審査申請が提出されたため、当該箇所も調査の対象とした。

平成26（2014）年9月5日付で福岡市交通事業管理者と福岡市長で「福岡市高速鉄道3号線（天神南～博多）延伸事業に伴う埋蔵文化財に関する基本協定書」を取り交わし、会計年度毎に福岡市交通事業管理者を委託者、福岡市長を受託者として埋蔵文化財発掘調査業務委託契約を締結し、平成26（2014）年度から令和2（2020）年度にかけて発掘調査および資料整理・報告書作成を行った。

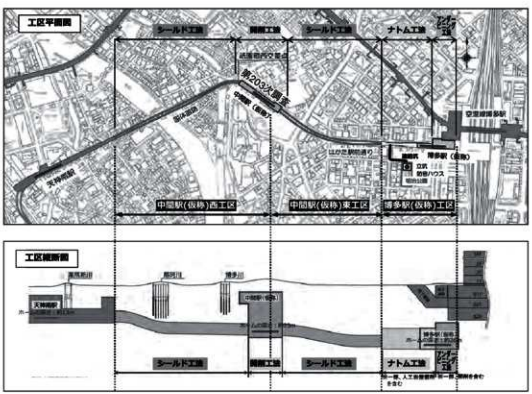


Fig.1　工事概要図

2. 調査の組織

調査委託：福岡市 交通局
調査主体：福岡市教育委員会

（平成 26年度：発掘調査）
調査総括：文化財部　埋蔵文化財調査課長　常松 幹雄　　調査第２係長　榎本 義嗣
事前審査：埋蔵文化財審査課長　米倉 秀紀　　事前審査係長　佐藤 一郎
　　事前審査係　　福薗 美由紀
調査庶務：　　同課管理係長　内山 広司　　管理係　　川村 啓子
調査担当：埋蔵文化財調査課　星野 惠美・大森 真衣子・服部 瑞輝・細石 朋希
　　埋蔵文化財審査課　井上 繭子

（平成 27年度：発掘調査、整理・報告書作成）
調査総括：文化財部　埋蔵文化財調査課長　常松 幹雄　　調査第２係長　榎本 義嗣
事前審査：埋蔵文化財審査課長　米倉 秀紀　　事前審査係長　佐藤 一郎
　　事前審査係　　福薗 美由紀
調査庶務：　　同課管理係長　大塚 紀宣　　管理係　　川村 啓子
調査担当：埋蔵文化財調査課　　星野 惠美・加藤 良彦・久住 猛雄・服部 瑞輝

（平成 28年度：発掘調査、整理・報告書作成）
調査総括：文化財部　埋蔵文化財課長　　常松 幹雄　　調査第２係長　加藤 隆也
事前審査：　　同課事前審査係長　佐藤 一郎　　事前審査係　　吉田 大輔
調査庶務：　　同課管理係長　　大塚 紀宣　　管理係　　入江 よう子
調査担当：　　埋蔵文化財課　　加藤 良彦・星野 惠美

（平成 29年度：発掘調査、整理・報告書作成）
調査総括：文化財部　埋蔵文化財課長　　常松 幹雄　　調査第２係長　大塚 紀宣
事前審査：　　同課事前審査係長　本田 浩二郎　事前審査係　　吉田 大輔
調査庶務：文化財保護課長　宮崎 誠二　　管理調整係長 藤 克己　管理調整係 松原 加奈枝
調査担当：埋蔵文化財課　　井上 繭子・加藤 良彦

（平成 30年度：整理・報告書作成）
調査総括：文化財活用部　埋蔵文化財課長　　大庭 康時　　調査第２係長　大塚 紀宣
事前審査：　　同課事前審査係長　本田 浩二郎　事前審査係　　吉田 大輔・中尾 祐太
調査庶務：文化財活用課長　松本 真人　　管理調整係長 藤 克己　管理調整係　松原 加奈枝
整理担当：埋蔵文化財課　　井上 繭子・加藤 良彦
　　文化財活用課　　星野 惠美
　　埋蔵文化財センター　　大森 真衣子・服部 瑞輝

（令和元年度：整理・報告書作成）

調査総括：文化財活用部　埋蔵文化財課長　菅波 正人　　調査第２係長　　大塚 紀宜
事前審査：　　同課事前審査係長　本田 浩二郎　　事前審査係　中尾 祐太・松﨑 友理
調査庶務：文化財活用課長　松本 真人　　管理調整係長　藤 克己　管理調整係　松原 加奈枝
整理担当：埋蔵文化財課　　加藤 良彦
文化財活用課　　星野 惠美
史跡整備活用課　井上 繭子
埋蔵文化財センター　　大森 真衣子・服部 瑞輝

（令和２年度：整理・報告書作成）

調査総括：文化財 活用部 埋蔵文化財課長　菅波 正人　　調査第２係長　　蔵冨士 寛
事前審査：同課　　事前審査係長　　本田 浩二郎　　事前審査係　　松﨑 友理・神 啓崇
調査庶務：文化財活用課長　松本 真人　　管理調整係長　大森 秋子　　管理調整係　松原 加奈枝
整理担当：文化財活用課　　星野 惠美
史跡整備活用課　井上 繭子
埋蔵文化財センター　　大森 真衣子・服部 瑞輝

なお、発掘調査から整理・報告書作成に到るまで交通局、大林・熊谷・大本・東田　中建設工事共同企業体、錢高・日本国土・九建建設工事共同企業体をはじめとする関係者の皆様方には多大なご協力とご理解を頂きました。また、井澤 英二氏、大澤 正己氏、齋藤 努氏、篠田 謙一氏、藤尾 慎一郎氏、舟橋 京子氏、溝口 孝司氏、門叶 冬樹氏からご指導・報告書を賜りました。ここに記して感謝の意を表します。

発掘調査風景

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境

博多遺跡群は、博多湾に画した砂丘列の上に立地している。西を博多川、東を石堂川に、南は那珂川に流れ込む旧比恵川に挟まれ、地理的にも独立した一角をなしていた。この砂丘は縄文海進以降に形成されたもので、3つの砂丘列からなり、内陸側の2つの砂丘は「博多濱」、博多湾側の砂丘は「息濱」と呼ばれている。これらを内陸から砂丘Ⅰ、砂丘Ⅱ、砂丘Ⅲと仮称する。この砂丘の形成は、内陸側の砂丘Ⅰから形成され、最も海側の息濱（砂丘Ⅲ）が都市化していくのは鎌倉時代に入ってからということがこれまでの発掘調査で明らかになっている。今回の調査地点は櫛田神社の南側の博多濱の中でもより内陸の砂丘（砂丘Ⅰ）の西端に位置し、博多遺跡群西南端と呼ぶにふさわしい場所に位置している。

対象地は最も古くから形成されていた砂丘上に位置していることもあり、周辺では博多遺跡群の最盛期である中世に限らず幅広い時代の豊富な資料が確認されている。そこで、周辺の発掘調査成果をもとに時代ごとに順を追って対象地の歴史的環境を見ていくことにする。

【中世以前（弥生・古墳・古代）】

調査地点である203次調査の位置する博多濱（砂丘Ⅰ）は、博多遺跡群の中でも最も古くから生活の場としての利用がなされてきた。遺構に伴いこそしていないが、縄文～弥生時代前期にあたる土器や石器などが確認されている。

弥生時代前期後半頃から147次調査や172次調査などで土坑や甕棺墓等の検出が見られ、本格的な土地の利用が開始したことが明らかとなっている。弥生時代中期になると集落は砂丘Ⅰの東側を中心に営まれるようになり（30次・48次・62次）、墓域の利用は西側を中心とするようになる。甕棺の二列埋葬も確認されており、北部九州における二列埋葬墓の現時点での北限となっている（24次・36次・地下鉄1号線店屋町・祇園町工区C区調査）。後期になると、墳墓域の中心は博多濱の中でも北側（砂丘Ⅱ）に移り、埋葬形態も単独の状態で検出される事例が多くなり、集落内からの墓域の分離と集団墓から個人墓への転換が図られたものと推察されている。

古墳時代に入ると、砂丘Ⅰでは現在の祇園町付近で鉄の加工（鍛冶）に関わる羽口や鉄片（65次・166次調査）や被熱痕跡のある住居や鉄錆が染み込んだ大型の砥石（50次調査）、様々な形に切断された鉄片（147次調査）が確認されるほか、玉類の加工に関わる碧玉片なども見つかり（50次・118次・166次調査）ものづくりの工房の出現が見られるようになる。同時に集落も広範囲に営まれ、集落からは朝鮮半島や近畿、東海地方や瀬戸内地域など各地の土器が見られ、既に対外交流の窓口としての役割を担っていたことを物語る。また、墓域としては博多濱の南端部の17次・20次調査で方形周溝墓が築かれ、その後、全長約60m、埴輪・葺石も有する前方後円墳（博多1号墳）が登場する。古墳に関しては、博多遺跡群では砂丘Ⅰに集中しており、203次調査地点近辺でも171次・142次・182次調査から出土した円筒埴輪片の良好な状態から、そう遠くない場所に前方後円墳が築かれていたことが想定されている。

その後、古代に入り当該砂丘の最も高所では、正方位をとる溝が方形にめぐり、かつ墨書土器や銅銭、硯等の遺物が出土するエリアが出現する（28次・50次・173次ほか）。ここでは、官衙域が想定され、鴻臚館式の瓦や中国産陶磁器も多数確認されており、鴻臚館の機能の一部を担っていた可能性も示唆されている。

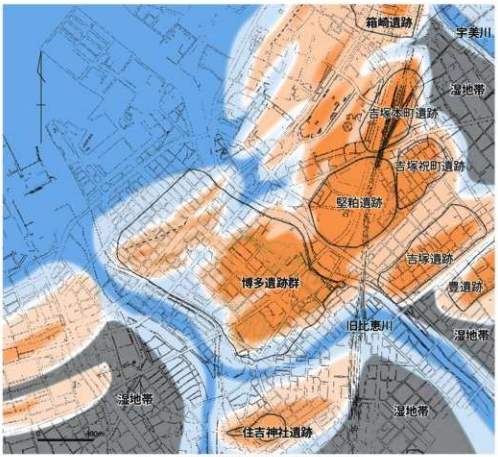


Fig.1　博多遺跡群位置図（1/25,000）

Ph.1　博多第 203 次調査地点航空写真　第 203 次調査地点

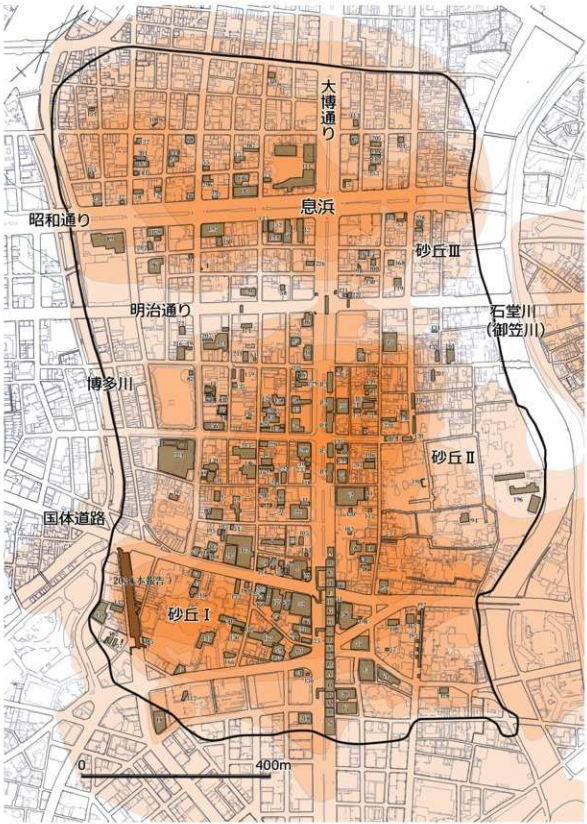


Fig.2　現代地形と調査区位置図（1/8,000）

【中世（11 世紀～ 16 世紀）】

11 世紀に入り鴻臚館が衰退すると、博多遺跡群が新たな対外交流の窓口として機能するようになる。203 次調査の位置する砂丘においても大量の中国産陶磁器を出土する地下鉄 1 号線祇園町工区の調査を始めとし、その繁栄が伺える。陶磁器だけでなく、中国人商人の博多の生活を想起させるものとして、押圧波状文の軒平瓦や花文をあしらった軒丸瓦（65 次調査ほか）、高台の裏側に墨で人物名を書いた墨書陶磁器（50 次調査ほか）、桶を使用した井戸（65 次調査ほか）等が出土および検出されている。

貿易都市としての繁栄は、陶磁器等の「もの」の流入だけでなく、ものづくり技術の発展もうながした。特に 203 次調査近辺では、172 次調査において 300 点以上にものぼるガラス制作関連遺物が確認されている他、ガラスの加工に関連する坩堝（172 次・147 次調査ほか）やガラスの溶解のための支脚（180 次調査）の出土もみられる。また、ガラス関連だけではなく、金属器制作関連の遺物が 63 次・195 次調査等で確認されており、博多濱の南西部（砂丘 1 ）では博多遺跡群の中でも各種の工房が軒を連ねていた可能性が高い。

また、当該砂丘北側の櫛田神社東側は、鎌倉幕府の出先機関である鎮西探題の推定地とされているが、未だに確定的な遺構の検出にまでは至っていない。しかし、172 次調査において鎮西探題に縁の深い北条氏の家紋である三ツ鱗紋を刻む土製品が出土していることや、近辺からは 13 世紀後半代～ 14 世紀前半代に比定されるコンテナケース 115 箱に上る夥しい量の土師皿や坏を有する土坑（118 次調査）も確認され、鎮西探題を巡る饗宴の際に使用・廃棄された残滓と考えられている。このような遺構は鎮西探題の設置によって、博多に新たな習慣がもたらされたことを示唆するものと考えられている。同様の土坑が 203 次調査においても検出されており、関連性が強いとみられ、鎮西探題が近辺に存在していた可能性が指摘される。

中世後半にはモンゴル軍の襲来（元寇）により、前時期の活発な対外交流が衰退すると思われたが、息濱を中心に、ベトナムやタイといった東南アジアとの交易が盛んになると同時に、神谷寿禎や神谷宗湛、嶋井宗室といった博多商人の出現により、一層貿易都市として繁栄したと考えられる。金属生産などのものづくりにおいても鍋の鋳型や羽口や取瓶等の出土も確認されるなど（85 次調査等）、中世前半から引き続き行われていたと推察される。

【近世】

近世の博多は戦国時代末の太閤町割を基本として町が発展し、現在に近い地形に近づいていったと考えられる。当該砂丘南側に築かれていた博多の南側の要塞である房州堀はその役割を終え、水田としての利用がなされたと考えられている（171 次・57 次）。同時に、西側の現キャナルシティとの間は旧那珂川の河道であり、その河川の侵食が終わった中世後半から近世以降に一気に埋められ平坦面となり（171 次調査）、徐々に町域を拡大していったと周辺の調査により明らかになりつつある。

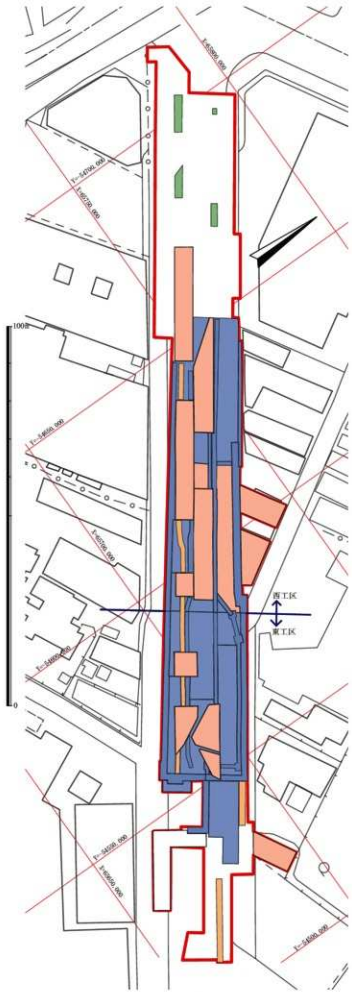


Fig.1
第 203 次調査区位置図
（1/1,000）

第Ⅲ章　調査の記録

1．調査の概要

今回報告する博多遺跡群第 203 次調査地点は、博多区祇園町地内に所在する。博多駅から西側へ延び、国体道路に至るまでの「はかた駅前通り」の現行 4 車線の道路である。国体道路に接する地点を西端とし、長さ約 250m、幅約 20m が調査対象地である。調査区の現況での標高は西端で約 4.5m、そこから約 100m 東側が最も高く 5.7m を測る。東端は標高 4.0m で、房州堀の推定ラインに位置する。調査区は 2 つの企業体が工事を行う関係で、西工区と東工区に分かれ、さらに地中の埋設管、信号、横断歩道、生活道路の確保の関係で、さらに細かく分断された。平成 26(2014) 年度から、現行 4 車線（片道 2 車線）を 2 車線（片側 1 車線）にし、南側（2 ～ 6 区）に埋蔵文化財調査・工事のための占用帯を確保した。事業主による土留め矢板設置の際に埋設管の有無を確認するための試掘を行い、矢板設置後、遺構面までの表土鋤取りを重機により行った。その後、人力による調査に着手し、遺構の検出、検出遺構の掘り下げや写真撮影、1/20 縮尺を主体とする図化、遺物の取り上げを行い、12 月 19 日にセスナ機による空中写真撮影を実施した。平成 27(2015) 年 1 月 31 日までに調査を終了し、南側の占有帯の仮復旧を行い、北側占有帯の調査へ移った。北側 8 ～ 11 区を平成 27(2015) 年 4 月 1 日より 9 月 24 日まで調査し、6 月 15 日にセスナ機による空中写真撮影を実施した。調査の手順は南側の占有帯と同様である。その後、車線規制ができず、生活道路確保等のため発掘調査ができなかった箇所の立会調査へと移った。工事の工程にあわせ、中間杭（23・27・28 区）、SMW（24 区）、GW（29・30 区）設置個所の立会調査を行った。立会調査はその日のうちに埋め戻し、現状に復さなければならないため、短いスパンで 1 面から 3 ～ 5 面までの調査を繰り返した。次に工事区域全面に覆工板をかける工事が行われ、その後、覆工板下の土砂掘削（一時掘削）にあわせ、未調査区の工事立会を行った（13・16 ～ 19 次）。立会調査は、第 1 面まで重機による掘削を行い、遺構検出、写真撮影後、上端のみ図面にスケッチし、可能な限り遺構掘削を行った。遺構の深さと覆土を記録し、遺物を遺構ごとに取り上げた。その後、第 2 面までの包含層を人力と重機で掘削し、遺物採集した後、各面の調査を繰り返した。なお、平成 28（2017）年度末には換気塔部分の発掘調査 (14・15 区) も実施した。調査最終年度の平成 29 年度には、20 区を最後に西工区の調査は終了し、東工区の調査のみとなった。本体部分、出入り口部分、埋設管工事関係や鋼矢板の設置等、日中長時間解放できない箇所や夜間調査となった箇所について、工事の進捗状況にあわせ、本調査や立会調査を行った。調査が終了したのは、平成 29(2017) 年 11 月 21 日である。なお、民間店舗との連絡通路接続箇所、この事業に伴う支障埋設管の移設工事については、工事立会で対応した。

調査区については Fig.1・2、調査日程や調査内容については詳細を表 1 に示す。調査面積は調査区上端で、合計 2,630㎡であった。出土遺物量はコンテナケースにして総計 1,030 箱である。

遺構面は、西工区で 4 ～ 6 面、東工区で 3 面を設定し、各面の標高は Fig.2 に示すとおりである。第 1 面は道路面より約 1.0m 下で検出し、3・9・12・15 区が最も高く、標高約 4.8m を測る。西端は 4.0m、東端 3.4m で、灰褐色土、灰茶褐色粘質土の上面である。最下層の砂丘面（明黄褐色砂）は、9 区付近で 3.4m と最も高く、西端、東端ともに標高 3.0m と徐々に傾斜する。

調査区は博多遺跡群の南西端、博多濱の砂丘 I とされる内陸側最奥部に立地する。旧地形では西側に那珂川が迫り、調査区西端では、旧河川の堆積も確認される。調査区で出土した最も古い遺物は縄文時代早期の異型石器である。遺構の初現は、弥生時代中期初頭から中葉にかけての甕棺墓群であり、砂丘 I の最も高い地点から内陸にかけて、列埋葬が行われる。次の弥生時代終末から古墳時代初

頭にかけては、調査区全面で竪穴住居跡、土坑等を検出し、遺物も大量に出土する。鍛冶関連の鉄片、碧玉の未製品のほか、畿内、山陰、瀬戸内、東海、南九州など、様々な地域の土器も出土している。中・後期については、遺物、遺構ともに激減するが、古代になると、竪穴住居跡、井戸、土坑が検出され、青銅製の丸鞆や権、墨書土器、緑釉陶器や越州窯系青磁、銅の坩堝等が出土する。調査区より約 300m 東側に官衙域が比定されており、その関連がうかがえる。11 世紀後半から 12 世紀前半にかけて、ほぼ調査区全域でこの時期の遺構が検出される。貿易拠点としての機能をもつ中世前半期の博多が最も繁栄した時期であり、本調査もそれを裏付けるものであった。また、ガラス坩堝の破片の出土量は、これまでの博多遺跡群の出土量と比較しても突出し、原料と考えられる珪石や製造過程の所産と考えられる鉛塊も出土しており、中世のガラス製作の工程を知るうえで貴重な資料である。さらに、鉄滓や鍛造剥片、粒状滓等の出土は鍛冶工房の存在を示し、廃棄土坑から出土した炭化種実は当時の食生活を示す。13 世紀になると、遺構・遺物は減少し、鎮西探題との関連が窺える 14 世紀前半の上師器の大量廃棄土坑を最後に遺構は断絶し、再び確認されるのは近世になってからである。調査対象範囲の東端は、先に述べたように房州堀の存在が想定され、22 区、31 区で房州堀の西側の肩（落ち）を確認することができた。ただ、それは人工的な掘方の痕跡というよりは、砂丘の落ちを確認したのみで、房州堀の構造については明らかになっていない。また、東工区下水道管理設の際の立会調査で地形の緩い傾斜が確認され、房州堀東側の肩は当該箇所に想定することができる（Ⅲ -33 その他の調査（3）Fig. 3）。なお、近世の井戸や溝、土坑からは瓦が大量に出土し、旧町名である瓦町の由来が窺える。

調査区一覧

調査区	調査地点・工事内容	調査方法	調査担当者	整理担当者	調査期間	調査面積	遺構面
1区	西工区	試掘調査	星野	星野	20141104～20141106	－	遺構なし
2区	西工区	発掘調査	大森・服部	大森	20141009～20141225	60.34m²	5面
3区	西工区	発掘調査	楠石・星野	星野	20141001～20150123	153.22m²	5面
4区	西工区	発掘調査	井上	井上	20141001～20141120	28.80m²	5面
5区	東工区	発掘調査	井上	井上	20141110～20141219	41.54m²	4面
6区	東工区	発掘調査	服部・大森	服部	20141212～20150131	37.20m²	3面
7区	西工区	試掘調査	星野	星野	20150303	－	遺構なし
8区	西工区	発掘調査	服部・加藤	加藤	20150401～20150731	138.49m²	5面
9区	西工区	発掘調査	星野	星野	20150401～20150828	170.80m²	5面(一部6面)
10区	東工区	発掘調査	加藤	加藤	20150803～20150924	51.51m²	3面
11区	東工区	発掘調査	星野	星野	20150601～20150626	16.60m²	3面
12区	西工区	発掘調査	加藤	加藤	20151013～20151115	245.38m²	2面
13区	西工区 一時掘削	工事立会	加藤	加藤	20161114～20170509	94.00m²	1面
14区	西工区 換気塔	発掘調査	星野	星野	20170324～20170403	64.10m²	2面
15区	西工区 換気塔	発掘調査	加藤・井上	加藤	20160322～20160419	83.10m²	4面
16区	東工区 一時掘削	工事立会	星野(H27)・加藤(H28)	星野	20170126～20170413	143.85m²	3面
17区	東工区 欠損防護壁	工事立会	星野	星野	20170221～20170224	24.24m²	3面
18区	東工区 一時掘削	工事立会	星野(H27)・加藤(H28)	星野	20170228～20170420	211.30m²	3面
19区	西工区 一時掘削	工事立会	加藤	加藤	20170407～20170518	142.00m²	1面
20区	東工区 一時掘削	工事立会	井上	井上	20170510～20170517	157.80m²	2面
21区	東工区 出入口	発掘調査	井上	井上	20170803～20170904	64.12m²	3面
22区	東工区 一時掘削	工事立会	井上	井上	20171101～20171121	102.30m²	2面
23区	西工区 中間杭	工事立会	星野(H27)・加藤(H28)	星野	20150922～20160809	90.63m²	3面(一部4面)
24区	西工区 SMW	工事立会	星野(H27)・加藤(H28)	星野	20151126～20160109	173.24m²	3面(一部5面)
25区	西工区 合流管(H27)	工事立会	星野	星野	20150917～20150918	16.06m²	5面
26区	西工区 合流管(H28)	工事立会	加藤	加藤	20160518～20160829	63.10m²	4面
27区	東工区 中間杭(H27)	工事立会	星野	星野	20160106～20160109	27.28m²	3面
28区	東工区 中間杭(H28)	工事立会	加藤	加藤	20160519～20160604	22.30m²	3面
29区	東工区 GW(H27)	工事立会	久住	星野	20151127～20151221	87.60m²	3面
30区	東工区 GW(H28)	工事立会	加藤	加藤	20160514～20160819	83.00m²	3面
31区	東工区 南占用土留	工事立会	井上	井上	20170607～20170609	36.40m²	3面

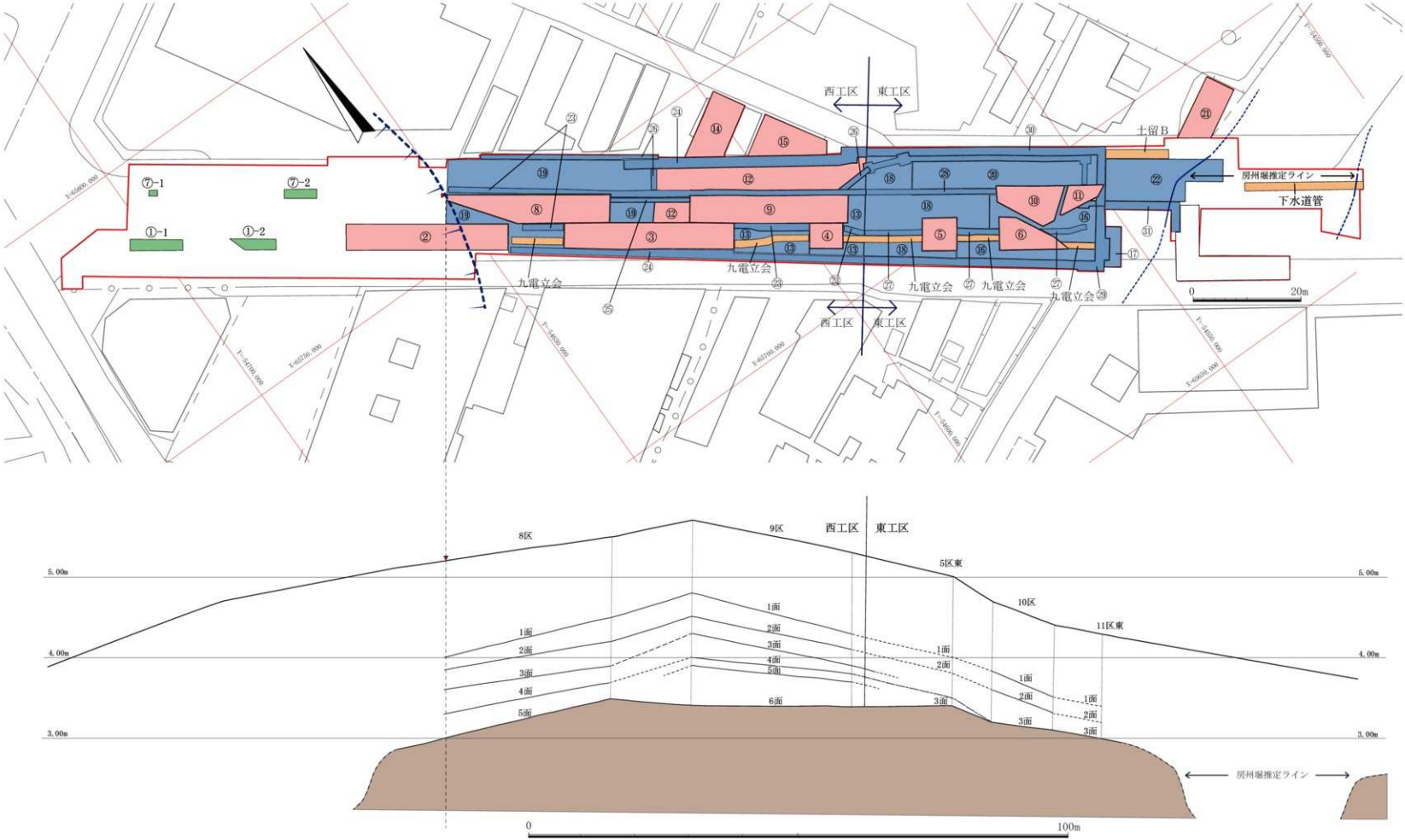


Fig. 2　調査区位置図および土層断面模式図（平面図:S=1/600、土層断面模式図横方向:S=1/600、縦方向:S=1/40）

2. 1区の調査

1）概要（Fig.1　Ph.1 ～ 8）

1区は、西工区の西端、旧地形の博多湾の砂丘Ⅰの西側に立地する。周辺の過去の試掘状況からは、博多遺跡群の西側を流れる旧那珂川が砂丘Ⅰの西側で流れを変え、北側に入り込んでいる状況が確認でき、1区はその河川内である可能性が考えられた。そのため、先行して試掘調査を行い、遺構の有無を確認したかったが、祇園町西交差点は交通量の多い場所であったため、占有の許可がおりず、発掘調査を行う2～6区の南側2車線の占有を確保してからの試掘調査となった。調査は 2014 年 11 月 4 日と 6 日に行った。

試掘は2箇所設定し、事業主よる舗装剥ぎ取り、路盤掘削・搬出をした後、重機による掘削を行った。埋設管（Ph.5・6）を避けての実施となり、試掘箇所および土層図は Fig. 1 に示す。2箇所ともに上層よりアスファルト舗装、路盤、海砂（埋土）、煉瓦・バラスが混入する黒色粘質土が、トレンチ2（Ph.6）では道路面より 1.7m 下、トレンチ1（Ph.2・3）では 2.2m 下まで堆積する。50cm 程度の傾斜で北側に向かって落ち込む状況である。この黒色粘質土からは遺物は全く出土しない。その下に約 70cm 程度の土師器の小片を含む灰黒色粘質土および灰色粘質土が堆積し、トレンチ1からは人頭大の丸みを帯びた花崗岩が出土する（Ph.4）。粘質土は均質で、ブロック状の堆積等は見られず、人為的な要素は伺えない。河川による自然堆積と考えられる。トレンチ2ではその下に花崗岩、小円礫を含む灰色砂質土が堆積する。なお、トレンチ2では、黒色土の掘り込み（Ph.8）が灰黒色粘質土の下層より確認できるが、覆土は炭化物が多く、土に締まりがなく、遺物も出土しなかった。人為的なものか不明である。そして、道路面より 3.0m 下は、黄色砂、黄灰色砂が堆積し（Ph.3・7・8）、摩滅した土師器の小片が出土する。遺物の時期は不明である。

試掘調査より、1区は河川堆積であることが判明したため、発掘調査は不要とした。なお、北隣の7区でも同様の結果を得ており、本調査区における西端の地形については、7区で詳細を述べる。また、東側に位置する2区の調査で中世期の生活域の北限と河川との地形変換ラインを確認している。

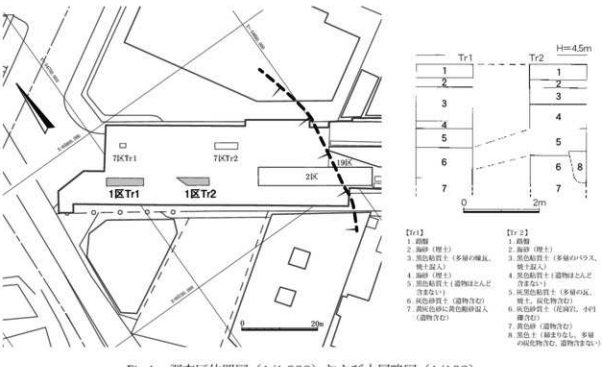


Fig.1　調査区位置図（1/1,000）および土層略図（1/100）

Ph.1　1区試掘状況（西から）

Ph.2　トレンチ１西側上層（南から）

Ph.3　トレンチ１西側（南から）

Ph.4　トレンチ１西側花崗岩出土状況（西から）

Ph.5　トレンチ１東側水道管検出状況（東から）

Ph.6　トレンチ２北側電気管検出状況（東から）

Ph.7　トレンチ２南側（北から）

Ph.8　トレンチ２南側下層（北西から）

3. 2区の報告

1）各遺構検出面の概要・基本層序

基本層序

調査区の中央やや北側に調査区の形に則して設定したトレンチベルトにおける土層実測図をFig.1に示している。本調査区においての基盤は砂の堆積であり、砂丘砂上に古墳時代～近世までの文化層が形成されている。この砂丘砂および文化層は調査区全面で確認されたのではなく、南東部を中心に検出され、北西部は近世以降の文化層および河川性の砂の堆積が確認できた。ただ、本調査区においては、地表面から約2.5m、標高にして2.5m以下の掘削は周囲を取り囲むH鋼矢板が傾く恐れがあったため、標高2.5m以下に達しないと検出できない大半の河川性の砂層部分はごく一部の確認にとどまっている。この層の堆積状況は地形を考える上でも確認する必要があったため、一部許可をもらい、試掘トレンチを設け河川砂堆積層、砂丘砂が検出される部分までの深さ等の確認を行った（Fig2）。その結果、調査区北西部は近世以降の堆積土の下は河川堆積が厚く続き、近世以前の文化層が存在していないことが分かった。本調査区と西側の現キャナルシティとの間に旧那珂川の河道があることが周辺の調査状況から確認されていることも考慮すると、本調査区において検出された河川堆積も一連の堆積ととらえてよいものと思われる。したがって、本調査区では南東側に古墳時代以降の文化層が近世以前の砂丘砂上に堆積する整地層上に北西側に広がる河川まで形成され、河川部分へは近世以降に生活域が拡大していったものと考えられる。

各遺構検出面の概要

1）第1面（Fig.3　Ph.3）

標高4.2mで設定した遺構検出面で、地表面から約80から100cm下にあたる。近世の遺構を検出している。部分的に後世の開発により北西部の遺構面は破壊されている。この面では河川砂が見られず、旧河川部分には近世の包含層が堆積し、一部遺構を形成している（SK020002）ことから、近世に大規模な埋め立てが実施され生活域を拡大していったものと考えられる。

2）第2面（Fig.4　Ph.4）

第1面から20cmほど掘り下げた標高4.0mで設定した遺構検出面である。格子目叩きの瓦が出土する井戸等が検出されており、中世後半から近世に帰属するものと考えられる。

3）第3面（Fig.5　Ph.5）

第2面から30cmほど掘り下げた標高3.7mで設定した遺構検出面である。井戸・ピットを中心に遺構が検出されているが、遺構内から時代を特定できるような遺物が少なく、包含層内に含まれる遺物等から中世の前半に帰属する可能性がある。

4）第4面（Fig.6　Ph.6）

第3面から30cmほど掘り下げた標高3.4mで設定した遺構検出面である。竪穴住居跡が検出され、出土土器の形態から古墳時代前期に帰属すると考えられる。

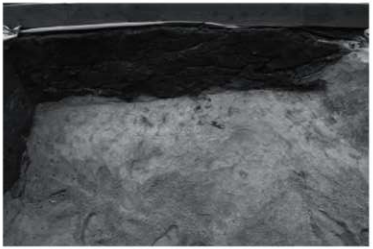
5）第5面（Fig.7　Ph.7）

第4面から30cmほど掘り下げた標高3.1mで設定した遺構検出面である。遺構の分布や出土する遺物は多くはないが、弥生時代以前の遺構・遺物が見られないことから、古墳時代内に収まるものと考えられる。

Fig.2　土層観察トレンチ位置略図（S=1/200）

Fig.1　土層実測図（S=1/50）

Ph.2　土層堆積②（調査区中央）



Ph.1　土層堆積①（トレンチ西側）

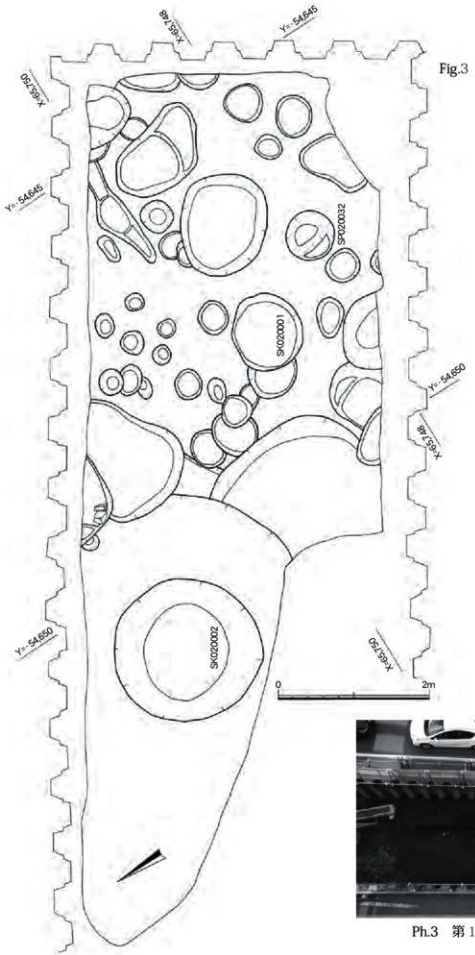


Fig.3　第 1 面遺構全体図（S=1/50）

Ph.3　第 1 面全景（南西より）

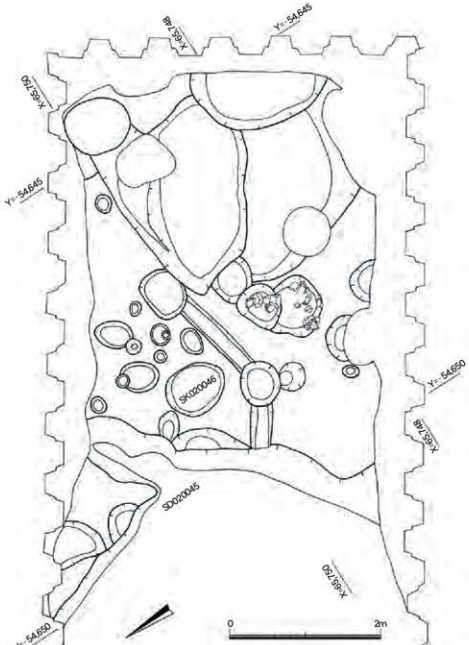


Fig.4　第２面遺構全体図（S=1/50）

Ph.4　第２面全景（南西より）

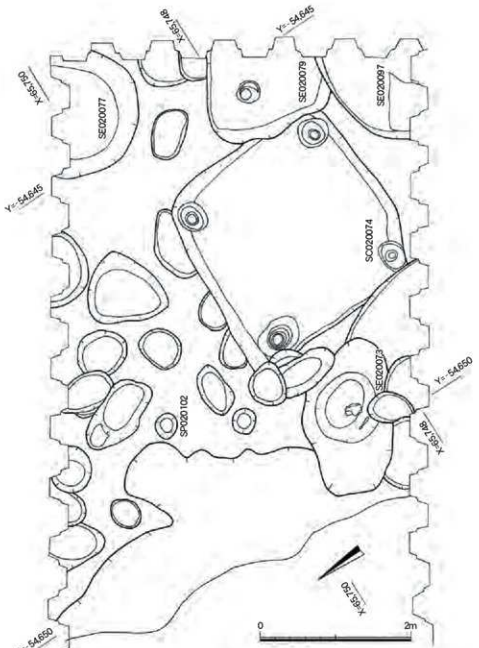


Fig.5　第３面遺構全体図（S=1/50）

Ph.5　第３面全景（南西より）

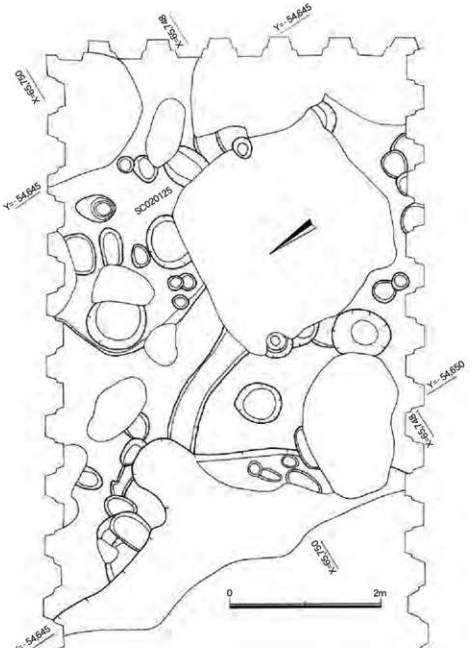
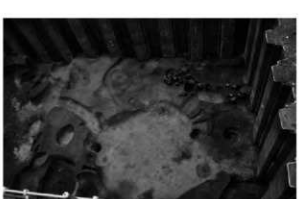


Fig.6　第 4 面遺構全体図（S=1/50）



Ph.6　第 4 面全景（南西より）

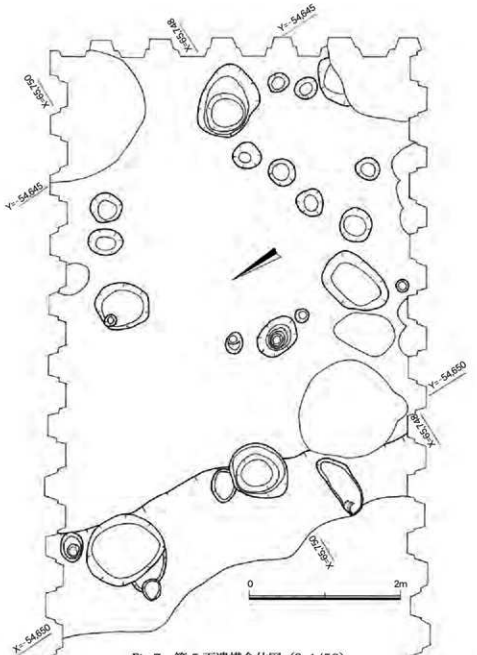
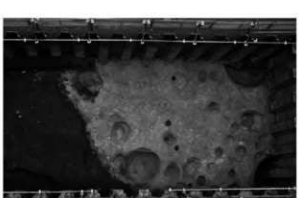


Fig.7　第５面遺構全体図（S=1/50）



Ph.7　第５面全景（南西より）

2）遺構と遺物

第203次調査の2区では、表土を除去した際に調査区の西側の大部分は黒褐色包含層が堆積していたが、この堆積は河川による侵食後、近世以降に埋め立てが開始され、近代以降も整地が行われた痕跡と考えられた。この近世以降の整地層は、土量が膨大になることが予想された上に、場外持ち出しも困難な状況にあったことや、近代以降の開発による破壊が多く確認されたため、場合に応じて調査が必要と判断された場合のみ一部確認を行うにとどめざるを得なかった。このため、調査の中心は近世以前の遺構が確認できた南東側の一部となったことから、当初想定されていた調査面積152.5㎡のうち約60㎡の調査を行うこととなった。当調査区では5つの遺構面を確認し、竪穴住居跡・土坑・井戸・溝などの遺構とパンケース約53箱の遺物が出土した。ここでは、主要な遺構と遺物について、遺構の種類別にその概要を記す。

（1）竪穴住居跡（SC）

竪穴住居跡は古墳時代前期前半～中頃に属する1基を検出した。

SC020125（Fig.8　Ph.8・9）　調査区南東隅、4面上で検出した。検出された住居跡は、2隅のみ柱穴も2か所の検出にとどまっているため、規模・形状に関しては、4本主柱穴を有する一辺4.42m四方の方形住居跡と推定されるが正確なところは不明である。住居の帰属時期以降の生活痕跡によりほとんどが破壊されている状態であり、床面が確認できる部分が少ない。床面は貼り床の痕跡等は確認できなかった。床面付近より古式土師器が多数出土している。

出土遺物（Fig.9・10　Ph.10・11）　1・2は甕である。1は残存高21.2㎝、口径16.6㎝を測る

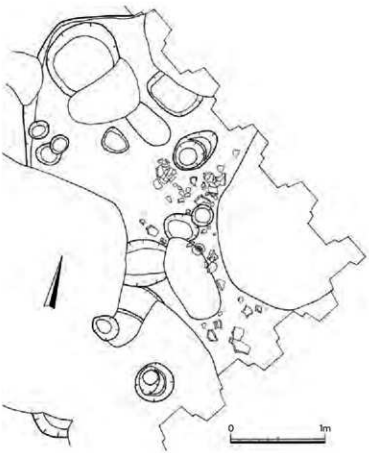


Fig.8　SC020125実測図（S=1/40）

Ph.8　SC020125全景（南西より）

Ph.9　SC020125遺物出土状況（南西より）

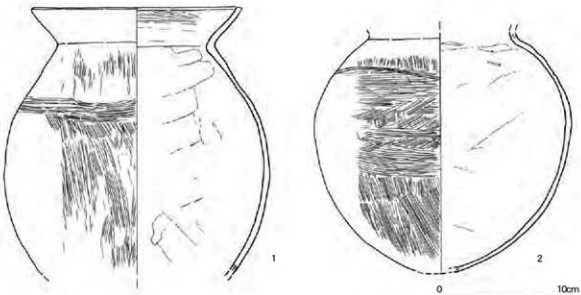


Fig.9　SC020125 出土遺物実測図①（S=1/3）

Ph.125　SC020125 出土遺物①

口縁部～胴部下半までの破片資料。胴部中位に最大径をもつ楕円形の胴部からくの字に口縁部は立ち上がり、口縁端部は内面に段が見られる。外面はハケメ調整で、概ね縦方向で施されているが、肩部は一部横方向で施される。内面は板ナデ調整で、やや板ケズリ調整に近い印象を受ける。2 は残存高 19.1㎝を測る胴部片である。胴部最大径は中位～やや上位である。外面はハケメ調整、内面は板ナデ調整である。3 は二重口縁壺である。残存高 34.2㎝、口径 17.4㎝を測る。外面はハケメ調整、内面は板ナデ調整である。4 は、残存高 14.6㎝、口径 12.6㎝を測る長頸壺である。球状の胴部から直立気味に長く口縁部が立ち上がる。外面は、口縁部は横ナデ調整、胴部上半は縦方向の細かいハケメ調整後ナデ調整、胴部下半から底部にかけては板ケズリあるいはハケメ調整後ナデ調整が施される。丁寧な作りをしているが、一部ナデ調整が不十分な部分があり、ハケメ調整の痕跡や工具痕跡が見受けられる。内面は丁寧なナデ調整が施される。5~7 は小型丸底壺である。5 は器高 10.5cm 、口径 12.6㎝を測る完形の壺である。中位に最大径を測る扁球形の胴部から長く外傾する口縁部をもつ。外面胴部上半は細かいハケメ調整後ナデ調整、底部から胴部下半は板ケズリ調整後ナデ調整が施されている。丁寧な作りをしているが、一部ナデ調整が不十分な部分があり、ハケメ調整及び板ケズリ調整の痕跡が見受けられる。6・7 は口縁部が欠損しているが、4 と同様の形状を呈するものと考えられるも、7 は若干肩が張っておいるため、やや古い可能性がある。出土遺物の特徴から古墳時代前期前半～中頃、久住氏の編年によるところのⅡC 期～ⅢA 期古相に属するものと考えられる。

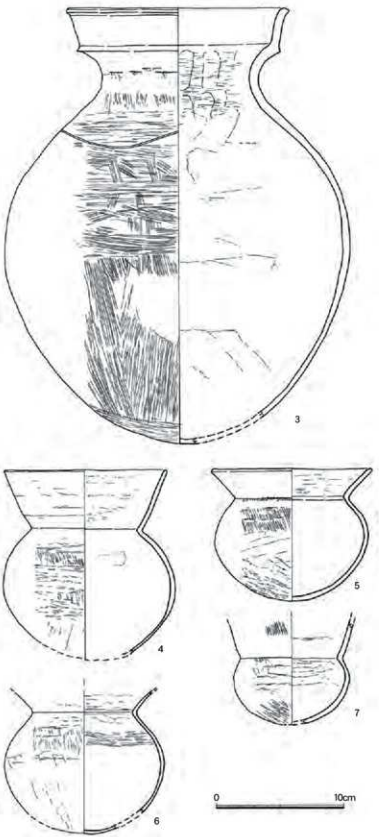


Fig.10　SC020125 出土遺物実測図②（S=1/3）

Ph.11　SC020125 出土遺物②

SC020074（Fig.11　Ph.12・13）　調査区南西、3面上で検出した。一辺2.5mの正方形に近い形状を呈した住居跡で、四隅に柱穴を結有する。時期を特定する土器等は見られず、遺構上面からは多くの石材が集積している状況が確認できた。石材は、住居の廃棄に伴い遺棄されたものかは不明であるが、南から北に向かってやや傾斜して検出されている。床面は貼り床の痕跡等は確認できなかった。

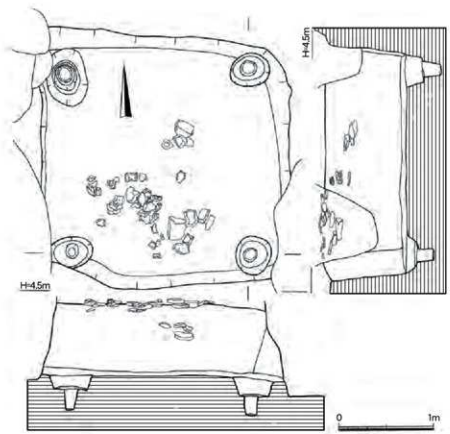


Fig.11　SC020074 実測図（S=1/40）

Ph.12　SC020074 石材検出状況（南西より）

Ph.13　SC020074 完掘状況（南より）

(2) 井戸 (SE)

井戸は中世から近世に至るまでのもの4基を検出した。井側は1基が瓦組、そのほかは素掘りのものである。標高1.6m以下の掘削は、矢板の倒壊の可能性があるため、これ以上深く掘削することはできなかった。

SE020097 (Fig.12　Ph.14)　第1面南西隅で検出した。後世の撹乱により、4分の1ほどしか検出されなかった。掘方は1.8~2.0mほどの円形を呈するものと推察される。井筒は瓦組であるが、

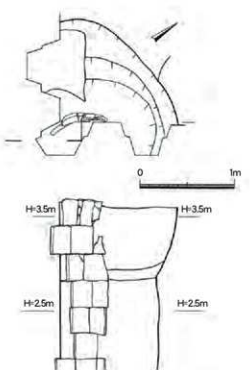


Fig.12　SE020097 実測図 (S=1/40)

Ph.14　SE020097 (東より)

Ph.15　SE020073 (南西より)

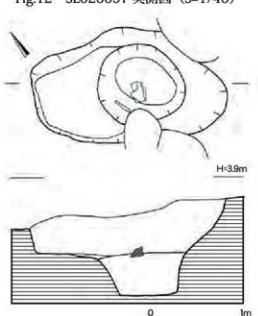


Fig.13　SE020073 実測図 (S=1/40)

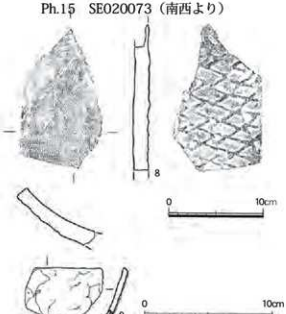


Fig.14　SE020073 出土遺物実測図 (8:S=1/4、9:S=1/3)

その規模は不明。使用された瓦は長さ 30㎝、幅 25㎝、厚み 3㎝を測る。時期を特定する遺物は確認できないが、井側に使用されている瓦から近世に帰属するものと考えられる。

SE020073(Fig.13　Ph.15)　第 2~3 面の南西で検出した。中世~近世にかけての井戸である。1.9 × 1.2m の楕円形の掘方で、井筒底面までの深さは 1.0m を測る素掘りの井戸である。ただ、井筒部分は径約 50㎝の円形に黒色砂質土が堆積しており、その形状から見ても桶組が使用されていた可能性は否定できない。

出土遺物(Fig.14)　丸瓦片 (8) の出土を確認した。背面 (凸面) には粗めの格子目叩き、谷部 (凹面) は布目の痕跡が見られる。焼成はやや甘い。9 は鉄鍋の口縁部片である。破片のため全形は不明である。**中世後半~近世の所産と考えられる。**

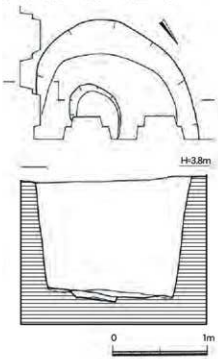


Fig.15　SE020077 (S=1/40)

Ph.16　SE020077 (北東より)

Ph17　SE020079 (南東より)

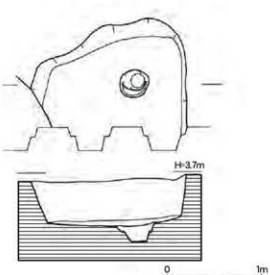


Fig.16　SE020079 (S=1/40)

Ph.18　SE020079 出土遺物

Fig.17　SE020079 出土遺物実測図 (10:S=1/2、11:S=1/3)

SE020077（Fig.15　Ph.16）　第３面の北隅で検出した。全体の約２分の１の検出にとどまり、残りの半分は調査区外に広がっている。規模は 1.7~1.9m の掘方を持ち、井筒部分は直径 50cmを測る。井筒には木材の痕跡は見られないが、桶組の可能性が考えられる。遺物の出土はない。検出面と形状から中世の井戸と考えられる。

SE020097（Fig.16　Ph.17）　第３面の東隅で検出した。全体の約３分の２の検出にとどまり、残りの部分は調査区外に広がっている。規模は 1.7~1.9m のやや楕円形を呈する掘方を持ち、井筒底面までの深さは 0.8m を測る素掘りの井戸である。直径 50cmを測る井筒部分は木材の痕跡は見られないが、形状や黒色砂質土が堆積していることから桶組の可能性も考えられる。

出土遺物（Fig.17　Ph.18）　10 は、ガラスが付着した土塊片である。付着している土塊片の胎土には直径 2mm 程度の白色砂粒が多く含まれており、凹凸が著しい。中世博多においてガラスの坩堝として使用された水注の胎土・形状とは大きく異なる。ガラスの色調も濃緑色 ~ 淡緑色を呈し、中世ガラスとは若干違いが見られ、近世以降の可能性が高い。11 は、滑石片である。低い高台に薄い底部をもつ形状から碗か坏等、器の模造品と考えられる。時期は不明。

(3) 土坑（SK）

SK020001（Fig.18　Ph.19）　第１面で検出した土坑である。平面形は直径約 1m を測る円形で、底面までの深さは 17cmと浅い。埋土は暗黒灰色砂質土で、石が多く堆積している。一部風化した花崗岩が見られるほかは被熱の痕跡はない。石材は西から東へと傾斜しており、西側から投げ込まれた可能性が考えられる。石材の間からは鉄製の刀子や、須恵器や土師皿の小片が出土した。これらの遺物の特徴から近世の所産と考えられる。

出土遺物（Fig.19）　12 は刀子である。残存長 17.3cm で、柄に近い部分に木質の残存が確認できる。近世の所産と考えられる。

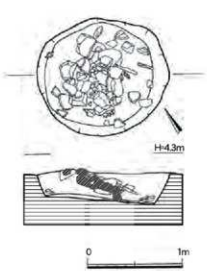


Fig.18　SK020001（S=1/40）

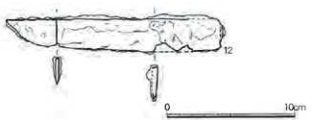


Fig.19　SK020001 出土遺物実測図（S=1/3）

Ph.19　SK020001（東より）

SK020046（Fig.20　Ph.20）　第２面で検出した土坑である。平面形は 0.8㎝× 0.6㎝の楕円形を呈し、底面までの深さは 3-5㎝と浅い。埋土は暗灰色砂質土で、土師質の甕がつぶれた形で検出された。遺物廃棄土坑の一種の可能性がある。

出土遺物（Fig.21　Ph.21）　13 は、土師器の甕である。推定口径は 20㎝を測る。胴部中央に最大径をもつ楕円の胴部を有していると考えられ、緩やかに外湾する口縁部に達する。内面調整はヘラケズリ調整、外面は胴部がハケメ調整、口縁部がナデ調整で仕上げられる。外面に一部煤の痕跡が確認される。形態から６世紀後半～７世紀前半頃と考えられるが第２面検出の他遺構の時期とずれがあり、第２面より下の遺構である可能性がある。

（4）溝（SD）

SD020045（Fig.22　Ph.22）　近世の溝状遺構を第２面で１条検出した。埋土は暗灰色砂質土で、瓦が多数出土している。この溝は、調査区の砂丘の際に位置しており、溝よりも南東部が陸側、北西部が海側であったものと推察される。なお、この溝が使用されていた時期にはこの溝を境に地形的な変化が追えたと考えられるが、時を経ずして埋められ、陸地化したと考えられる。

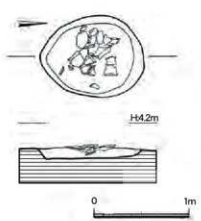


Fig.20　SK020046（S=1/40）

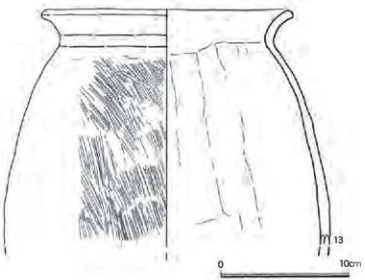


Fig.046　SK020046 出土遺物実測図（S=1/3）

Ph.020046　SK046（北より）

Ph.21　SK020046 出土遺物

Fig.22　SD020045（S=1/40）

Ph.22　SD020045（西より）

（5）その他の遺構（近世の埋立痕跡）（Fig.1.2　Ph.1）

本調査区では、南東部分では中世の生活痕跡等が確認されているが、北西側では近世以降の文化層のみ検出された。土層観察では調査区南東から約 9m 付近から砂丘砂が北西方向に傾斜していることが確認でき、近世の遺物を含んだ灰色砂質土が厚く堆積していた。砂丘砂を追いかけて落ち際の全容を把握したかったが、これ以上の掘削は H 鋼矢板が倒壊する恐れがあったため、一部にとどめざるを得なかった。ただ、調査区中央付近において実施した重機による掘削調査において、トレンチ南東側では標高 2.2m 付近、トレンチ北西側では標高 0.7m 付近で砂層が確認され、砂層より上からは中世期に属する遺物が見られなかったことから、調査区南東から約 9m 付近までが近世以前の生活域であり、それ以北は周辺の調査において確認されているように旧那珂川の河道である可能性が高い。この旧河道は西側の現キャナルシティとの間にあるとされており、調査区近くの 171 次調査ではその河川の侵食が終わった中世後半から近世以降に一気に埋められ平坦面となり、徐々に町域を拡大していったと考えられている。本調査でも土層と堆積遺物から調査区北西側では旧河道の大規模な埋め立てが行われたと考えてられる。埋め立てが行われた時期は出土遺物から 18 世紀前半頃までと推察される。

出土遺物（Fig.23・24　Ph.23・24）　14~20 は土師器である。14 は小型の甕である。口径 11.6㎝、残存器高は 8.5㎝を測る。器壁は厚く、粗い作りになっている。内面はケズリ後ナデ調整、外面の胴部上半はタタキ調整、下半部はハケメ調整を施す。古墳時代初頭に属すると考えられる。15 は小型丸底壺である。口径 10.5㎝、器高 8.4㎝を測る。扁平な胴部から短く外反する口縁部をもつ。口縁端部は内側に段を有している。外面は丁寧なハケメ調整、内面はナデ調整が施される。古墳時代初頭の所産と考えられる。16 は土師器の坏身である。復元口径は 15.8㎝、器高は 3.1㎝を測る。丸みのある底部から緩やかに立ち上がりやや屈曲して外湾する口縁部につながる。内面はナデ調整、外面は概ねナデ調整であるが、一部、底部に回転ヘラケズリ後にナデ調整が用いられる。11 世紀後半 ~12 世紀前半頃の所産と考えられる。流れ込みの可能性が高い資料である。17~20 は皿である。いずれも底部には糸切り痕跡が確認できる。17 は口径 6.7㎝、器高 1.0㎝、18 は口径 9.0㎝、器高 1.4㎝、19 は口径 9.0㎝、器高 1.3㎝、20 は口径 9.0㎝、器高 1.6㎝を測る。いずれも 16 世紀以降の所産と考えられる。

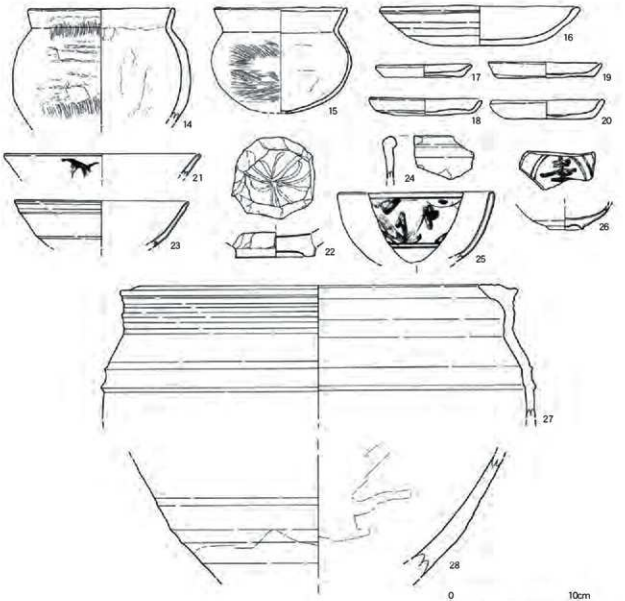


Fig.23　近世埋土内出土遺物①（S=1/3）

Ph.23　近世埋土内出土遺物①

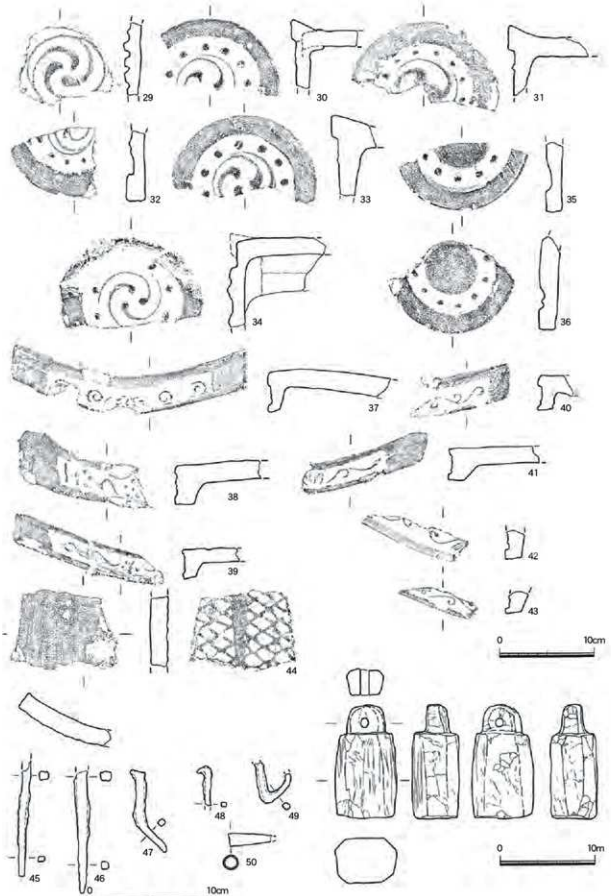


Fig.24　近世埋土内出土遺物②（29~44:S=1/4　45~50:S=1/3 52:S=1/2）

Ph.24　近世埋土内出土遺物②

21 は、越州窯系青磁碗の口縁部片である。小片のため外面に施された連弁文の形状が判別しにくく時期の判断が難しい。22 は越州窯系青磁碗の底部片である。見込み部分に蓮華文状の文様が見られる。側面は粗く面取りされており、瓦玉としての使用が想定できる。23 は、白磁碗の小片である。外傾しながら立ち上がる胴部に短く外反する口縁部をもつ。中世前半期の所産と考えられる。

24 は、壺の口縁部片と考えられる陶磁器片である。口縁部は外側に胎土が折り曲げられており、厚みのあるもので、色調は鮮やかな緑色の釉薬が塗布されている。形状・色調から華南三彩（緑釉）の可能性が指摘できる。中世後半～近世に属するか。

25・26 は染付碗の小片である。25 は口縁部片で外面に草花文が淡く描かれる。26 は底部片で見込み部分に文字が書かれているが判別はできない。近世以降の所産である。

27・28 は陶器片である。27 は水褄として使用が想定できる。近世以降に属するものと考えられる。

29~36 は、軒丸瓦である。29~34 は三巴文瓦である。すべて左回りの巴文である。29 は内区と外区に界線を持つもので、この資料は巴文の頭部が細く先端がとがり気味、尾が互いに接することで界線のような効果を生んでいる。博多遺跡群築港線 2 次調査出土のものと類似しており、17 世紀頃の所産と考えられる。30~32 は巴文の尾が他の巴文に接して界線状を呈するものである。巴文の頭と珠文が大きいのも共通している。17 世紀頃の所産か。33・34 は巴文が内区の文様であるが、巴文の尾が互いに接していないタイプのものである。尾も総じて短い。珠文も大きめのものが付着している。時期は不明。

35・36 は藤巴文の代わりに黒田氏の家紋である白餅を用いている、いわゆる黒餅文瓦である。35 は、周縁が高くなっており、推定の瓦当面径が 14.2㎝。珠文は 10 個前後付くものと想定される。36 も周縁は高く、推定の瓦当面径が 13.8㎝を測る。珠文も 10 個前後付くものと想定され、35 と同様の形状をしていたと考えられる。18 世紀前半代の所産と考えられる。

37~43 は、軒平瓦である。37 は中心飾りに桐葉を用い、左右に唐草文を配するタイプのものである。唐草が中央飾りの上位から派生し、幅広で丸みがあり、それぞれが独立している。瓦幅は 25㎝を測り、高さは 4.2㎝である。38・39 は中心飾りに梅花文や菊花文を用い、左右に唐草文を配するものである。38 は花弁を点状に表現した梅花文を配し、その間を唐草文で繋いでいる唐草文は巻き込みが弱い。博多遺跡群 70 次調査出土のものと類似しており、16 世紀末から 17 世紀前半ごろの所産の可能性がある。39 は、花弁を点状に配した梅花文を中心飾りとして、巻き込みが弱い唐草文を配する。時期は不明。40 は連続する唐草文を有する破片である。中心飾りは宝珠文である可能性がある。41・42 は中心飾りに三葉文を有するものである。41 は上向きの三葉文の下部から唐草文が派生し、2 回反転する。42 は下向きの三葉文で主脈が描かれる。上位から唐草文が派生する。破片資料であるため詳細は不明である。43 は菊花文状の中心飾りを持ち、下位の離れたところから唐草文が派生する。16 世紀頃の所産か。

44 は平瓦片である。外面は粗い格子目叩き、内面には布目文が確認できる。中世後半に属すると考えられる。

45~49 は、鉄釘である。いずれも断面は隅丸方形である。破損しているものや先端部が潰れているもの、中央付近で屈曲しているものなどさまざまであり、使用後のものと考えられる。近世以降の所産と考えられる。

50 は青銅製のキセルの吸い口片である。口元は破損しており全長は不明である。近世の所産と考えられる。

51（Ph.24）は銅銭である。文字・字体の判別は困難であるが、楷書体の熙寧元寶と考えられる。初鋳年は 1068 年。

52 は、滑石製権状製品である。高さ 6.0㎝、厚み 3.3㎝を測る。頂部に穿孔がなされており、棹秤用権と考えられる。同様の形状のものは博多遺跡群 79 次調査で出土しており、古代末から中世前半に比定されており、本資料も同様の年代である可能性がある。

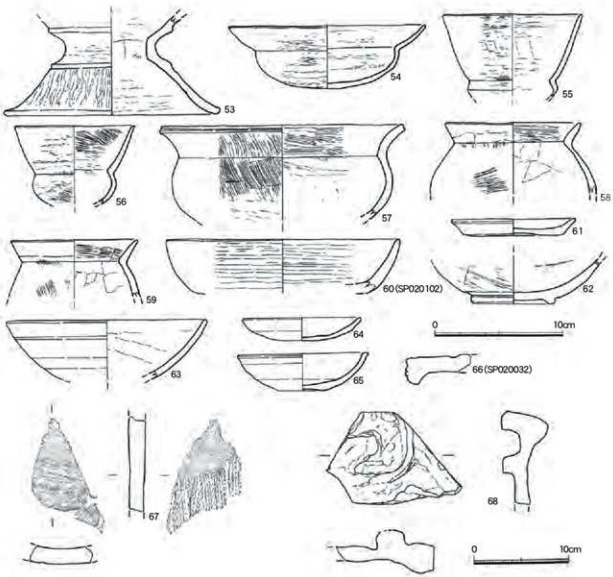
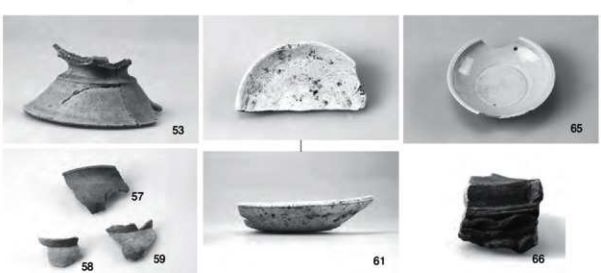


Fig.25　その他の遺構出土遺物（53-65:S=1/3、64-68:S=1/4）



Ph.25　その他遺構内出土遺物

(6) その他の出土遺物

掲載できなかった遺構の遺物及び包含層中の遺物を掲載した。

出土遺物（Fig.25　Ph.25）

土師器　53は鼓形器台の下半部片である。底径17㎝を測る。端部は水平気味に広がる。外面には丁寧なミガキ調整がなされている。古墳時代前期に属する。

54~56は小型丸底壺である。54は鉢形に近く復元口径は15.6㎝を測る。胴部と口縁部の割合がほぼ同じ比率であり、古式を呈する。器壁は薄く、外面は丁寧なミガキ調整、内面も丁寧なナデ調整が施される。古墳時代前期に属する。55・56は胴部と口縁部の割合が1:2ほどで口縁部が長い形状を呈する。外面はハケメ後ミガキ調整、内面はナデ調整が施される。54よりも時期は下るものと考えられる。

57~59は甕である。いずれも古墳時代前期に属すると考えられる。これら土師器はすべて第4面上面に堆積する包含層からの出土である。SC020125に由来する遺物が含まれている可能性がある。60は土師質土器である。口径18.3㎝を測る。61は皿である。第2面から3面にかけての包含層中からの出土で口径9.8㎝、器高1.3㎝を測る。底面は糸切り痕跡が見られる。

瓦器　62・63は、筑前型の瓦器碗である。口縁部を欠損している。高台径を6.6㎝図り、やや粗いつくりである。13世紀頃か。63は復元口径16.0㎝を測る。64は瓦器皿である。口径9.4㎝、器高1.8㎝を測る。内面一面に炭素の吸着が認められ、黒色を呈している。いずれも第2面から3面にかけての包含層中からの出土である。

白磁　65は白磁皿である。口径10.4㎝、器高3.0㎝を測る。丸みのある胴部を持ち、口縁部は横に屈折する。内・外面ともに無文である。11世紀後半~12世紀前半に属すると考えられる。

瓦　66は、軒平瓦片である。瓦当面に3状の重弧文（中央部分が波状文）を基本とし、顎部に押圧がみられるいわゆる「押圧文瓦」である。瓦当面の中央の波状文は各々の間隔が2㎝程度の中波を呈し、顎部押圧は直下から施される。12~13世紀に属すると考えられる。67は平瓦片である。外面に縄目叩きの痕跡が見られる。中世に属する。68は道具瓦の一種と考えられる。

3）小結

本調査区では、古墳時代以降生活域として利用されていることが調査で確認された。さらに、旧那珂川の河道と考えられる落ちが確認でき、203次調査における中世期までの生活域の北限を確認できたとともに、近世期において周辺調査と同様に河道は埋め立てが行われ、徐々に町域を拡大していったことが確認できたことも成果として挙げることができると考える。

4．３区の調査

1）概要（Ph.1~6）

３区は西工区中央、南側に位置する。南北方向 4.7m、東西方向 32.6m の長方形の調査区である。発掘調査に先行して行う土留め矢板設置のため、地下埋設の確認調査を９月 18 日から 20 日まで行った（Ph.3~6）。調査区は現行の道路であったため、18 日は夜間調査となった。矢板のトレンチ幅は、北辺、東辺、西辺は 80cm、南辺は埋設管を確認したため、幅 130cm である。深さは道路面から基本的に約 1.5m まで掘り下げたが、一部 2.0m の地山面まで掘削した箇所もある。これまでの事前調査とこの確認調査の結果より、３区の遺構面は５面を設定した。土留め矢板打設後、重機による表土剥ぎを行い、排土は場外へ搬出した。調査面積は 153.22㎡である。

発掘調査は 10 月１日から翌年の１月 23 日まで行った。排土処理の関係で調査区を２分割し、まず、東側を第１面から第５面まで調査し、排土は西側へ送った。排土は溜まった段階で、その都度、場外へ搬出した。東側の調査を終了後、西側の第１面の遺構検出を行ったが、西端の遺構を明瞭に確認できなかった。そこで、トレンチを設定し、土層観察を行った結果、第３面まで同一の土壌が堆積していたため、西端の第１面、第２面は重機による掘削を行った。第３面で確認したが、西端は複数の井戸が掘削されており、トレンチは井戸の覆土であった。結果、東側の西側半分は第３面からの調査となった。

基本層序は反転した箇所で記録したが、第３面より下は SE030804 が掘り込まれていた。Fig.1 はこの基本層序に上記の確認調査と第３面以下の周辺の遺構面を参考に作成した。

Ph.1　３区遠景（西側２区より）

Ph.2　３区東側１面全景（南から）

道路は中央部が約 5.7m と高く、西側、東側は 5.6m を測る。土層は地表面から深さ約 60cm まではアスファルトとコンクリート路盤、海砂、その下に厚さ 10~20cm 程度の暗茶褐色粘質土、さらにその下に近世の遺物を含む暗茶褐色の砂質土が堆積し、第 1 面に設定した上層よりやや明るく、砂質を帯びた暗茶褐色土へと至る。

第 1 面は標高約 4.5~4.7m（西・東以下同）の暗茶褐色土、第 2 面は 4.4m の茶褐色土、第 3 面は 4.0~4.3m の砂質を帯びた暗茶褐色土、第 4 面は 3.9~4.0m の黄褐色砂質土が層状に混入する灰褐色シルト、第 5 面は 3.6~3.7m の明黄褐色砂の砂丘面である。各遺構面はわずかながら東側から西側へと傾斜する。

第 1 面で検出した主な遺構は、近世の廃棄土坑と古代末から中世 (11 世紀後半~14 世紀中頃) にかけての土坑、ピットである。3 区では、他の調査区と比べ、14 世紀の遺構を少数ではあるが、比較的多く検出した。また、この時期の土坑である大規模な SK030007 には大量の土師器が廃棄されていた。第 2 面は古代末から中世前半 (11 世紀後半 ~12 世紀) を主とした土坑、ピットが調査区全面に広がる。中世博多が最も繁栄した時期であり、これは第 3 面にも続く。第 3 面では、古代、古墳時代前期の遺構も散見でき、西側では漸く 12 世紀前半から中頃の井戸等を検出した。第 4 面では 8 世紀から 9 世紀を主とした古代の遺構が増加し、都城系土器や緑釉陶器が出土する。第 5 面では古代、中世の井戸や土坑、弥生時代終末から古墳時代前期の竪穴住居跡、土坑を検出した。弥生時代終末から古墳時代前期の遺構からは大量の遺物が出土する。また、調査区中央では、弥生時代中期前葉の甕棺墓 6 基と後期中葉の甕棺墓 1 基を確認した。

Ph.3　確認調査（南西から）

Ph.4　3 区確認調査遺構検出状況（南から）

Ph.5　3 区確認調査遺構検出状況（北から）

Ph.6　3 区確認調査埋設状況（西から）

3区からは、弥生土器、土師器、須恵器、緑釉陶器、黒色土器、瓦器、輸入陶磁器、国産陶器のほか、人骨、獣骨、魚骨、石器、鉄器、金属器、銅銭、ガラス製造関連遺物、鉄滓、炭化種実等がコンテナケース 177 箱分出土する。

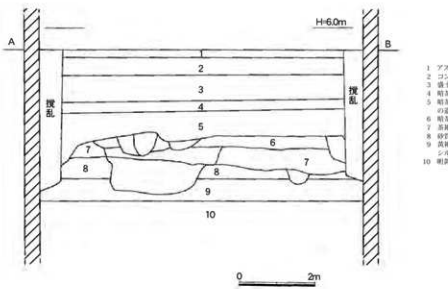


Fig.1　調査区土層実測図（1/100）

Ph.7　調査区土層（東から）

2）第 1 面の調査（Fig.2　Ph.8・9）

第 1 面は炭化物等を含む暗茶褐色土の上面で検出し、標高は東側が 4.7m、西側は 4.5m を測る。検出した主な遺構は土坑 13 基、柱穴である。土坑には大量の遺物が廃棄されており、覆土は主に灰褐色土で炭化物を多量に含んでいた。検出した遺構の主な時期は 11 世紀後半から 14 世紀中頃までの土坑、柱穴である。

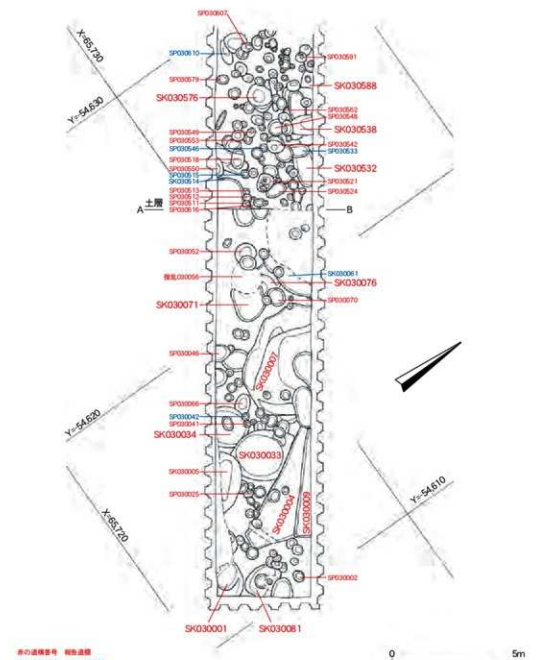
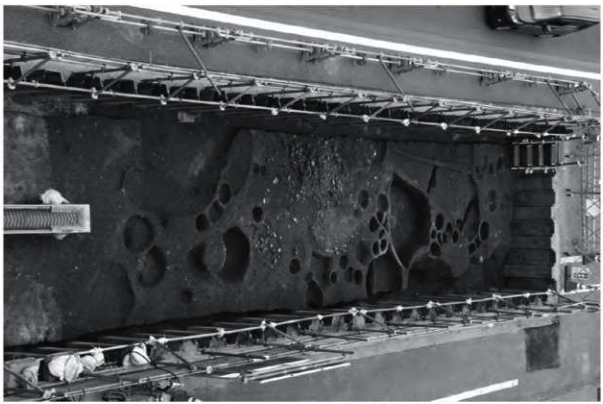
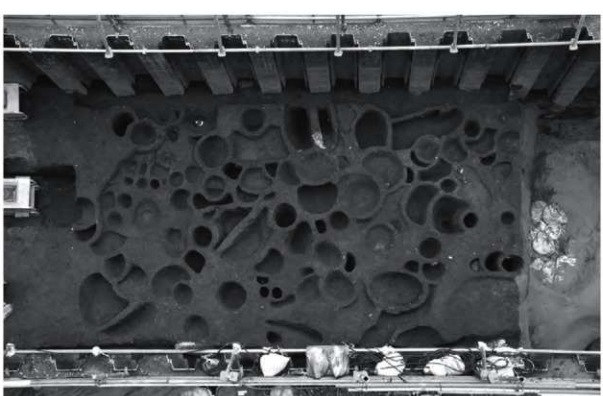


Fig.2　第 1 面全体図（1/150）



Ph.8　東側 1 面全景（西から）



Ph.9　西側 1 面全景（南から）

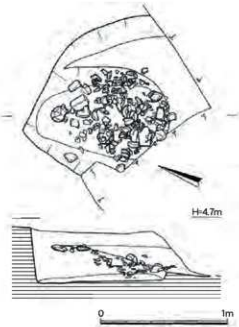


Fig.3　SK030001 実測図（1/30）

Ph.10　SK030001 遺物出土状況（南から）

Ph.11　SK030001 遺物出土状況（南から）

Ph.12　SK030001 遺物出土状況（南から）

（1）土坑（SK）

SK030001（Fig.3　Ph.10 ~12）　調査区南東端に位置し、南東側は調査区外へ延びる。平面プランは楕円形を呈し、長径 1.5m 以上、短径 1.4m、深さは 40cm を測る。壁は直立気味に立ち上がり、底面は平坦である。東側にテラスを有する。覆土は炭化物と赤褐色粒を多く含んだ茶褐色粘質土、茶褐色土を主体とする。大量の土師器小皿と坏が北側から流れ込んだ状態で出土した。わずかに欠損するもの、もしくは接合により比較的完形品に近い形まで復元できた個体が多く、短期間における廃棄と考えられる。

出土遺物（Fig.4）　1~31 は土師器である。1~19 は回転糸切り底の小皿で、口径は 6.5~8.9cm を測り、4・6・8・11・15・19 は外底部に板状圧痕を有する。色調は明橙色を呈する。1~5 は口径に比して高さがあり、体部中位で立ち上がりを急にし、稜線を有するものが多い。2・3・14 は口縁部に煤が付着し、灯明皿として使用される。20~30 は回転糸切り底の坏で、口径は 11.6~13.4cm を測る。全て金雲母・赤褐色粒を含み、明橙色を呈する。31 は回転糸切り底を有する底部片で、体部下半は工具による横ナデを行う。32 は東播系須恵器の鉢の口縁部片で、内面には使用痕が残る。33 は白磁の坏で、口縁部は釉を掻き取り、口禿げとする。底部から体部への立ち上がりと体部中位に段を有し、外面に花文を有する。白色の胎土に青味を帯びた灰白色の釉がかかる。34 は白磁の底部片で、

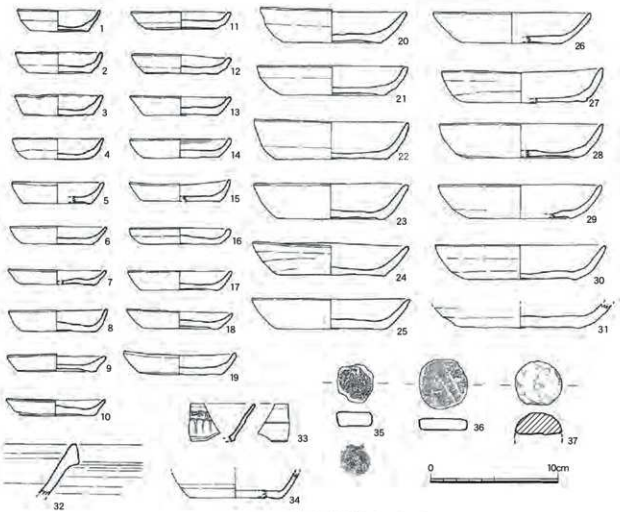


Fig.4　SK030001 出土遺物実測図（1/3）

内面見込みに段を有する。白色の胎土に灰白色の釉が薄く、全面に施釉される。35・36 は瓦玉で重さは 11.3g と 16.5g である。35 は瓦質の平瓦を使用し、凹面に布目、凸面に縄目の叩きが残る。36 は土師質の平瓦を使用し、板状圧痕の間にかすかに布目が残る。37 は砂岩製の石球で、半分欠損する。重さは 24.6g を量る。他に、鉄釘、白磁碗Ⅷ類が出土する。土坑の時期は出土遺物から 13 世紀中頃から 14 世紀前半と考えられる。

SK030004（Fig.2　Ph.13）　調査区東側に位置し、北側は SK030009 に切られる。平面プランは不定形で、東西方向の一辺は 4.8m 以上を測る。深さは 10~15cm である。覆土は炭化物を含み、灰黒色を呈する。

出土遺物（Fig.5）　38~41 は土師器である。38・39 は回転糸切り底の小皿で、口径は 7.6cm、8.0cm を測り、38 は外底部に板状圧痕を有する。40・41 は回転糸切り底の坏で、口径は 11.6cm、12.8cm を測る。38 は金雲母、赤褐色粒を含み、橙色を呈し、他は微細な金雲母を含み、明橙色を呈する。42・43 は瓦器椀で、丸味を帯びた低い高台を付し、内面は粗く磨かれる。44~51 は白磁である。44 は皿Ⅵ類の底部片で内面は火を受け、釉飛びする。45・46 は碗Ⅳ類、47~51 は碗Ⅴ類である。52 は須恵質の平瓦で、凹面には布目が認められ、凸面には縄目叩きを施す。53 は須恵質の丸

Ph.13　SK030004（南から）

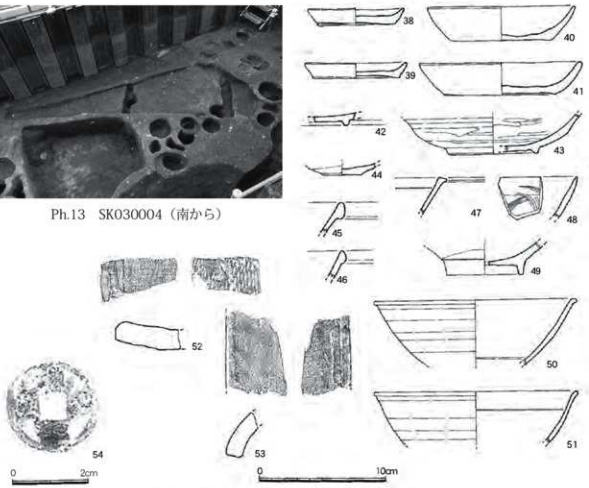


Fig.5　SK030005 出土遺物実測図（1/3・1/1）

瓦で、凸面は丁寧なナデで仕上げるが、わずかに縄目叩きが残る。凹面には細かい布目が残る。54は銹化が進み銭文は不明である。他に龍泉窯系青磁碗、天目碗、鉄釘、甕棺の小片が出土する。土坑の時期はこれらの出土遺物から 12 世紀中頃から後半と考えられる。

SK030007（Fig.6・7　Ph.14 -31）　調査区中央に位置し、北側は調査区外へ延びる。平面プランは隅丸方形を呈し、東西方向は約 4.4m、南北方向は 2.7m 以上を測る。断面は船底状で、壁は緩やかに立ち上がる。深さは 40cm を測る。土師器小皿と坏を主体とする遺物が南側の縁辺から中央に向かって流れ込んだ状態で出土した。土層からは概ね 4 度の廃棄があったことが窺え、2~5 層がこれに当たる。最上層（2 層）は、大量の炭化物や焼土を含んだ暗茶褐色土である。18~30cm で堆積し、縁辺から 0.4~1.0m 離れた中央部に溜まる。中央部のみ廃棄されたことは考え難いため、縁辺部の上部は後世の削平を受けていると思われる。出土遺物は土師器の坏、皿が大半で、幾重にも重なり、大量の一括廃棄が行われる。完形品の土師器の皿、坏はなく、いずれも破損している。使用可能な範囲での欠損品も廃棄されている状況である。なお、出土土師器の総重量は 95.4kgを量る。陶磁器はわずかで、他に瓦器椀、瓦質土器の火舎、須恵質土器、滑石製石鍋、青銅製の責金具、銅銭、鉄滓、ガラス坩堝、イルカ・クジラの骨（Ⅲ -35 参照）が出土する。次の上層（3 層）は、わずかに炭化物を含む明黄褐色土である。南側縁辺部にのみ堆積し、中央部まで達していない。最大厚 30cm を測る。出土遺物は最上層と同じく、土師器の坏、皿が大半で、総重量は 22.8kgを量る。完形の土師皿が 2 点出土する。他に陶磁器の小片、須恵質土器の鉢、花弁文の軒丸瓦が出土する。中層（4 層）

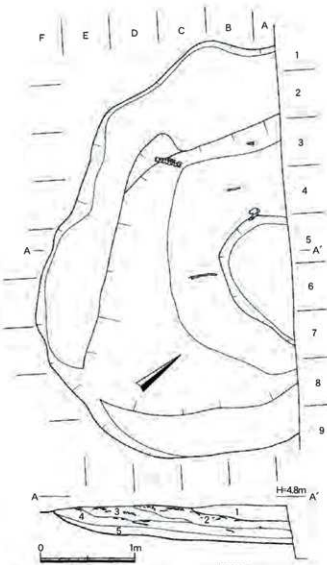


Fig.6　SK030007 実測図（1/40）

は、炭化物や灰、焼土を含んだ暗灰褐色土である。厚さ 20cm で、遺構全体に溜まる。土師器の出土量は最も多く、総重量 114.6kgを量る。完形の小皿が 3 枚出土するがそれ以外は欠損品である。最上層と同様、僅かな欠損であっても廃棄されている。一方、陶磁器は少量で、小破片ばかりである。他に滑石製品や、鉄滓、ガラス小玉 2 点（Ⅲ -34 Fig.22-477、24-535）、ガラス坩堝、イルカ・クジラの背骨、イネとササゲ属アズキ亜属の炭化種子（付編 3 参照）が出土する。下層（5 層）は、粘質を帯びた少量の炭化物を含んだ暗灰褐色砂質土である。厚さ 15cm の層が遺構全体に広がる。南側では拳大から頭大の花崗岩の石材がまとまって出土したが、加工や火を受けた痕跡等は認められない。出土遺物は上層に比べると少なく、土師器の総量は 15.4kgを量る。他に中国の施釉陶器 1 点と滑石石鍋と滑石製の錘、ガラス小玉 1 点（Ⅲ -34 Fig.22-500）、イルカの骨（Ⅲ -35 参照）、イネとオオムギの炭化種子（付編 3 参照）が出土する。出土遺物は Fig.7 に示す通り、50cm 単位の方眼を組み、西から東方向に数字 1~10、北から南方向に英字 A~F とによるグリッド表記を用い、取り上げた。

出土遺物（Fig.8~16　Ph.32・33）55~174 は最上層出土、175~213 は上層出土、214~388 は中層出土、389~426 は

Ph.14　SK030007 土層（東から）

Ph.15　SK030007 土層（東から）

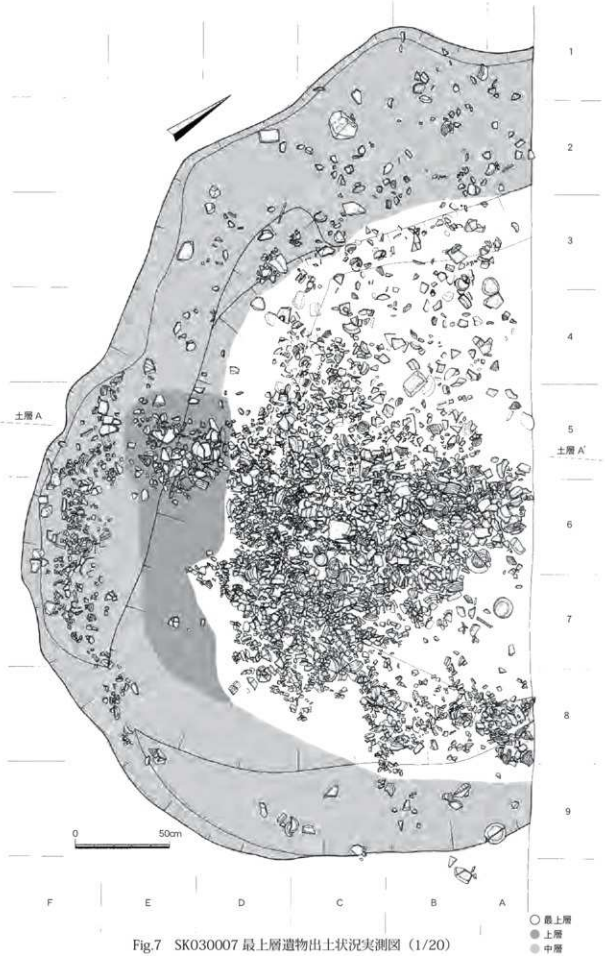


Fig.7　SK030007 最上層遺物出土状況実測図（1/20）

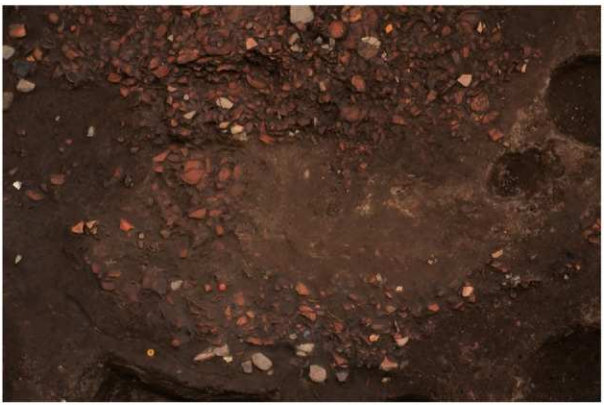
Ph.16　SK030007 最上層（南から）

Ph.17　SK030007 最上層（南から）

Ph.18　SK030007 最上層中央部（南から）

Ph.19　SK030007 貴金具出土状況

Ph.20　SK030007 最上層北側（東から）



Ph.21　SK030007 最上層南側（南から）

Ph.22　SK030007 中層（南から）

Ph.23　SK030007 中層東側（南東から）

Ph.24　SK030007 中層南側（南から）

Ph.25　SK030007 中層南西側（南西から）

Ph.26　SK030007 中層西側（南から）

Ph.27　SK030007 中層南端（南から）

Ph.28　SK030007 中層南端（南から）

Ph.29　SK030007 中層イルカの骨出土状況（西から）

Ph.30　SK030007 中層イルカの骨出土状況（南から）

Ph.31　SK030007 下層（南から）

下層出土の遺物である。

（最上層出土遺物）　55~158 は土師器であり、55~106 は回転糸切り底の小皿である。大きく 3 分類でき、底部が丸味をもって立ち上がるもの（55~57）、底径に比して器高が高いもの（58）、底径に比して器高が低いもの（59~106）に分けられる。55~57 は口径 6.7~7.0cm を測り、底部と体部の境に稜線をもたず、口縁部まで丁寧な回転ナデで仕上げる。底部には回転糸切りの痕跡は残るが、外底部に板状圧痕は認められない。色調は橙色を呈しており、胎土は他の小皿でみられる金雲母を含んでいない。58 は口径 7.4cm、器高 2.3cm を測る。やや雑な回転ナデで仕上げられ、底部と体部の境には段が入り、外底部に板状圧痕は認められない。胎土に金雲母は含まれず、色調は橙色を呈する。59~106 は口径 7.4~9.0cm、器高 1.0~1.8cm を測る。胎土に 69、84、103、106 は少量の赤褐色粒を含む。64、66、69、76、77、90、94、95、96、103、106 の色調は明橙色を呈するが、他は橙色である。107~158 は回転糸切り底の坏で、比較的小型のものと大形のものに分類できる。小型の 107~151 の口径は 11.4~13.5cm、器高 2.4~3.0cm、大型の 152~158 の口径は 14.0~17.0cm、器高 3.4~4.0cm を測る。外底部に板状圧痕を有するものは少なく、108、109、113、116、117、120、122、127、134、135、136、138、139、140、144、145、148、151 であり、中にはすだれ状を呈するものもある。また、109 の内底部と 119、124 の体部外面には指おさえの痕跡が残る。すべての坏が胎土に金雲母を含むが、多量に含むものが 115、なお、赤褐色粒を含むものは 113、114、116、120、122、124、135、144 である。色調は 114、116、120、122、124、134、135、144、150 が明橙色、129、130 が淡橙色、他は橙色を呈する。また、152~158 の大型の坏は 154 のみ外底部に板状圧痕を有する。色調は 152 が明橙色を呈するが、他は橙色である。159 は瓦器椀で、低い偏平な高台がつく。内面は研磨で調整され、ヘラの当て具痕が残る。160 は瓦質土

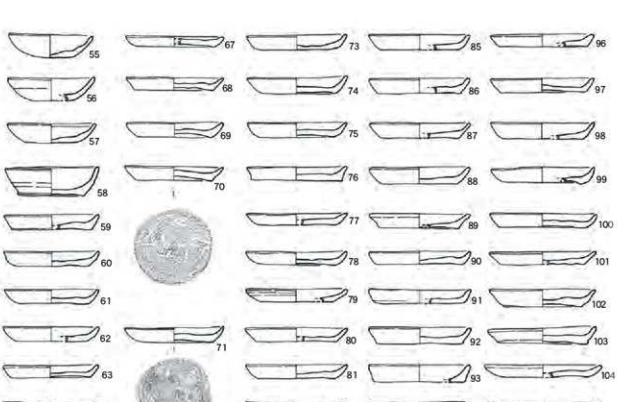


Fig.8　SK030007 最上層出土遺物実測図①（1/3）

Ph.32　SK030007 最上層出土遺物

器の火舎で、菊花文のスタンプを印刻する。161 は須恵質土器の鉢である。体部上位は横方向のナデで調整されるが、底部内面は磨滅が著しく、調整不明である。162 は瓦質土器の鉢の体部片で、外面は磨滅が著しく、縦方向の刷毛目調整がわずかに残る。内面上半は横方向の刷毛目、下半は横方向のナデで調整される。163 は青白磁の合子の蓋で、型押しによる施文を行う。口縁端部の釉を削り取り、内面は露胎である。164 は青白磁の小壺で、肩部に輪状の貼り付けが施される。白色の胎

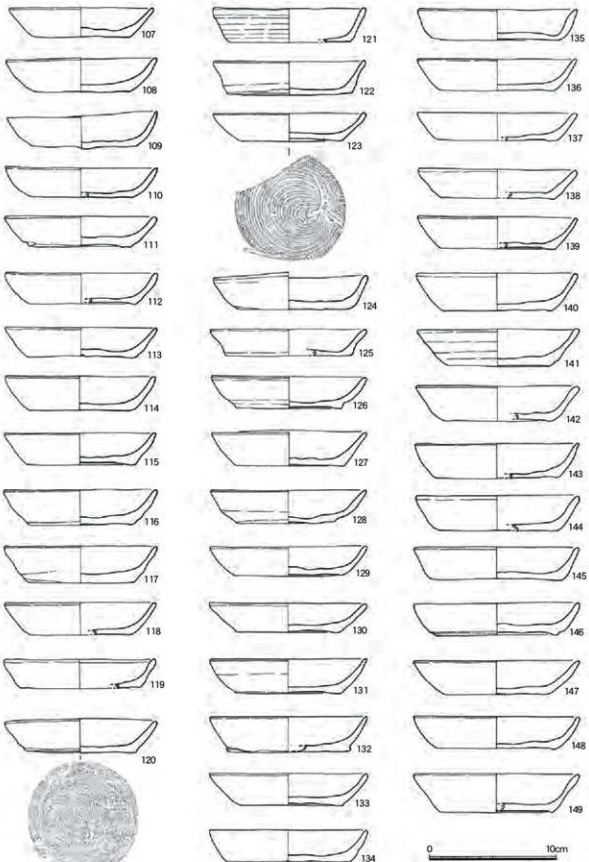


Fig.9　SK030007 最上層出土遺物実測図②（1/3）

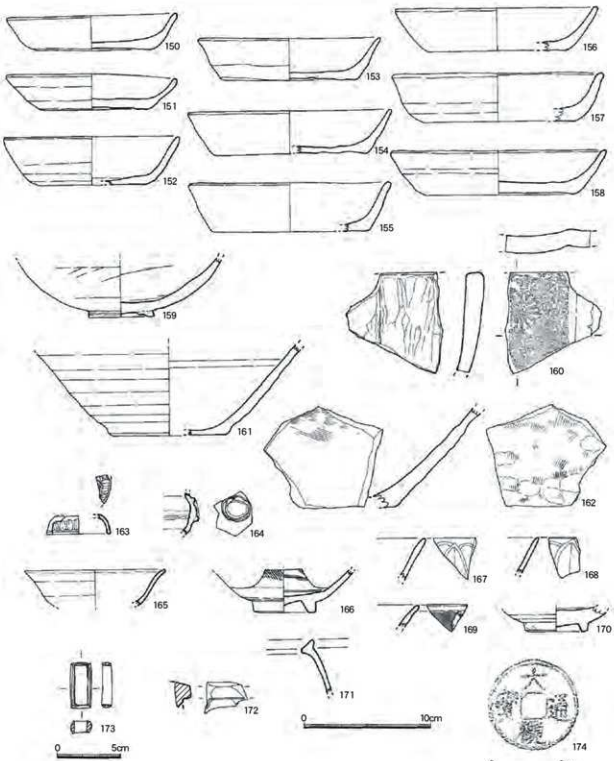


Fig.10　SK030007 最上層出土遺物実測図③（1/3・1/1）

土に青味がかった白色釉がかかる。体部下半は露胎である。165 は白磁碗Ⅸ類の口縁部片、166 は同安窯系青磁碗Ⅰ -1b 類の底部片である。167~169 は龍泉窯系青磁碗Ⅱ -b 類の口縁部片で、弁の中心線に稜をなす鎬蓮弁文を有する。170 は龍泉窯系青磁碗の底部片である。171 は施釉陶器の鉢で、

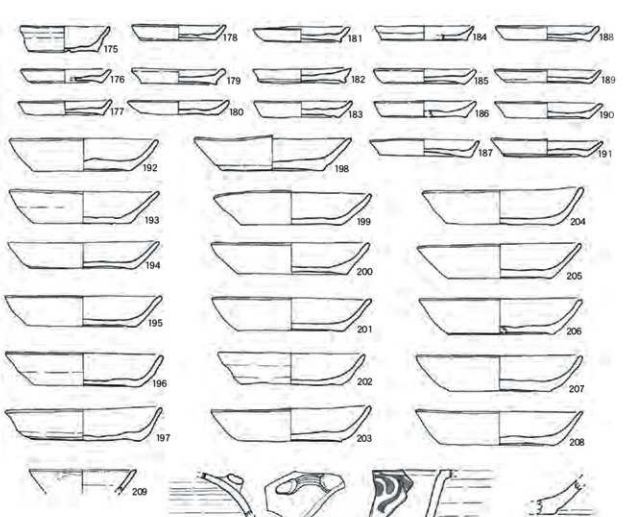


Fig.11　SK030007 上層出土遺物実測図（1/3）

赤褐色の胎土に緑灰色釉がかかる。172 はミニチュアの滑石製石鍋の鍔部分の破片である。173 は青銅製刀装具の責金具で、長方形を呈し、長さ 3.6cm、幅 1.7cm、厚さ 1.0cm を測る。174 は北宋代の銅銭、「大観通寶」（初鋳年 :1107 年）である。

（上層出土遺物）　175~208 は土師器で、175~191 は回転糸切り底の小皿である。小皿は底径に比して器高が高いもの（175）、底径に比して器高が低いもの（176~191）がある。175 は口径 7.0cm、器高 2.0cm、色調は明橙色を呈する。後者は口径 7.1~8.8cm、器高 0.9~1.2cm を測る。底部に板状圧痕を有するものが多く、176、178、180、184、188 は有さない。また、胎土は金雲母をすべて含むが、183、190、191 のみ赤褐色粒を含む。色調は 182、184 が明橙色、それ以外は橙色を呈する。192~208 は回転糸切り底の坏で、193~196、198、201~203、206 は外底部に板状圧痕を有する。口径は 11.8~13.2cm、器高は 2.0~2.6cm を測る。胎土に金雲母をすべて含み、199、202、204、

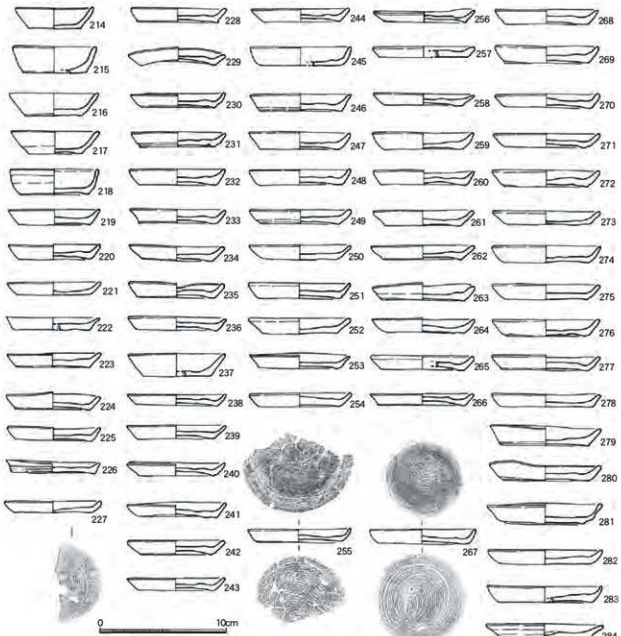


Fig.12　SK030007 中層出土遺物実測図①（1/3）

207 は赤褐色粒も含む。色調は 196、204 が明橙色、他は橙色を呈する。195 は全体が丁寧に回転ナデ調整で仕上げられ、器壁も薄く、焼成も良好である。209 は白磁皿Ⅸ類で、口縁端部の釉を掻き取る。210 は白磁壺の体部片で、灰色の胎土に緑灰色の釉がかかる。211 は施釉陶器の盤の底部片である。外面には草花文の鉄絵が描かれる。底部は露胎で、赤褐色を呈する。212 は須恵質土器の鉢の底部片で、内面は使用され、壁面が滑らかである。213 は軒丸瓦片で、花弁文を配すると考えられる。外面は強いナデで調整される。

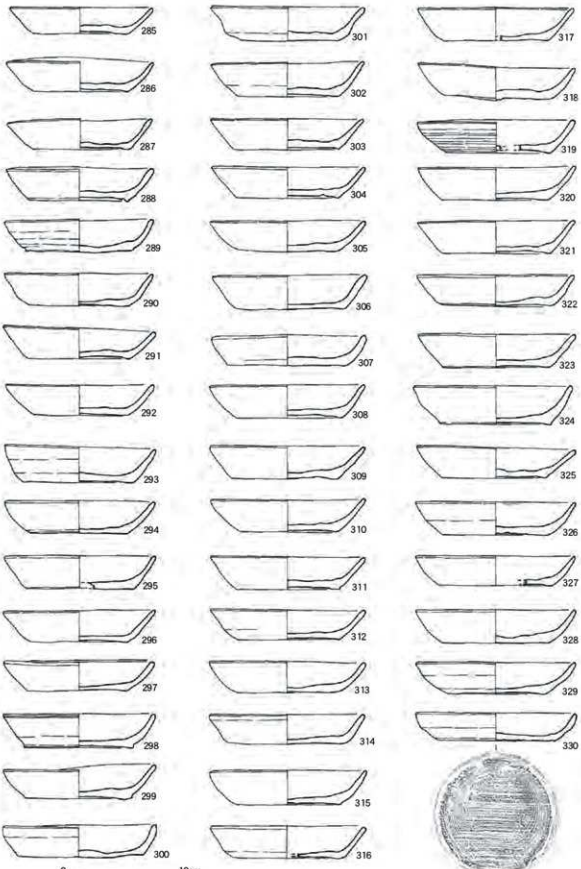


Fig.13　SK030007 中層出土遺物実測図②（1/3）

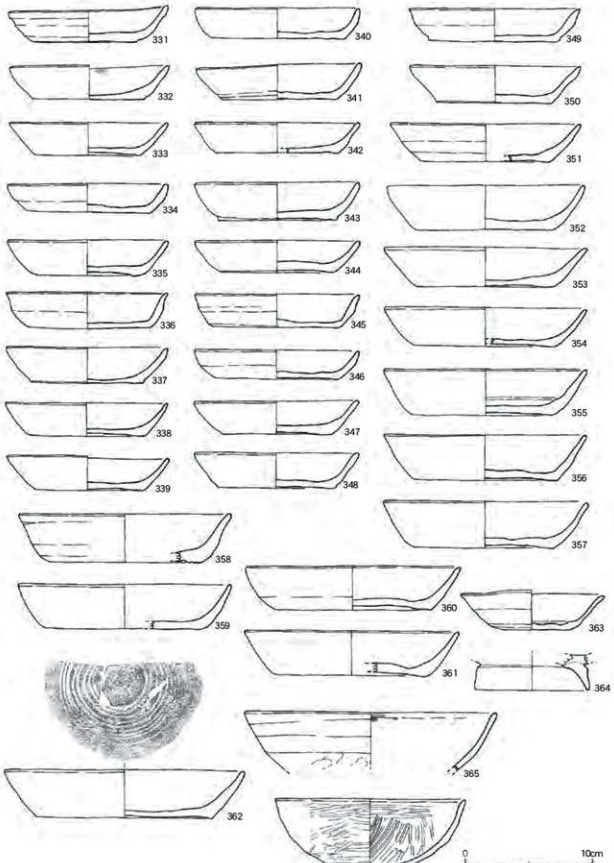
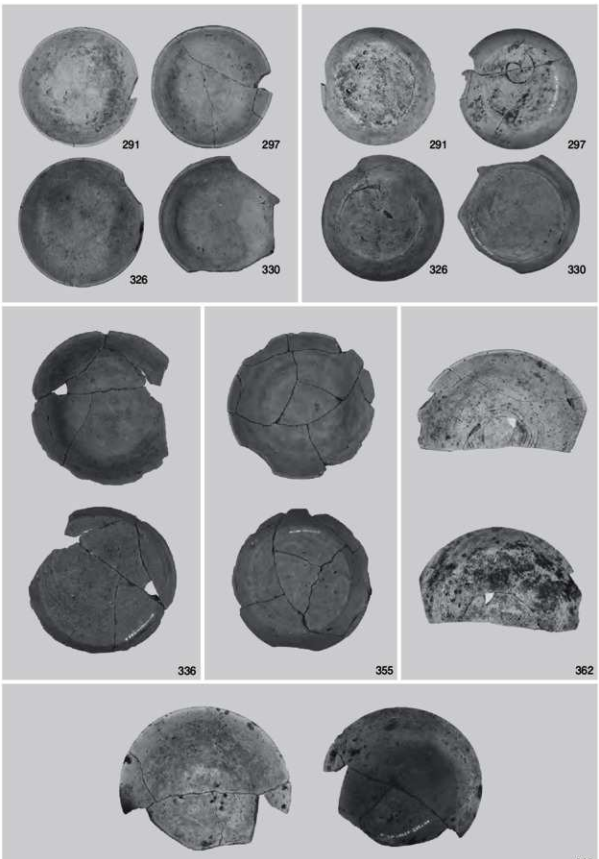


Fig.14　SK030007 中層出土遺物実測図③（1/3）



Ph.33　SK030007 中層出土遺物

（中層出土遺物）　214~364 は土師器である。214~283 は回転糸切り底の小皿で、底径に比して器高が高いもの（214~218・237）、底径に比して器高が低いもの（219~236・238~283）に分けられる。前者は口径 6.2~7.8cm、器高 1.6~2.0cm、後者は口径 7.2~9.0cm、器高 0.9~1.5cm を測る。前者の 218 は体部が直立気味に立ち上がり、口縁部はやや内湾する。外底部に板状圧痕が残る。それ以外は底部から体部は外方向に直線状に延び、外底部の板状圧痕は有さない。胎土はすべて金雲母を少量含み、色調は 215、218 が明橙色、他は橙色を呈する。後者の小皿は 219、220、225、227、231、232、235、238、239、241~246、250、256~258、261、263、266、269、273、278、279、281、282 は外底部に板状圧痕を有する。胎土は全て金雲母を含むが、273、281、282 は多量に含み、219、225、226、231、232、234、235、242、276、279、282 は赤褐色粒を少量含む。色調は 220、221、225、226、245、250、252、257、259、264、276、277、281 が明橙色、他は淡橙色から橙色を呈する。284 は回転ヘラ切り底の小皿である。口径 9.2cm、器高 1.0cm を測り、色調は明橙色を呈する。285~362 は回転糸切り底の坏である。最上層と同様、大きさで 2 種に分類できる。小型の 285~350 の口径は 11.2~13.5cm、器高 2.0~2.8cm、比較的大型の 351~362 の口径は 15.0~19.0cm、器高 3.0~3.8cm を測る。外底部に板状圧痕を有するものは、285、288、289、295、296、298、302、303、309、311、313~315、317~319、321、328、330~334、339、340、342、344、348、350、大型のものは 362 のみである。また、中には 330 のようにすだれ状を呈するものもある。なお、362 の内底部には同心円状のナデの痕跡が残る。胎土、調整、色調、焼成から幾つかに分類できると思うが、同じグループとして明瞭に判別できるものは次にあげるものである。287、291、303、309、311、325 がその一群で、胎土に金雲母を含まず、白色砂粒を含み、比較的精良である。また底部より明瞭な稜線をもたずに立ち上がるものが多く、体部は大きく外に開く。焼成は良好で、色調は白橙色を呈する。他の坏は金雲母を全て含み、292、302、305、312、323、328、333、336、342、351、355、358 は赤褐色粒を含む。なお、300、307、334、340 は粒子の大きい白色砂粒を多く含み、器面が粗い。色調は 293、298、300、306~308、319、330、334、336、340、350~353、355 は明橙色、362 は淡橙色、他は橙色を呈する。326・332 の口縁部内面には煤が付着しており、燈明皿として使用されている。363 は回転ヘラ切り底の坏で、口径 11.3cm、器高 3.2cm を測る。胎土には金雲母を少量含み、色調は淡橙色を呈する。364 は椀の高台部分である。365・366 は瓦器椀で、365 は粗い磨きが施され、指オサエも残る。366 は内外面ともに細かい磨きで調整される。367~377 は白磁である。367 は皿Ⅸ類で、口縁端部の釉を掻き取る。368・369 は小壺の口縁部、頸部片である。370 は碗Ⅱ類の口縁部片である。胎土には微細な黒色粒、白色粒を含み、釉色は黄白色を呈する。化粧土を有し、釉は全体に薄めにかけられる。371 は細く高い輪状高台を有し、やや内湾気味の深い体部から口縁は立ち上がり、緩やかに外反する。黒色粒を含む胎土に灰白色の釉がかかる。372 は輪状高台を有し、釉は高台畳付を巻き込んで高台内まで施釉する。化粧土を有し、灰白色の胎土に、明白色の釉がかかる。373 は碗Ⅴ類、374 は碗Ⅳ類、375 は碗Ⅱ類、376 は碗Ⅵ-1a 類、377 は皿Ⅲ類で、内面見込み部分の釉を輪状に掻き取る。378 は越州窯系青磁碗の底部片である。379・380 は同安窯系青磁で、379 は皿Ⅰ-2b 類、380 は碗の口縁部片である。381 は龍泉窯系青磁坏で、緑色の釉が畳付けを除き、厚くかかる。畳付けは褐色を呈する。382 は平底皿で、内面に花文が描かれる。383 は天目碗で、黒褐色の釉が厚くかかり、部分的に茶褐色に発色する。体部外面は露胎で、ヘラ削りの痕跡が残り、小豆色を呈する。384 は施釉陶器の耳壺で、白色砂粒を多く含んだ褐色の胎土に灰緑色の釉がかかる。385 は施釉陶器の鉢で、口縁部は肥厚させ「ハ」の字形に外側へ開く。黒色粒を含む明橙色から灰色の胎土に濃緑

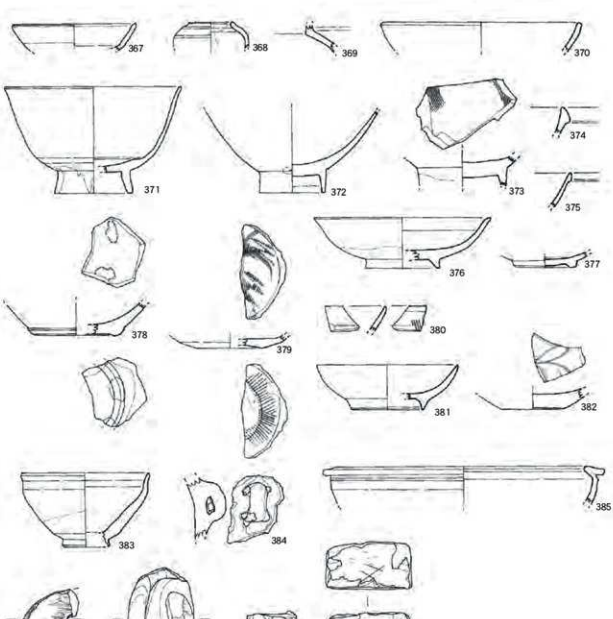


Fig.15　SK030007 中層出土遺物実測図④（1/3）

色の釉がかかる。386 は有孔の滑石製品の破片である。大部分は欠損するが、穿孔部付近には多くの削痕が残る。石鍋の削り痕跡が窺え、転用品と考えられる。現状で 52.3g を量る。387 は砂岩の叩き石で、上部と側面に敲打痕が残る。下端は熱を受けたのか、やや褐色を呈し、ひびが入り、剥離する。重さは 257g である。388 は粘板岩製の砥石である。方形に丁寧に整形され、上面のみが使用される。使用面は滑らかとなっており、削痕や叩き痕も残る。他面でも叩きや削痕が窺えるが、整形のためのものと考えられる。

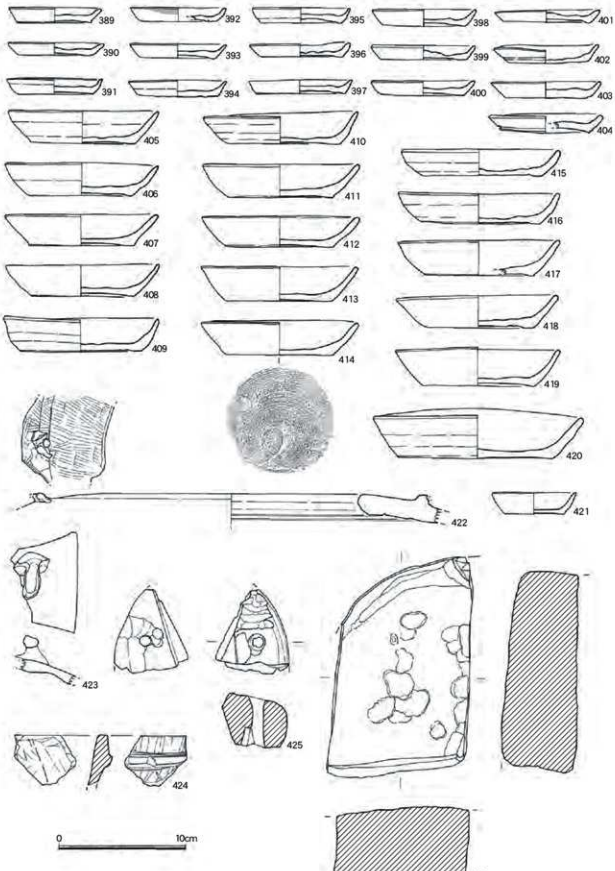


Fig.16　SK030007 下層出土遺物実測図①（1/3）

（下層出土遺物）　389~421 は土師器である。389~404 は回転糸切り底の小皿で、底径に比して器高が低く、口径 7.3~9.0cm、器高 0.9~1.5cm を測る。394、398、399、403 は外底部に板状圧痕を有する。胎土には全て金雲母を含み、389、395 は赤褐色粒も含む。色調は 391、394、395、397、399、403 は明橙色を呈するが、他は橙色である。392 は口縁部に煤が付着しており、燈明皿として使用されている。405~420 は回転糸切り底の坏で、比較的小型のものと大形のものに分類できる。小型の 405~419 の口径は 11.9~13.0cm、器高 2.0~3.0cm を測り、406、409 は外底部にすだれ状の板状圧痕を有する。胎土には金雲母と 409、411、412 は赤褐色粒を含み、橙色を呈する。420 は大型のもので、口径は 16.6cm、器高 3.9cm を測る。胎土に金雲母と赤褐色粒を含み、色調は橙色を呈する。421 は底径に比して器高が高い小皿である。422 は無釉陶器の甕の口縁部片である。口縁部は内湾し、肩部に耳が付く。胎土は紫灰色を呈し、白色砂粒を多く含む。423 は施釉陶器の耳壺の破片である。暗紫灰色を呈した胎土に緑灰色の釉がかかる。424 は小型の滑石製石鍋である。丁寧に作られ、削り痕は残らず、よく研磨されている。煤等の付着はみられない。425 は滑石製の錘で、大型の円形を呈すると考えられる。直径約 1.0cm の貫通した孔と欠損部には貫通せずに途中で終わっている孔が 2 個残る。現状で 155g を量る。426 は砂岩製の台石である。上面の自然面には、敲打の痕跡が認められる。重さは 2050g である。

以上の出土遺物から、土師器において、最上層で 55~57 のように底部と体部の境が不明瞭なものが出現するが、層毎で大きな違いは認められない。陶磁器では、口禿げの白磁は最上層から下層まで全ての層から出土する。14 世紀前半から中頃にかけて、比較的短時間で、繰り返し大量の遺物が廃棄されたと考えられる。

SK030009（Fig.17　Ph.34）　調査区北東に位置し、北側は調査区外へ延びる。平面プランは方形を呈し、東西方向の一辺は 4.2m 以上を測る。壁は緩く立ち上がり、底面は平坦で、深さは 15cm を測る。覆土は上層が炭化物と赤褐色粒を多く含んだ灰褐色粘質土、下層が黄色砂を含む灰色土である。遺物は細片ばかりが出土する。

出土遺物（Fig.17）　427・428 は土師器である。427 は回転糸切り底の小皿で、復元口径は 8.2cm 器高 1.0cm を測る。多量に金雲母を含み、色調は明橙色を呈する。428 は回転糸切り底の坏で、金雲母を含み、明橙色を呈する。429~433 は白磁である。429 は白磁碗Ⅴ -2 類、430 は碗Ⅳ類、431 は碗Ⅴ -2b 類、432 は碗Ⅳ類の底部片、433 は皿Ⅳ類の底部片である。434 は同安窯系青磁碗Ⅴ -2 類で、内面見込み部分の釉を環状に掻き取る。435 は龍泉窯系青磁皿、436 は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類である。437 は無釉陶器の鉢の口縁部片で、口縁部内面には 2 条の突起を有する。438 は施釉陶器の盤の口縁部片で、口縁部は肥厚させる。灰橙色の胎土に緑灰色の釉がかかる。439 は瓦玉で、瓦質の平瓦片の周縁部を打ち欠いて整形したものである。凸面には縄目、凹面には布目の痕跡が残る。色調は灰色を呈し、重量は 11.4g である。他に白磁碗Ⅷ類、Ⅸ類、鎬蓮弁を有する龍泉窯系青磁碗が出土する。土坑の時期はこれらの出土遺物から 13 世紀中頃から 14 世紀前後と考えられる。

SK030033（Fig.18　Ph.35・36）　調査区東側中央に位置し、北側を SK030004、南側を SK030005 に切られる。平面プランは楕円形を呈し、長径 2.3m 以上、短径 2.0m、北側に小さいテラスを有する。断面は逆台形を呈し、底面中央部は凸凹している。深さは 35cm を測る。覆土は炭化物と橙褐色粒を含む灰褐色砂質土を主体とする。

出土遺物（Fig.18）　440~445 は土師器である。440・441 は回転ヘラ切り底の小皿で、口径は 10.0~10.4cm を測り、441 は外底部に板状圧痕を有する。440 の胎土は精良で、色調は白橙色を呈し、丁寧なナデで調整される。441 は金雲母を含み、明橙色を呈する。442 は回転糸切り底の小皿で、口径

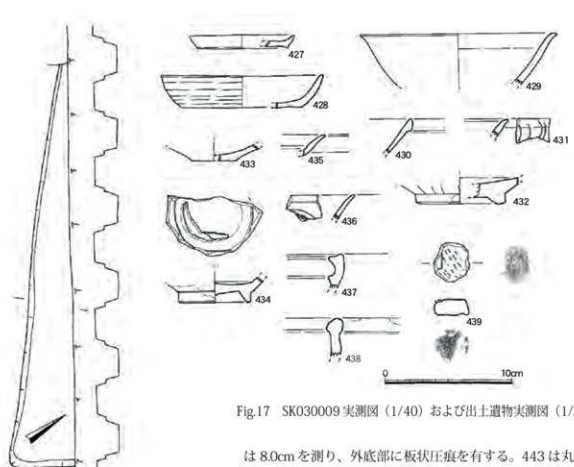
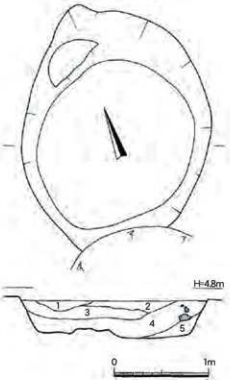


Fig.17　SK030009 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

Ph.34　SK030009 土層（東から）

は 8.0cm を測り、外底部に板状圧痕を有する。443 は丸底坏で、復元口径は 14.5cm を測り、外底部に板状圧痕を有する。444・445 は回転糸切り底の坏で、口径は 12.2cm、15.6cm を測る。445 は金雲母、赤褐色粒を含み、色調は明橙色を呈する。446・447 は瓦器で、446 の皿は横方向のナデで調整したのち、内面にはジグザグ、外面には横方向、縦方向の暗文風の磨きを施す。447 は椀で、外面は横方向のナデ、内面は粗い磨きで調整する。448・449 は白磁で 448 は碗Ⅴ類の口縁部片、449 は碗Ⅳ類の底部片である。450・451 は龍泉窯系青磁である。450 は碗Ⅰ-6a 類、451 は碗Ⅰ-2a 類である。452 は施釉陶器の瓶で、底部は暗紫灰色の露胎であるが、部分的に緑灰色の釉が垂れる。453 は滑石製石鍋の再利用品である。破面も研磨され、方形を形作ろうとしたことが窺える。外面には煤の付着が残る。重さは 208g である。他に黒色土器 B 類、緑釉陶器片、越州窯系青磁、同安窯系青磁、鉄釘、鉄滓が出土する。土坑の時期はこれらの出土遺物から 12 世紀中頃と考えられる。

SK030034（Fig.19　Ph.37）　調査区東側に位置し、南側は調査区外へ延びる。平面プランは円形を呈し、直径約 1.6m を測る。断面は逆台形を呈し、深さは 27cm である。覆土は炭化物と橙褐色粒を含み、黄褐色土がブロック状に入る。人為的な埋土と考えられ、1 層と 2 層の間には板状のものが立っていた可能性があるが、木質等は検出できなかった。



Ph.35　SK030033（南から）

Ph.36　SK030033 土層（南から）

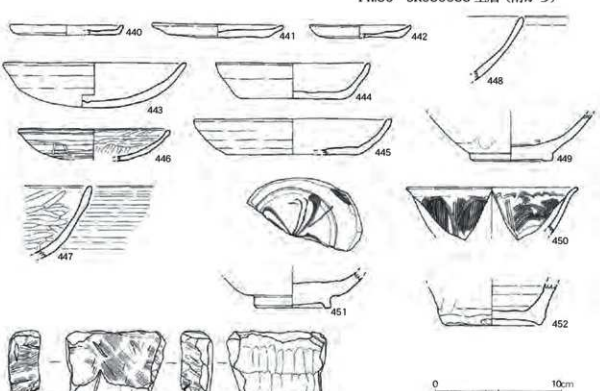
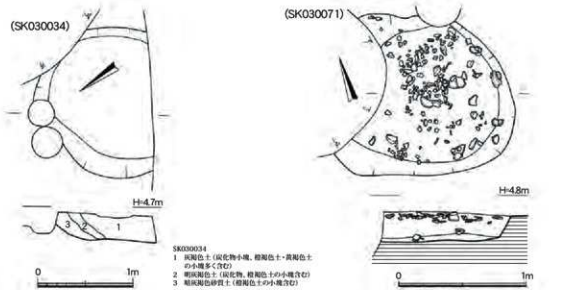


Fig.18　SK030033 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）



Ph.37　SK030034 土層（西から）

Ph.38　SK030071（南から）

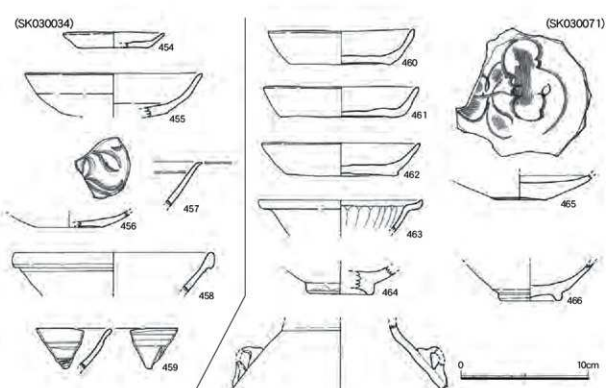


Fig.19　SK030034・030071 実測図（1/40・1/30）および出土遺物実測図（1/3）

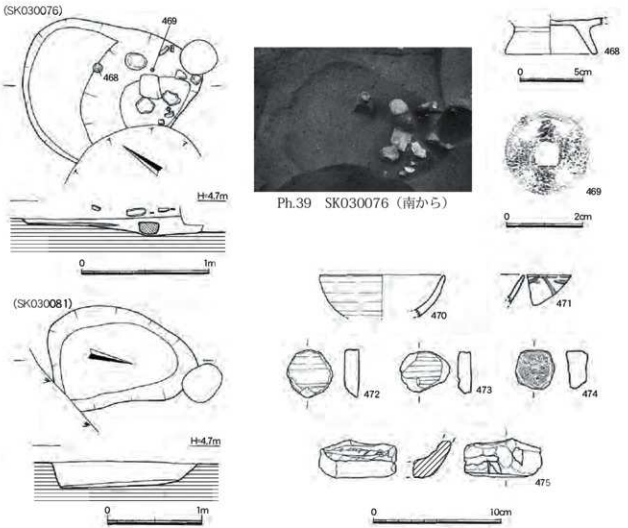


Fig.20 SK030076・030081 実測図（1/30・1/40）および出土遺物実測図（1/3・1/1）

出土遺物（Fig.19） 454・455 は土師器である。454 は回転糸切り底の小皿で、口径は 8.0cm を測り、外底部に板状圧痕を有する。455 は丸底坏で、復元口径は 14.0cm を測る。金雲母、赤褐色粒を多く含み、色調は橙色を呈する。456–458 は白磁である。456 は皿Ⅷ-b 類で内面見込みにヘラ描きで草花文を施す。457 は碗Ⅴ-2a 類、458 は碗Ⅳ類である。459 は同安窯系青磁碗で、体部外面に幅広の粗い縦の櫛目文、内面に花文を施す。他に施釉陶器、金属坩堝片（Ⅲ-34 Fig.3-46）が出土する。土坑の時期はこれらの出土遺物から 12 世紀中頃から後半と考えられる。

SK030071（Fig.19 Ph.38） 調査区中央に位置し、西側を他の土坑に切られる。平面プランは楕円形を呈し、長径約 1.5m 以上、短径 1.2m を測る。断面は逆台形、深さは 23cm である。覆土は炭化物と褐色粒を多量に含む茶褐色土を主体とする。細かく割れた遺物が上層に多量に廃棄される。

出土遺物（Fig.19） 460–462 は回転糸切り底の土師器の坏である。460 は口径 11.6cm を測り、白色砂粒のみ含み、色調は明橙色を呈する。461・462 は口径 12.2cm、12.4cm を測り、金雲母、白色砂粒を含み、色調は橙色を呈する。463–465 は龍泉窯系青磁である。463 は坏Ⅲ-3b 類で、体部外面は無文、内面には縦に凹面の削りを入れ、花弁形とする。464 は碗Ⅰ類の底部片である。高台内部に目跡を有し、釉は一部畳付を巻き込んで高台内の目跡付近までかかる。465 は皿Ⅰ-1c 類で、

底部には目跡を有し、釉が残る。466は越州窯系青磁碗の底部片で、輪状高台を有し、全面に施釉される。見込みには細長い目跡が環状につく。二次焼成を受け、内外面ともに釉が発砲する。467は施釉陶器の耳壺である。褐色の胎土に暗灰緑色の釉がかかる。他に瓦器椀、白磁V類、滑石片が出土する。土坑の時期はこれらの出土遺物から14世紀前後と考えられる。

SK030076（Fig.20　Ph.39）　調査区中央に位置し、部分的に他の遺構に切られる。平面プランは楕円形を呈し、長径約1.4m以上、短径1.1mを測る。北側にテラスを有し、断面は階段状となり、南側が最も深い。現状で、深さは25cmである。砂岩・礫岩の方形を呈した偏平な石材や頭大の丸味を帯びた花崗岩が南側から出土する。覆土は炭化物の小塊を多量に含み、灰褐色土に褐色粘質土が斑状に混入する。

出土遺物（Fig.20）　468は高台付土師器の底部片で、外側に開く高い高台である。胎土は少量の金雲母と赤褐色粒を有し、色調は橙色を呈する。469は混入か、銅銭であるが、銹化が進み銭文は不明である。他に須恵器片が出土し、土坑の時期はこれらの出土遺物から古代と考えられる。

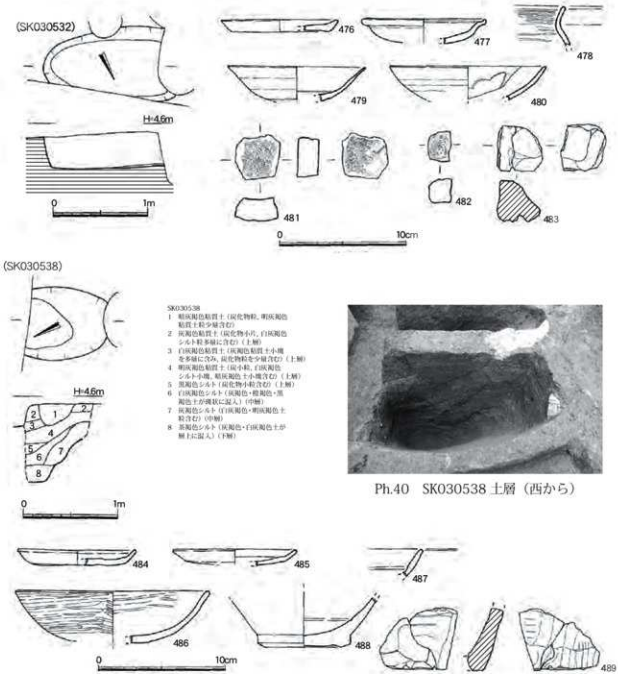
SK030081（Fig.20）　調査区東端に位置する。平面プランは偏平な楕円形を呈し、長径約1.6m、短径1.1mである。断面は逆台形を呈し、底面は南側が深くなっており、25cmを測る。覆土は炭化物を含む茶褐色土を主体とする。

出土遺物（Fig.20）　470・471は龍泉窯系青磁である。470は小碗の口縁部片で、細かい貫入が入る。471は碗Ⅱ類で、体部外面に鎬蓮弁を有する。472-474は瓦玉で、平瓦片の周縁部を打ち欠いて整形したものである。472・473は須恵質で両面ともに強いナデで調整される。これらは胎土、色調、調整ともに非常に類似しており、同じ瓦から作られたものと考えられる。474は瓦質で、凹面にわずかに布目が残る。重さはそれぞれ18.9g、16.2g、14.7gを量る。475は滑石製石鍋の底部片で、外面に煤が付着する。二次使用の痕跡もあり、側面には溝状の凹線が入る。重さは70.6gを量る。他に回転糸切り底の土師器、施釉陶器が出土する。土坑の時期はこれらの出土遺物から13世紀前後から前半と考えられる。

SK030532（Fig.21）　調査区西側に位置し、北側は調査区外へ延び、西側は他の土坑に切られる。平面プランは楕円形を呈し、長径約1.2m以上、短径0.75mを測る。断面は方形を呈し、深さは35cmである。覆土は炭化物を含む暗灰色土を主体とする。

出土遺物（Fig.21）　476は回転糸切り底の土師器の小皿である。復元口径9.2cmを測り、底部に板状圧痕を有する。胎土に金雲母を含み、色調は橙色を呈する。477は京都系土師器の小皿で、口縁を端部で折り返し、復元口径9.8cmを測る。胎土に細かい赤褐色粒と白色砂粒を含み、色調は淡橙色を呈する。口縁部付近は横ナデ、底部は指ナデで調整する。478は黒色土器A類の甕の口縁部片である。横方向のナデで調整したのち、内面から頸部付近まで横方向の磨きを施す。外面には煤が付着する。479・480は白磁である。479は皿V-1a類、480は皿Ⅵ-2b類で、内面に花文を描く。481・482は瓦玉で、平瓦片の周縁部を打ち欠いて整形したものである。481は須恵質で、整形途中のものである。凸面には縄目、凹面には布目が残る。482は瓦質で、形状より、破損した可能性もある。凹面にわずかに布目が残る。重さはそれぞれ25.4g、9.8gを量る。483は軽石で、2面に研磨した痕跡が残り、凹状を呈する。重さは10.9gを量る。他に土師器の坏、皿が出土するが底部は大半が回転ヘラ切りで、回転糸切りが少量含まれる。土坑の時期はこれらの出土遺物から12世紀前半と考えられる。

SK030538（Fig.21　Ph.40）　調査区西側に位置し、北側は調査区外へ延びる。平面プランは楕円形を呈し、長径約0.9m以上、短径0.8m、深さは82cmを測る。覆土は2-5層（上層）、6・7層（中層）、

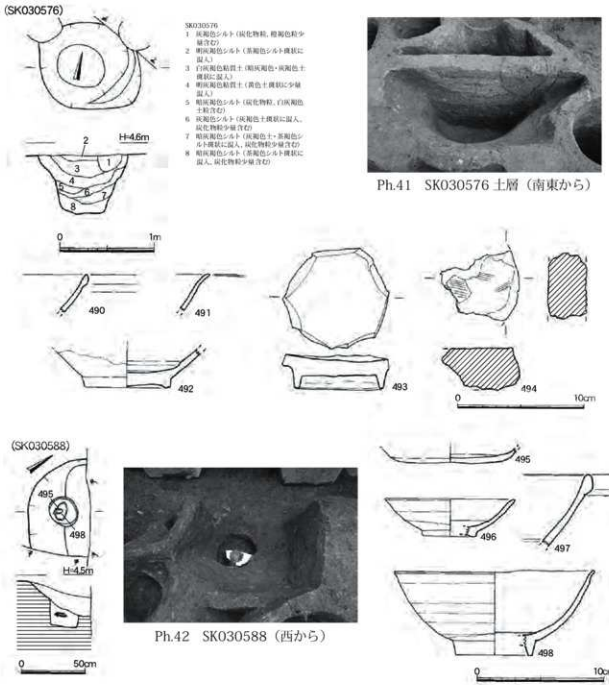


Ph.40　SK030538 土層（西から）

Fig.21　SK030532・030538 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

8 層（下層）に分けられ、堆積の時期の違いが窺える。下層は縞状の堆積を呈しており、自然堆積と考えられる。また、上層・中層はブロック状の堆積から人為的な埋土であり、上層は多量の炭化物を含むが、中層からは出土しなかった。

出土遺物（Fig.21）　484 は回転糸切り底の土師器の小皿である。復元口径 9.4cm を測り、底部に板状圧痕を有する。胎土に金雲母を含み、色調は明橙色を呈する。485 は回転ヘラ切り底の小皿で、復元口径は 9.8cm を測る。胎土に金雲母を含み、色調は淡橙色を呈する。486 は黒色土器 B 類の椀で、内外面に細かい磨きが丁寧に施される。487 は龍泉窯系青磁皿Ⅰ類の口縁部片である。488 は白磁



Ph.41　SK030576 土層（南東から）

Ph.42　SK030588（西から）

Fig.22　SK030576・030588 実測図（1/40・1/30）および出土遺物実測図（1/3）

碗Ⅳ類の底部片である。489 は滑石製石鍋の底部片で、外面には多量の煤が付着する。破面は磨かれ、内面には溝状の窪みが残ることから、砥石等に使用したと考えられる。他に白磁碗Ⅱ・Ⅴ類、中国の施釉陶器、粘土塊が出土し、土坑の時期はこれらの出土遺物から 12 世紀中頃と考えられる。

SK030576（Fig.22　Ph.41）　調査区西側中央に位置する。平面プランは隅丸方形を呈し、一辺 0.9~1.0m を測る。深さは約 60cm であり、壁は遺構面より 25cm 下から傾斜を急にする。上層より、6・7 層は東側より流れ込んだ様子が窺え、それより上層と下層で流れ込みの状況を異にする。なお、覆土は傾斜の変換点より下は炭化物を多く含む灰褐色シルトを主体とし、上層は粘質土を主体とする。

出土遺物（Fig.22）　490~493 は白磁である。490 は碗Ⅳ類の口縁部片、491 は碗で、口縁端部

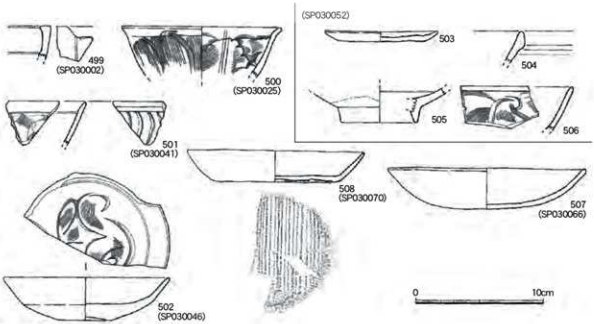


Fig.23　第 1 面 SP 出土遺物実測図①（1/3）

が緩やかに外反する。胎土は灰白色で、化粧土を施し、透明の釉がかかる。細かい貫入が入る。492 は碗Ⅳ類の底部片である。493 は碗Ⅴ類の底部片を使用した瓦玉で、体部縁辺を丁寧に打ち欠く。重さは 145.9g である。494 は大型の円盤状を呈する滑石の破片である。側面は緩やかに弧を描くように丁寧に磨かれ、上面はほぼ平坦で細かい擦痕が残り、下面はやや丸味を帯びる。重さは 90.2g を量る。他に回転糸切り底の土師器、黒色土器 B 類、瓦器、鉄釘が出土する。土坑の時期はこれらの出土遺物から 12 世紀前半と考えられる。

SK030588（Fig.22　Ph.42）　調査区西側に位置し、北側は調査区外へ延びる。南側の底面に柱穴状の掘り込みを有し、そこから土師器小皿と白磁碗が出土した。断面の形状等から上層とこの柱穴状の掘り込みは別遺構の可能性も考えられるが、同時に掘削してしまい、出土遺物からも大きな時期差が認められなかったことからここでは同一遺構として記す。覆土は茶褐色粘質土に灰色砂質土が層状に混入する。

出土遺物（Fig.22）　495 は回転ヘラ切り底の小皿で、外底部に板状圧痕を有する。胎土に金雲母を含み、色調は橙色を呈する。496~498 は白磁である。496 は皿Ⅱ -1a 類、497 は碗Ⅳ類、498 は碗Ⅴ -2a 類である。他に混入であるが、古代の須恵器の蓋、土師器片が出土する。土坑の時期はこれらの出土遺物から 11 世紀後半と考えられる。

（2）ピット（SP）

SP 出土遺物（Fig.23~25）　499 は SP030002 出土の施釉陶器の香炉である。白橙色の胎土に外面は白濁色の釉がかかり、口縁部上面と内面は露胎である。体部は直線状に延び、口縁端部は内側に突出し、上面は平坦面を呈する。内面中位には段を有し、外面には縦方向の条線が入る。500 は SP030025 出土の龍泉窯系青磁碗Ⅰ -6a 類、501 は SP030041 出土の白磁碗で、外面に縦蔓花弁文、内面に縦櫛花弁文と櫛目文を施す。極めの細かい白色の胎土に灰緑色を帯びた透明釉がかかる。502 は SP030046 出土の龍泉窯系青磁皿Ⅰ -1c 類である。503~506 は SP030052 出土で、503 は回転ヘラ切り底の小皿で、復元口径は 6.8cm、橙色を呈する。504 は白磁碗Ⅳ類、505 は白磁碗Ⅴ類、506

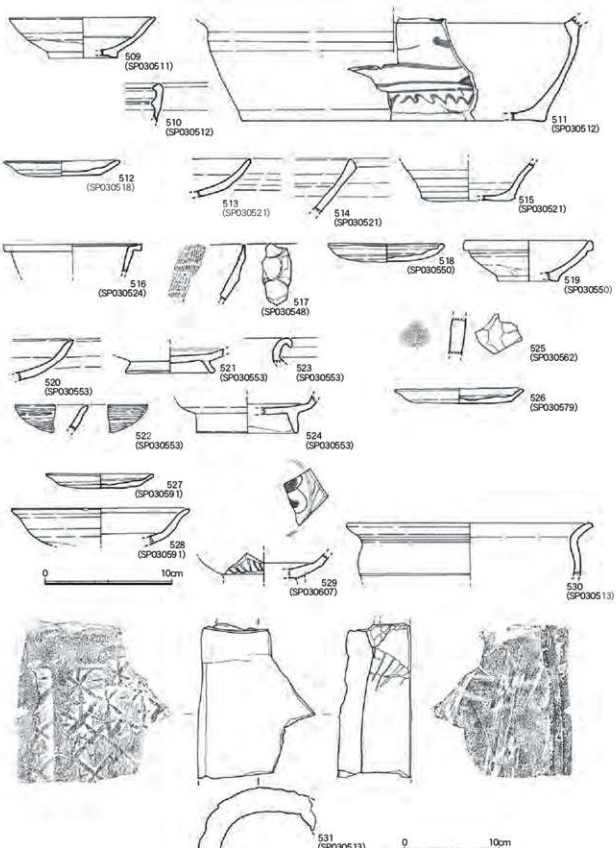


Fig.24　第 1 面 SP 出土遺物実測図②（1/3）

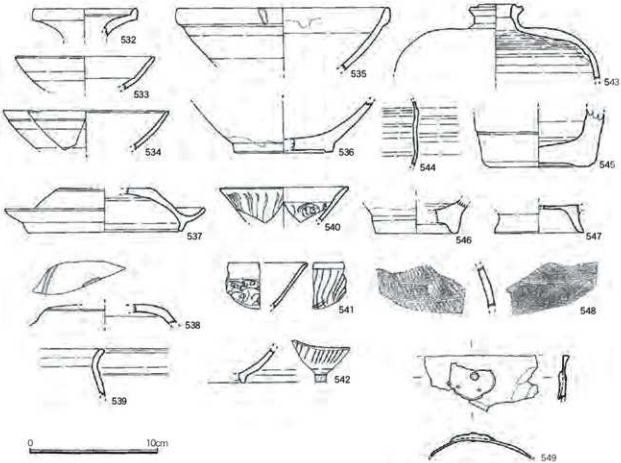
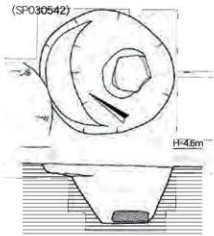
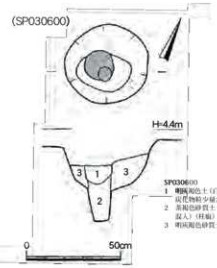
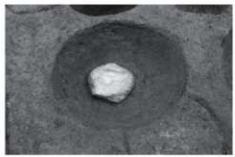


Fig.25　SP030616 出土遺物実測図（1/3）

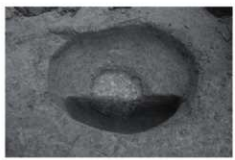
は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-3a 類である。他に平玉（Ⅲ-34 Fig.23-519）、ガラス坩堝が出土する。507 は SP030066 出土の丸底坏で、復元口径は 15.8cm を測り、外底部に板状圧痕を有する。他に金属坩堝、鉄滓が出土する。508 は SP030070 出土の回転糸切り底の坏で、底部は細かい板目が全面に残る。509 は SP030511 出土の白磁皿Ⅵ-1a 類である。510・511 は SP030512 出土の無釉陶器の鉢と褐釉陶器の盤である。512 は SP030518 出土の回転ヘラ切り底の小皿で、復元口径は 9.0cm、暗橙色を呈する。513~515 は SP030521 出土で、513 は土師器の丸底坏、514 は東播系須恵器の鉢、515 は下層の混入と考えられる土師器の鉢の底部片である。516 は SP030524 出土の施釉陶器の鉢の口縁部片である。褐色の胎土に黄褐色の釉がかかる。517 は SP030548 出土の製塩土器の口縁部片で、外面は指オサエ、内面には細かい布目が残る。518・519 は SP030550 出土で、518 は京都系土師器の小皿で、外底部に板状圧痕を有する。519 は白磁皿Ⅱ-1b 類である。520~524 は SP030553 出土で、520 は土師器の丸底坏、521 は土師器の高台付椀、522 は黒色土器 B 類の口縁部片で、横方向の細かい磨きで丁寧に研磨され、内面には一定間隔で、横方向の磨きが暗文風に施される。523 は施釉陶器の壺の口縁部片で、灰色の胎土に緑灰色の釉がかかる。524 は白磁の底部片で、細く高い高台が付き、釉は高台畳付を巻き込んで高台内まで施釉する。化粧土を有し、灰白色の胎土に、明白色の釉がかかる。525 は SP030562 出土の製塩土器の体部片で、外面はナデで調整し、内面には細かい布目が残る。526 は SP030579 出土の回転ヘラ切り底の小皿で、口径は 10.2cm を測る。527・528 は SP030591 出土で、527 は回転ヘラ切り底の完形の小皿で、口径は 8.5cm、外底部に板状圧痕を有する。色調は淡橙色である。528 は白磁皿Ⅳ-1b 類である。529 は SP030607 出土の白磁碗の底部片で、高台は欠損する。黒色粒を含む白色の胎土に化粧土が施され、柔らかい白色の釉がかかる。外面に縦蛇で刻みを入れ、花弁とし、



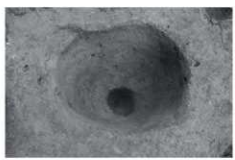




Ph.43　SP030542 根石検出状況（南から）



Ph.44　SP030600 柱痕検出状況（南から）



Ph.45　SP030600（南から）

Fig.26　SP030542・030600 実測図（1/20）

内面は篦と櫛目で花文を描く。530・531 は SP030513 出土、530 は須恵器の甕で、暗紫灰色の胎土に多量の白色砂粒を含む。内外面共に横方向のナデで調整され、体部中位には沈線が巡る。531 は須恵質の丸瓦で、凸面には粗い格子目叩きが残り、凹面には布目が認められる。532~549 は SP030616 出土である。532~536 は白磁で、532 は壺、533 は皿Ⅵ-1a 類、534 は小碗で輪花を有する。535・536 は白磁碗Ⅳ類である。537~542 は青白磁である。537・538 は蓋、539 は壺、540~542 は小碗で、外面には縦櫛花弁文、541・542 の内面には篦で花文を描く。543~546 は中国の施釉陶器である。547 は高台付土師器の椀、548 は須恵器の壺の体部片である。549 は銅鍋の口縁部片で、口縁端部は内面に突出する。肩部に把手状のものが鋲で留められる。

SP030542（Fig.26　Ph.43）　調査区西側中央に位置する。平面プランは直径 70cm の円形を呈し、深さは 30cm を測る。底面に花崗岩の厚さ 5cm の偏平な石材を置き、根石としている。回転糸切り底の土師器、白磁、施釉陶器が出土し、柱穴の時期は 12 世紀前半と考えられる。

SP030600（Fig.26　Ph.44・45）　調査区西側中央に位置する。直径 45cm の掘方に直径 16cm の柱痕跡を確認した。柱穴からは下層からの混入である古墳前期の土師器の甕が出土する。掘方からは防長系の緑釉陶器、土師器の甕が出土した。柱穴の時期は古代末以降と考えられる。

3）第２面の調査（Fig.27　Ph.46・47）

第２面はやや砂質を帯びた茶褐色土の上面で検出した。標高は約 4.4m を測り、ほぼ平坦である。検出した主な遺構は土坑 18 基、柱穴である。土坑は土師器等の遺物が廃棄されたものが多く、柱穴では花崗岩や砂岩等で根を固めた痕跡を残すものを確認した。検出した遺構の時期は 14 世紀の土坑も一部残り、古代も見られるようになるが、大半は 11 世紀後半から 12 世紀前半を示すものである。

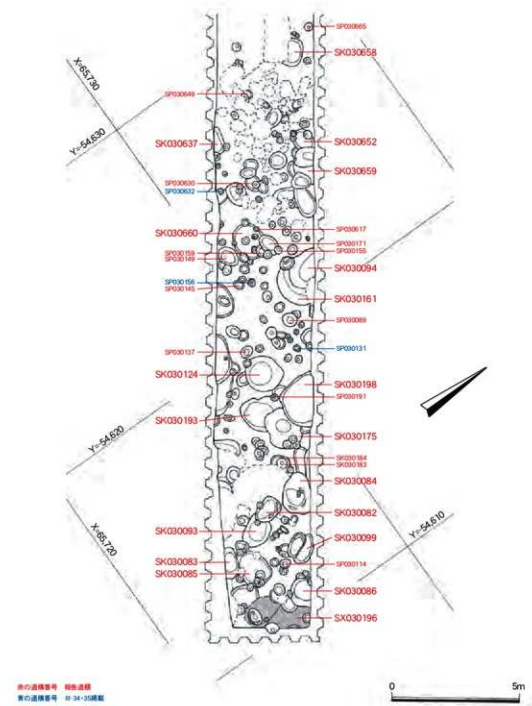


Fig.27　第２面全体図（1/150）

Ph.46　西側２面全景（南から）

Ph.47　東側２面全景（南西から）

（1）整地層（SX）

SX030196（Fig.27　Ph.48）　調査区南東端に広がる硬化面である。最長で、南北 1.9m、東西 0.9m を測り、北側と東側は調査区外へ広がり、西側は他の遺構に削平される。南側の境には炭化物が幅 2cm 程度で出土し、直線状で長さ 0.9m ほど残る。硬化面の厚さはわずか 2~3cm であるが、白黄褐色砂質土が固く締まる。遺物は回転ヘラ切り底の土師器と須恵器細片が出土する。時期は 11 世紀中頃から 12 世紀前半と考えられる。

（2）土坑（SK）

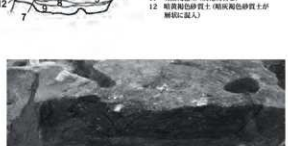
SK030082（Fig.28　Ph.49）　調査区東側中央に位置する。平面プランは偏平な楕円形を呈し、長径 1.15m、短径 0.7m、深さは 40cm を測る。断面は逆台形を呈し、北側にテラスを有する。北側テラスと中央部の土層の堆積状況が異なることから、この間に何らかの仕切り等があった可能性が考えられる。覆土は基本的に砂質土であり、上層ほどやや粒子が細かくなり、粘質土が混入する。中央部上層は炭化物を含む。

出土遺物（Fig.28）　550 は土師器の丸底坏で、復元口径は 15.0cm を測り、外底部の板状圧痕は明瞭である。金雲母を含み、色調は暗橙色を呈する。551 は白磁の小碗で、低い輪状高台を有する。灰白色の精良な胎土にやや灰緑色の白色釉が内面から外面中位までかかる。552 は瓦器椀で、内外面ともにナデで調整した後、やや雑な磨きが施される。他に、白磁碗Ⅴ類が出土する。土坑の時期は出土遺物から 11 世紀後半と考えられる。

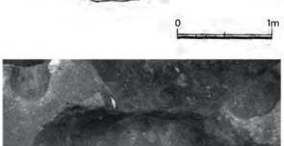
Ph.48　SX 硬化面 030196（東から）

SK030083（Fig.28　Ph.50）　調査区東側に位置し、南側は調査区外へ延びる。平面プランは隅丸方形を呈し、東西方向の一辺は 1.2m、南北方向は 0.55m 以上を測る。断面は船底状を呈し、深さは 35cm である。覆土は炭化物と黄褐色土をブロック状に含む暗灰褐色砂質土を主体とする。

出土遺物（Fig.28）　553~555 は土師器である。553 は回転糸切り底の小皿で、復元口径は 8.8cm を測り、外底部に板状圧痕を有する。胎土に金雲母、赤褐色粒を含み、色調は明橙色を呈する。554・555 は丸底坏で、復元口径は 14.6、16.0cm を測る。556・557 は瓦器である。556 は皿で、回転ナデで調整した後、口縁内面付近は丁寧に研磨を施すが、単位は不明である。557 は椀で、低い台形状の高台が付き、底部には板状圧痕が残る。558・559 は白磁で、558 は碗Ⅵ-1b 類、559 は碗Ⅳ-2c 類で、畳付けに目跡が残る。560 は滑石製石鍋の口縁部片で、煤、焦げ等の付着は見られない。他に中国の施釉陶器が出土する。土坑の時期は出土遺物から 12 世紀前半と考えられる。



Ph.49　SK030082 土層（西から）



Ph.50　SK030083（南から）

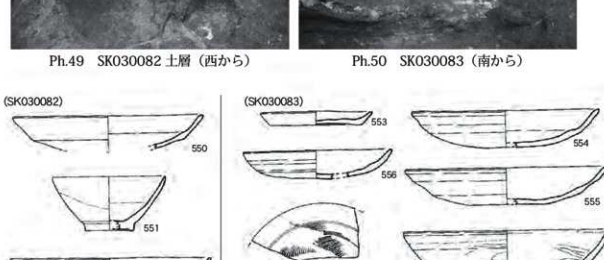
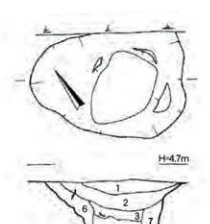


Fig.28　SK030082・030083 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

SK030084（Fig.29　Ph.51）　調査区東側に位置し、北側は調査区外へ延びる。平面プランは楕円形を呈し、長径 1.6m、短径 1.1m 以上、深さは 76cm を測る。土層からは 6・7 層の堆積後、3~5 層が堆積し、最後に 1・2 層が流れ込んだ様子がうかがえる。3~5 層は掘り直し、もしくは板状のものが 6・7 層との間に立てられ、作られた空間が、時間とともに埋没したと考えられる。砂質土を主体とし、炭化物は含まれなかった。



Ph.51　SK030084 土層（南から）

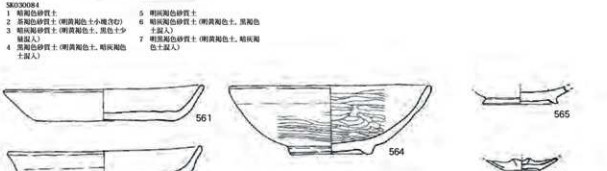
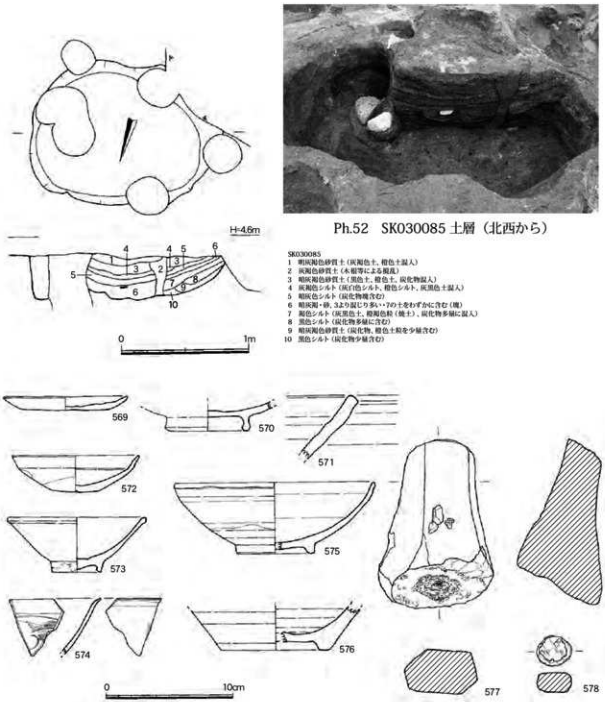


Fig.29　SK030084 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（Fig.29）　561~563 は土師器である。561・562 は回転糸切り底の坏で、口径は 15.8cm、15.4cm を測り、外底部に板状圧痕を有する。胎土に金雲母を少量含み、色調は 561 が明橙色、562 が橙色を呈する。また、561 は底部内面が黒色、赤色に変色し、器壁が薄く層状に剥げていることから、被熱したと考えられる。563 は丸底坏で、復元口径は 16.0cm を測り、外底部に板状圧痕を有する。金雲母を多量に含み、色調は暗橙色を呈する。564 は瓦器椀で、横方向の雑な磨きが施される。内面は被熱し、黒色に変色する。565 は近江産の緑釉陶器の椀で、見込みには三叉トチンの痕跡があり、高台内面にも目跡が残る。胎土は精良で、灰色を呈し、暗濃緑色の釉が全面にかかる。566 は青白磁の皿の底部片で、体部外面には白堆線が入る。567 は白磁碗の口縁部の小片である。破片の中央部が輪花風となっているが、細片のため、詳細は不明である。灰色の胎土に暗灰緑色の釉がかかる。568 は施釉陶器の盤で、白色砂粒を多量に含む灰色の胎土に灰緑色の釉がかかる。他に、金属坩堝片、炉壁が出土する。土坑の時期は出土遺物から 12 世紀前半と考えられる。

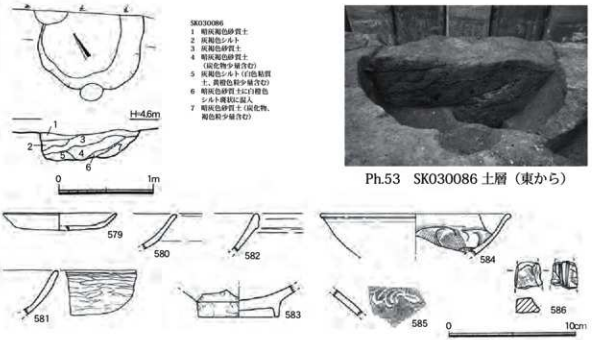
SK030085（Fig.30　Ph.52）　調査区東側に位置する。平面プランは楕円形を呈し、長径約 1.6m、短径 1.15m、深さは 40cm を測る。東側の壁はほぼ垂直、西側の壁面は緩やかに立ち上がる。炭化物や焼土を含む砂質土やシルトが厚さ 3~10cm の層で縞状に堆積し、固く締まる。



Ph.52　SK030085 土層（北西から）

Fig.30　SK030085 実測図（1/30）および出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（Fig.30）　569・570 は土師器である。569 は回転ヘラ切り底の小皿で、口径は 9.8cm を測り、外底部に板状圧痕を有する。多量の金雲母を含み、色調は明橙色を呈する。570 は高台付椀で、高台端部は肥厚させ、丸く仕上げる。色調は淡橙色を呈する。571 は東播系須恵器の鉢の口縁部片である。572~575 は白磁で、572 は皿Ⅵ-1a 類、573 は小碗、574 は碗Ⅴ-2c 類、575 は碗Ⅱ-1 類である。576 は施釉陶器の底部片で、赤褐色粒を含む褐色の胎土に暗緑色の釉がかかる。577 は砂岩製の砥石で、6 つの側面は全て使用され、滑らかである。なお、下面は敲石としても使用し、中



Ph.53　SK030086 土層（東から）

Fig.31　SK030086 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

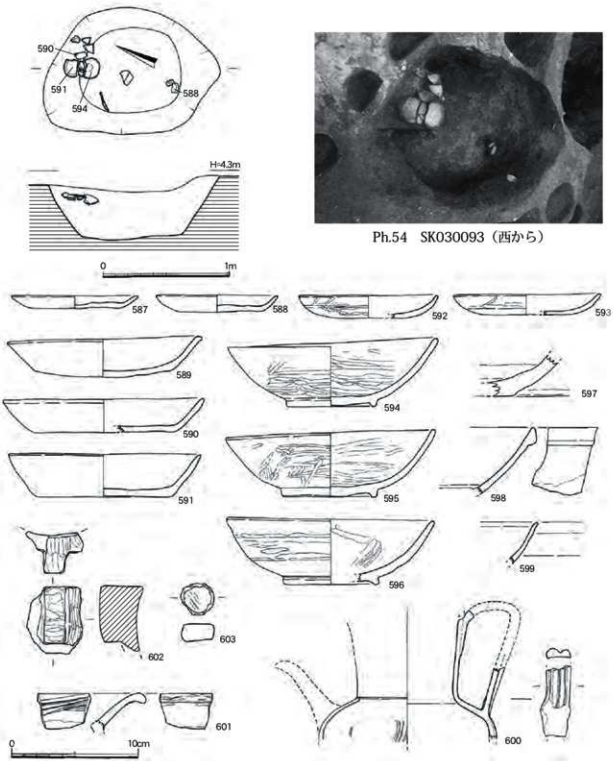
央部は凹状に窪む。重さは 761g を量る。578 は瓦玉で重さは 9.8g である。土師質の平瓦を使用し、凸面はナデ、凹面にはかすかに布目の痕跡が残る。他に、回転糸切り底の土師器、ガラス坩堝が出土する。土坑の時期は出土遺物から 12 世紀前半と考えられる。

SK030086（Fig.31　Ph.53）　調査区東側に位置し、北側は調査区外へ延びる。平面プランは隅丸方形を呈し、長径 0.8m 以上、短径 1.05m、深さ 30cm を測る。西側の壁はほぼ垂直、東側の壁面は緩やかに立ち上がる。覆土は 4 層に炭化物、5 層に白色粘質土、黄橙色粒を少量含み、灰色から灰褐色を呈する砂質土を主体とする。

出土遺物(Fig.31)　579･580は土師器である。579は回転ヘラ切り底の小皿で、復元口径は 9.0cm を測り、外底部に板状圧痕を有する。胎土に金雲母を含み、色調は橙色を呈する。580 は丸底坏の口縁部片で、色調は橙色を呈する。581 は瓦器椀で、横方向の雑な磨きが施される。582・583 は白磁碗Ⅳ類、584 は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-6c 類である。585 は施釉陶器の壺の肩部片で、箆による花文が描かれ、緑灰色の釉がかかる。586 は滑石製品の破片である。側面 4 面は擦痕が多く入り、1 面には溝状の凹線が入る。重さは 9.2g を量る。土坑の時期は出土遺物から 12 世紀中頃と考えられる。

SK030093（Fig.32　Ph.54）　調査区東側に位置する。平面プランは楕円形を呈し、長径 1.4m、短径 1.0m を測る。断面は逆台形で、深さは 45cm である。覆土は炭化物を多く含む灰黒色土を主体とする。多量の土師器と瓦器の小皿・坏が、北側から南側に向かって流れ込んだ状態で出土した。また、西側床面より骨片が出土した。

出土遺物（Fig.32）　587-591 は土師器である。587・588 は回転ヘラ切り底の小皿で、口径は 10.0cm、9.6cm を測り、外底部に板状圧痕を有する。胎土に金雲母を含み、色調は 587 が明橙色、588 は橙色を呈する。589 は丸底坏で、口径 15.4cm を測り、外底部に板状圧痕を有する。590・591 は回転ヘラ切り底の坏である。口径は 15.9cm、15.2cm を測り、外底部に板状圧痕を有する。589-591 は廃棄された後、二次焼成を受けたのか、破片毎に色調が橙色、明橙色、黒色と異なり、煤の付着がみられるものもある。592-596 は瓦器で、592・593 は皿、594-596 は椀である。597



Ph.54　SK030093（西から）

Fig.32　SK030093 実測図（1/30）および出土遺物実測図（1/3）

は須恵質土器の鉢で、底部はナデで仕上げる。内面は捏鉢として使用されたため滑らかである。598は白磁碗Ⅳ類、599は白磁碗Ⅴ類の口縁部片である。600は越州窯系青磁の水注で、体部外面には篦による文様が施される。精良な灰色の胎土に灰緑色の釉が全面にかかる。601は施釉陶器の盤で、口縁部は外に大きく開く。黒色粒を多く含む灰色の胎土に黄灰緑色の釉が外面にかかる。外面の口縁部直下には楕円形の目跡が残る。602は滑石製石鍋の破片で、外面には煤が付着する。破面も研磨

Ph.55　SK030099 土層（北から）

Ph.56　SK030099（南西から）

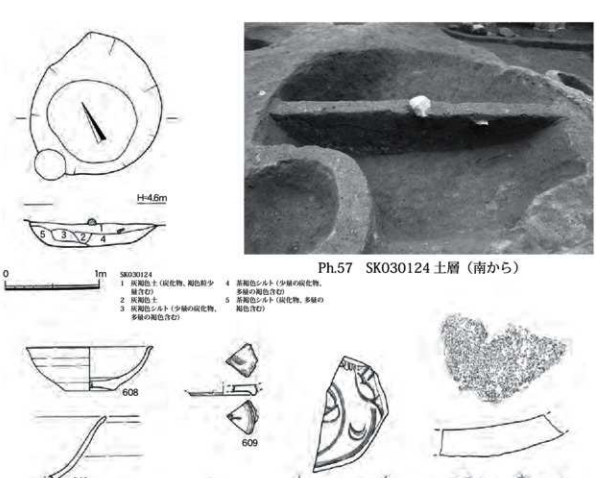
Fig.33　SK030099 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

されており、把手部分を利用し、二次加工品を製作していたものと思われる。603 は瓦玉で重さは 10.5g である。土師質の平瓦を使用し、凸面はナデ調整が窺えるが、凹面は磨滅のため調整不明である。他に回転糸切り底の土師器、ガラス坩堝、金属坩堝、軽石、栽培植物であるモモ炭化核の小片 2 点（参照：付編 3 炭化種実について）が出土する。土坑の時期は出土遺物から 12 世紀前半と考えられる。

SK030099（Fig.33　Ph.55・56）　調査区東側に位置する。平面プランは楕円形を呈し、長径 1.25m、短径 0.8m を測る。断面は船底状で、深さは 30cm である。覆土は灰色砂質土を主体とし、層状に堆積する。中層には焼土、炭化物を多量に含む明灰褐色シルトがみられる。

出土遺物（Fig.33）　604・605 は土師器である。604 は丸底坏で、復元口径 16.0cm を測り、外底部に板状圧痕を有する。胎土に金雲母をわずかに含み、色調は橙色を呈する。605 は回転ヘラ切り底の小皿で、復元口径 9.0cm を測り、底部はナデで仕上げる。胎土に微粒の金雲母を多く含み、色調は橙色を呈する。606 は瓦器椀で、断面が逆台形の低い高台が付き、底部は糸切りが残る。607 は粘板岩製の砥石片で、3 面が残る。研磨面には擦痕が多く刻まれる。重さは現存で 22.7g を量る。他に白磁の小片が出土する。土坑の時期は出土遺物から 11 世紀後半と考えられる。

SK030124（Fig.34　Ph.57）　調査区中央に位置する。平面プランは円形を呈し、直径約 1.5m を測る。壁面は緩やかな傾斜をもち、深さは 23cm である。覆土は炭化物と粒状の黄色土を含んだ灰褐色土を主体とする。上層からは拳大の花崗岩が出土する。



Ph.57　SK030124 土層（南から）

Fig.34　SK030124 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（Fig.34）　608~610 は白磁で、608 は皿Ⅴ-2a 類、609 は皿Ⅶ-1c 類、610 は碗Ⅴ類である。609 は内面に花文状の櫛描文を施し、高台内には墨書が残る。611 は龍泉窯系青磁碗Ⅰ-2 類である。612 は無釉陶器の鉢で、口縁部内面に二条の突起を有する。白色砂粒を多く含み、色調は褐色である。613 は須恵質の平瓦である。凸面は格子目叩きののち、部分的にナデ消し、凹面は磨滅が著しいが、わずかに布目が残る。他に白磁碗Ⅳ類や鉄釘が出土する。土坑の時期は出土遺物から 12 世紀中頃と考えられる。

SK030094（Fig.35　Ph.58）　調査区中央に位置し、北側は調査区外へ延びる。平面プランは楕円形を呈し、長径 1.4m 以上、短径 1.2m を測る。断面は船底状を呈し、深さは 35cm である。土層からは北側壁面にまず 3~5 層が流れ込み、その後、中央部に 1、2 層が堆積したことがうかがえる。覆土は炭化物を含んだ、灰褐色シルト、砂質土を主体とする。出土遺物は細片ばかりであるが、回転ヘラ切り底と糸切り底の土師器、瓦器、白磁碗Ⅴ類、中国の施釉陶器が出土し、土坑の時期は出土遺物から 12 世紀中頃と考えられる。

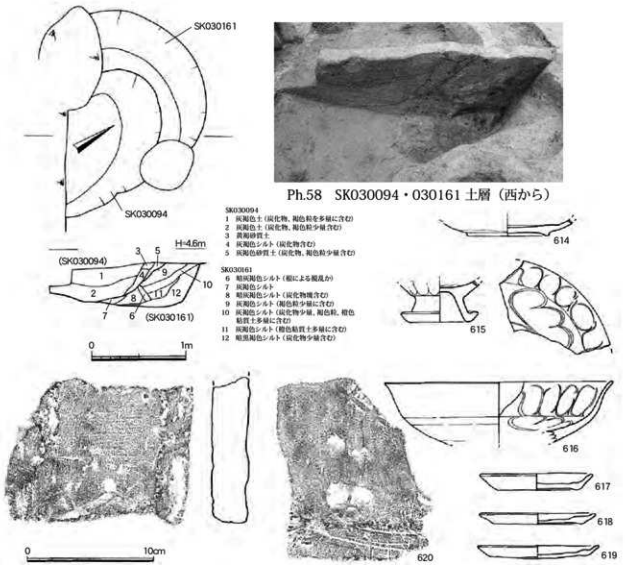
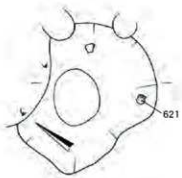


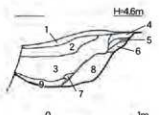
Fig.35 SK030094・030161 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

SK030161（Fig.35 Ph.58） 調査区中央に位置し、北側は調査区外へ延びるとともに、SK030094 に大部分を削平される。平面プランは楕円形を呈すると思われ、長径 2.0m 以上、短径 1.8m、深さは 45cm を測る。土層では北側から土砂が流れ込んだ様子がうかがえ、覆土は灰褐色シルトを主体とし、焼土、炭化物を含む。

出土遺物（Fig.35） 614~616 は白磁で、614 は皿Ⅶ-2a 類である。615 は脚付の香炉で、体部外面は鎬蓮弁状となるが、破片のため、全容は不明である。胎土は黒色粒を含み、灰色を呈する。やや青味を帯びた白色釉が体部外面から脚部上面までかかる。体部内面と脚部内面は露胎である。616 は浅型碗で、体部は中位で湾曲し、口縁部は外反する。内面には篦で花文を施す。灰色から橙色の胎土に化粧土を施し、白濁色の釉がかかる。器壁には細かい貫入がみられる。617~619 は回転ヘラ切り底の小皿で、口径は 9.0~9.6cm を測り、618・619 は外底部に板状圧痕を有する。内面底部は横方向のナデを施す。色調は 617・618 が暗橙色、619 は橙色を呈する。620 は土師質の平瓦片で、凸面には格子目叩きの後、強いナデで調整し、凹面には細かい布目が残る。他に、少量であるが、回転糸切り底の土師器、ガラス坩堝が出土する。土坑の時期は出土遺物から 12 世紀前半と考えられる。

SK030175（Fig.36 Ph.59・60） 調査区中央に位置し、北側は SK030198 に削平される。平





SK030175
1 灰色シルト（炭化物微含む）
2 黄褐色シルトに灰黒色シルト混入（炭化物、褐色粒少量含む）
3 黄褐色シルト（炭化物、褐色粒多量に含む）
4 茶褐色砂質土
5 茶褐色砂質土（炭化物、褐色粒、白色シルト少量含む）
6 茶褐色シルト
7 灰黒色粘質土
8 灰褐色砂質土粗炭・砂、砂質強い（炭化物、褐色粒含む）
9 灰黒色シルト（灰褐色砂質土、黒色粘質土細粒に混入、炭化物、褐色粒含む）

Ph.59　SK030175 土層（南から）

Ph.60　SK030175（南東から）

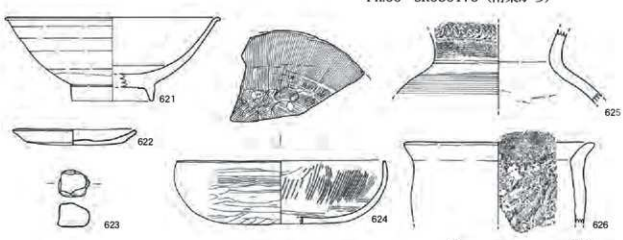
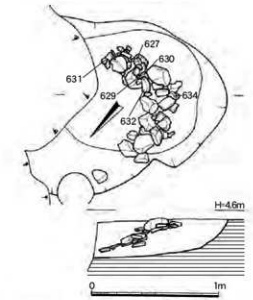


Fig.36　SK030175 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

Ph.61　SK030175 出土遺物



Ph.62　SK030193（北から）

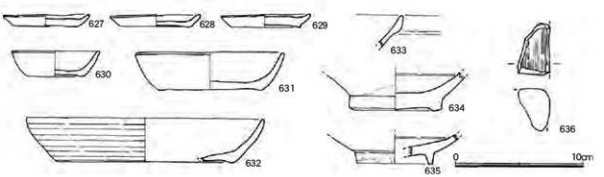


Fig.37　SK030193 実測図（1/30）および出土遺物実測図（1/3）

面プランは偏平な円形を呈し、直径約 1.5m を測る。断面は「U」字状を呈し、深さは 60cm である。覆土は茶褐色砂質土を主体とし、炭化物や褐色粒、白色粘質土を含む。特に 8・9 層は厚さ 1cm 程度の炭化物層が層状に堆積する。

出土遺物（Fig.36　Ph.61）　621 は白磁碗Ⅴ-4a 類、622 は回転ヘラ切り底の土師器の小皿で、口径 9.7cm を測り、外底部に板状圧痕を有する。胎土に金雲母を多量に含み、色調は橙色を呈する。623 は砂岩製の石球で、重さは 11.7g である。加工途中のためか、偏平である。624–626 は下層の遺物の混入である。624 は都城系の土師器の坏である。底部は丸みを有し、体部は直線状に立ち上がり、口縁はやや内湾し、丸くおさめる。内外面ともに密なヘラ磨きで調整され、体部内面には放射状、底部内面には円弧状の暗文が施される。焼成は良好で、色調は明橙色を呈する。625 は須恵器の壺の頸部片である。頸部にはカキ目、頸部中位には波状文を施す。体部内面は当て具の痕跡をナデ消す。626 は土師器の甕で、外面は磨滅で調整は不明、内面は粗い削りで調整する。他に、回転糸切り底の土師器、白磁碗Ⅳ・Ⅺ類、施釉陶器、ガラス坩堝、鉄釘が出土する。土坑の時期は出土遺物から 12 世紀前半と考えられる。

SK030193（Fig.37　Ph.62）　調査区中央に位置し、北側は他の土坑に切られる。平面プランは楕円形を呈し、長径 1.7m 以上、短径 1.3m、深さは 28cm を測る。断面は逆台形を呈し、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は炭化物と赤褐色粒を多く含んだ茶褐色砂質土、灰褐色土を主体とする。拳大から頭大の花崗岩や砂岩、礫岩が土師器や陶磁器とともに南西側から流れ込んだ状態で出土した。

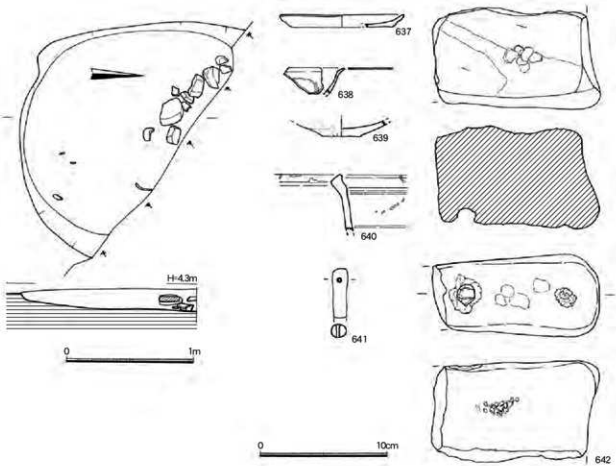


Fig.38　SK030198 実測図（1/30）および出土遺物実測図（1/3）

出土遺物（Fig.37）　627~632 は土師器である。627~629 は回転糸切り底の小皿で、口径は 6.7~7.1cm を測り、627 の外底部は雑なナデが施される。色調は 628 が明橙色、他は橙色を呈する。630 は口径に比して高さがある回転糸切り底の小皿で、口径 6.9cm を測る。胎土に金雲母を含み、色調は橙色を呈する。631・632 は回転糸切り底の坏で、復元口径は 11.8cm、18.8cm を測る。胎土に金雲母を含み、橙色を呈する。633~635 は白磁で、633・634 は碗Ⅳ類、635 は碗Ⅱ類である。636 は下層の遺物の混入で、移動式竈の小片である。他に、炉壁（Ⅲ -34 Fig.32-634）、鉄滓、鉄釘等が出土する。陶磁器は古い様相を呈するものが多く出土するが、土師器等の出土遺物から土坑の時期は 14 世紀前半と考えられる。

SK030198（Fig.38）　調査区中央に位置し、北側は調査区外へ延びる。平面プランは隅丸方形を呈し、長径 1.8m 以上、短径 1.3m 以上を測る。底面は徐々に中央に向かって深くなり、深さは 16cm である。また、中央から北西にかけて直線状に拳大から頭大の花崗岩や砂岩がまとまって出土した。覆土は炭化物を含む灰黒色砂質土である。

出土遺物（Fig.38）　637 は回転ヘラ切り底の土師器の小皿で、口径は 9.8cm を測る。胎土に金雲母を含み、色調は暗橙色を呈する。638 は白磁の小碗で、内面は箆で花文が描かれ、639 は白磁の皿Ⅵ類である。640 は施釉陶器の甕で、口縁上面に胎土目を有する。黒色粒を含む灰色の胎土に灰緑色の釉が全面にかかる。641 は有孔土錘で、下半を欠損する。断面は円形を呈し、上部がやや径が大きくなる。穿孔は片面から行う。重さは現状で 5.8g である。642 は礫岩の台石の欠損品である。

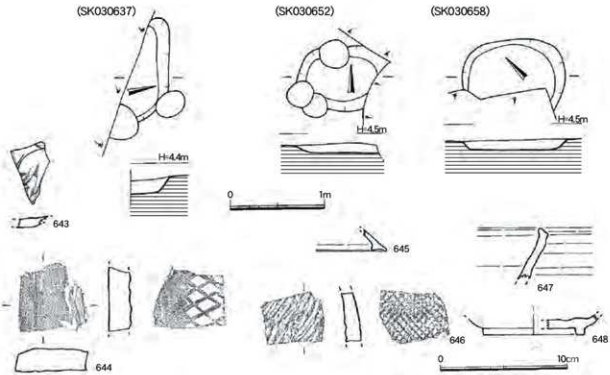


Fig.39　SK030637・030652・030658 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

残存する全ての面は敲打痕や擦痕等、何らかの使用した痕跡が残る。また、狭い側面には直径 1.5cm、深さ 1.0cm の円形の穿孔がなされている。そこから約 7.0cm 離れた箇所にも穿孔をしようとした痕跡が残される。他に回転糸切り底の土師器、施釉陶器、鉄釘、骨片が出土する。土坑の時期は出土遺物から 12 世紀前半と考えられる。

SK030637（Fig.39）　調査区西側に位置し、南側は調査区外へ延びる。平面プランは隅丸方形を呈し、東西方向の一辺は 1.0m、深さは 15cm を測る。壁は緩やかに立ち上がり、底面は平坦である。覆土は炭化物を含む茶褐色土を主体とする。

出土遺物（Fig39）　643 は龍泉窯系青磁皿Ⅰ -1c 類の底部片である。644 は須恵質の平瓦で、凸面は格子目叩き、凹面は細かい布目が残る。側面は丁寧な削りで仕上げる。土坑の時期は出土遺物から 12 世紀中頃から後半と考えられる。

SK030652（Fig.39）　調査区西側に位置し、北側はわずかに調査区外へ延びる。平面プランは楕円形を呈し、長径 1.0m 以上、短径 0.7m、深さは 10cm を測る。底面は平坦で、覆土は茶褐色土を主体とする。

出土遺物（Fig.39）　645 は下層からの混入で、須恵器の返りをもつ坏蓋である。赤焼け土器で、色調は明橙色を呈する。646 は陶器の甕である。外面は斜格子目の細かい叩き、内面には当て具痕が残る。胎土は橙色から明橙色を呈し、色調は一部灰色、大部分は明橙色を呈する。他に土師器片、白磁片、土壁が出土し、土坑の時期は 12 世紀頃と考えられる。

SK030658（Fig.39）　調査区西側に位置し、南側はトレンチで削平される。平面プランは隅丸方形を呈し、長径 1.1m、短径 0.8m 以上、深さは 10cm を測る。底面は平坦で、覆土は茶褐色土に黄褐色シルトが斑状に混入する。

出土遺物（Fig.39）　647 は須恵質土器の鉢、648 は下層からの混入である須恵器の高台付坏である。他に白磁、須恵質の瓦片が出土する。土坑の時期は出土遺物から 12 世紀頃と考えられる。

Ph.63　SK030659（南から）

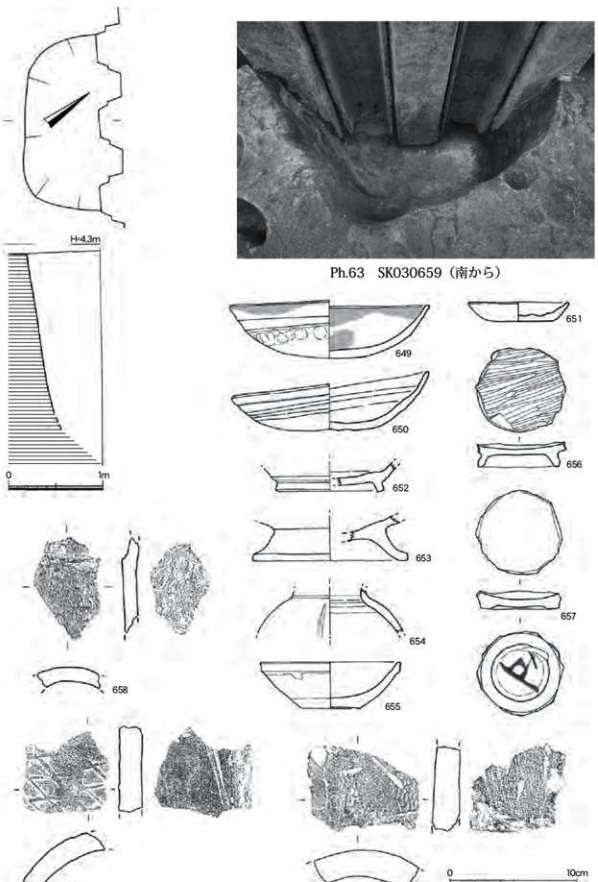
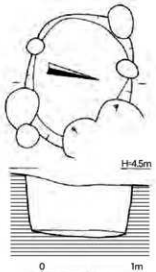


Fig.40　SK030659 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）



Ph.64　SK030660（東から）

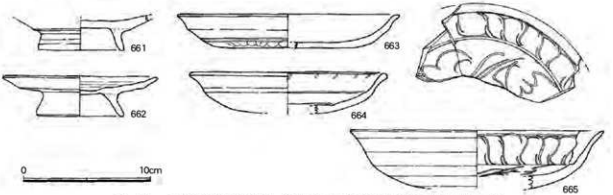


Fig.41　SK030660 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

SK030659（Fig.40　Ph.63）　調査区西側に位置し、北側は調査区外へ延びる。平面プランは隅丸方形を呈し、東西方向の一辺は 1.8m、南北方向の一辺は 1.05m 以上を測る。壁は急な傾斜をもち、深さ 1.7m まで掘削したが、それ以上は崩壊の危険があるため、掘削できなかった。覆土は炭化物を多量に含む茶褐色土を主体とする。

出土遺物（Fig.40）　649–653 は土師器である。649・650 は丸底坏で、口径は 16.2cm、15.6cm を測る。胎土に金雲母を含み、色調は橙色を呈する。649 は燈明皿として使用され、底部内面と口縁部内外面に煤が付着する。また、外底部に布目の痕跡がある。650 は外底部に板状圧痕を有する。651 は回転ヘラ切り底の小皿で、外底部に板状圧痕を有し、復元口径は 8.0cm を測る。652・653 は椀の高台片である。654 は越州窯系青磁の壺の頸部片である。体部外面には押圧縦線文が施される。655 は施釉陶器の玉縁口縁をもつ小鉢である。黒色粒を含む灰色から褐色の胎土に内面から口縁部外面まで濃緑色の釉がかかる。体部下半以下は露胎である。656・657 は瓦玉及び未成品である。656 は黒色土器 B 類の高台部を使用し、縁辺を打ち欠いて円盤状に整形しようとしており、瓦玉の製作途中と考えられる。657 は白磁碗Ⅳ類の高台部片で、こちらも縁辺を打ち欠いて円盤状に整形している。高台内には墨書が残る。658–660 は丸瓦で、658 は須恵質で、凸面は叩きののち、粗くナデ消し、凹面の布目も磨滅のため、不明瞭である。659 は須恵質で、凸面の格子目、凹面の布目、ともに明瞭である。660 は瓦質で、凸面は縄目叩きの後、部分的にナデ消し、凹面には細かい布目が残る。他に東播系須恵器の小碗、白磁片が出土する。土坑の時期は出土遺物から 11 世紀後半と考えられる。

SK030660（Fig. 41　Ph.64）　調査区中央に位置する。平面プランは隅丸方形を呈し、長径 1.4m、

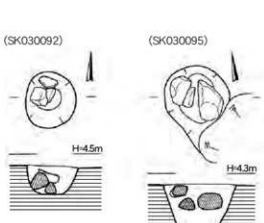
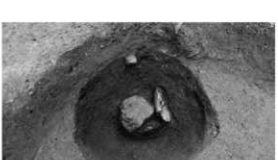


Fig.42　SP030092・030095 実測図（1/40）


Ph.65　SP030092 根石検出状況（東から）

Ph.66　SP030095 根石検出状況（北から）

短径 1.1m、深さは 66cm を測る。断面は逆台形を呈し、底面はほぼ平坦である。覆土は炭化物、赤褐色粒を含む茶褐色土を主体とする。

出土遺物（Fig.41）　661~664 は土師器である。661・662 は高台付皿で、外に開く高い高台が付く。ともに回転ナデで仕上げられ、胎土に金雲母を含み、661 は橙色、662 は明橙色を呈する。663・664 は丸底坏で、復元口径は 17.6cm、15.6cm を測る。663 は外底部に板状圧痕を有し、内面は丁寧なナデで調整され、色調は明橙色を呈する。664 は口縁内面にコテ当て痕が残り、色調は橙色、部分的に明褐色を呈する。665 は白磁の浅型碗で、体部は中位で湾曲し、口縁部は外反する。内面の底部と体部の境と口縁部直下に沈線が巡り、その間に箆で花文を施す。灰色から明橙色の胎土に化粧土を施し、白濁色の釉がかかる。器壁には細かい貫入がみられる。他に白磁Ⅳ類の小片、灯壁が出土する。土坑の時期は出土遺物から 11 世紀後半と考えられる。

(3) 柱穴（SP）

SP030092（Fig.42　Ph.65）　調査区中央に位置する。平面プランは直径 25~30cm の円形を呈し、深さは 15cm を測る。底面付近から礫岩、砂岩の拳大から頭大の石材を確認した。柱の根固め石等に使用された可能性が考えられる。土師器の細片が出土する。

SP030095（Fig.42　Ph.65）　調査区東側中央に位置する。平面プランは直径 35~40cm の円形を呈し、深さは 25cm を測る。床面から約 10cm 浮いた状況で花崗岩の頭大の石材を確認した。柱の根固め石等に使用された可能性が考えられる。遺物は出土していない。

SP 出土遺物（Fig.43・44　Ph.67）　666 は SP030089 出土の土師器の蛸壺の底部片である。667 は SP030114 出土の楠葉型の黒色土器 B 類の椀で、内外面ともに細かい磨きを施す。668~671

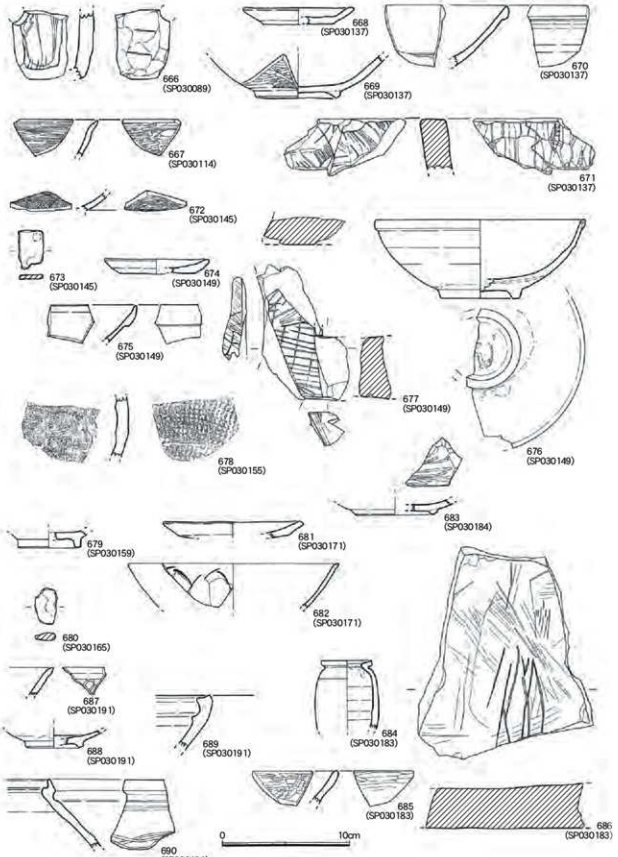


Fig.43　第2面SP出土遺物実測図①（1/3）

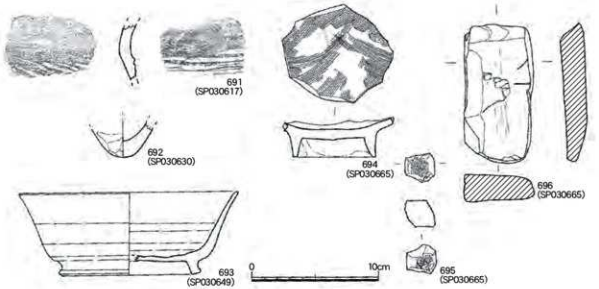


Fig.44　第 2 面 SP 出土遺物実測図②（1/3）

Ph.67　第 1 面 SP 出土遺物

は SP030137 出土で、668 は回転ヘラ切り底の土師器の小皿、669 は瓦器椀、670 は白磁碗Ⅳ類、671 は滑石製石鍋の口縁部片で、外面には多量の煤が付着する。672・673 は SP030145 出土で、672 は楠葉型の黒色土器 A 類の椀で、内外面ともに丁寧な磨きを行った後、見込みには平行線文を研磨で描く。673 は下層の混入と考えられる古墳時代前期の長さ 3.0cm、幅 2.0cm、厚さ 0.3cm を測る長方形状の鉄片である。674~677 は SP030149 出土で、674 は回転ヘラ切り底の土師器の小皿、675 は白磁碗Ⅳ類、676 は白磁碗Ⅱ類である。677 は滑石の破片で、3 面に使用痕が残るが、それ以外は破面である。使用面には全て煤が付着するが、石鍋のような調整痕は見られない。砥石として使用したものか。678 は SP030155 出土の高麗陶器である。胎土の色調はあずき色を呈し、白色砂粒をわずかに含むが、精良で、焼成は堅緻である。外面は叩きを行ったのち、部分的にナデ消す。1 条の沈線が巡る。内面は指オサエ部に布目痕が残る。679 は SP030159 出土の防長産の緑釉陶器で、灰橙色の軟質な胎土に濃緑色の釉がかかる。680 は SP030165 出土で、下層の混入と考えられる長さ 2.9cm、幅 1.7cm、厚さ 0.3~0.5cm を測る不整形な鉄片である。681・682 は SP030171 出土である。681 は回転ヘラ切り底の土師器の小皿、682 は白磁碗Ⅺ -4 類、他にガラス坩堝、羽口（Ⅲ -34 Fig.32-636）が出土する。683 は SP030184 出土の和泉型瓦器椀の底部片で、見込みに輪状の暗文を描く。684~686 は SP030183 出土、684 は施釉陶器の小壺で、灰色の精良な胎土に暗緑色の釉がかかる。685 は黒色土器 A 類、686 は砂岩の砥石で、上下面以外、破面であり、下面も磨滅が著しい。上面はよく研磨され、凹状となり、擦痕が多く残る。687~690 は SP030191 出土、687 は青白磁の口縁部片で、外面には陽刻で花文を描く。688 は白磁皿Ⅶ類、689 は無釉陶器の鉢、690 は施釉陶器の壺である。691 は玄海灘式製塩土器で、内面に焦げが付着する。692 は SP030630 出土の土師器の飯蛸壺、693 は SP030649 出土の須恵器の高台付坏である。694~696 は SP030665 出土、694 は白磁碗Ⅴ -4b 類、695 は須恵質の瓦玉で、重さは 13.6g である。696 は砂岩の敲石で、中央部に僅かな窪みが残る。

4）第３面の調査（Fig.45　Ph.68・69）

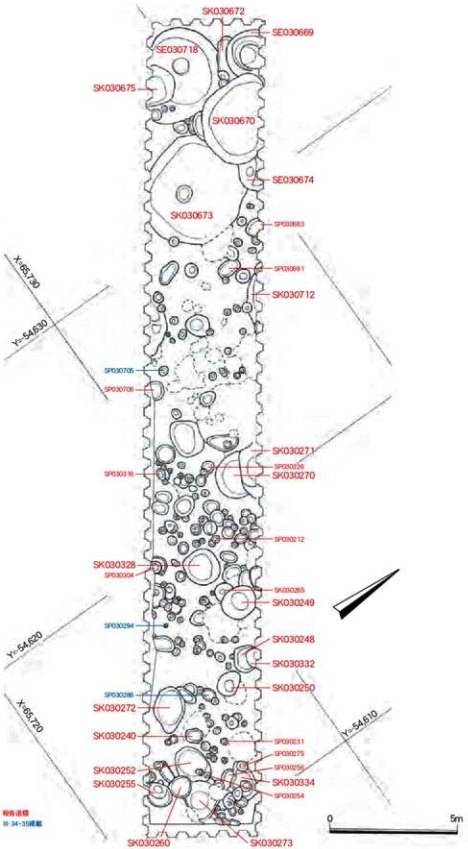
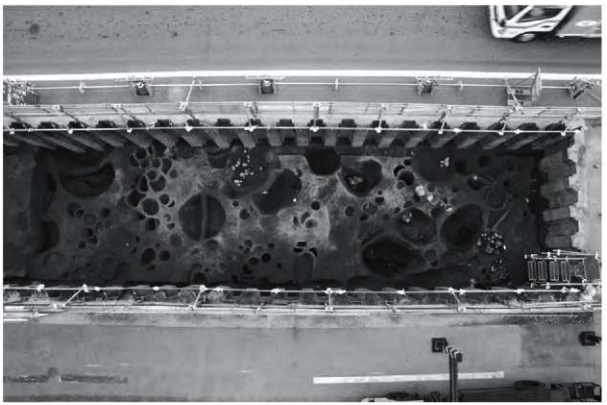


Fig.45　第３面全体図（1/150）



Ph.68　東側３面全景（南から）

Ph.69　西側３面全景（南から）

第3面は砂質を帯びた暗茶褐色砂質土の上面で検出し、標高は東側が4.3m、中央は4.2m、西側は4.0mを測り、東側から西側に向かって徐々に低くなる。検出した主な遺構は井戸2基、土坑20基、柱穴である。主な時期は第2面から引き続き、11世紀後半から12世紀中頃までであるが、古墳時代前期や古代の柱穴や土坑がわずかであるが、増加する。

(1) 井戸 (SE)

SE030669 (Fig.46　Ph.70・71)　調査区西北端に位置し、北側は調査区外へ延び、東側はSK030670に切られる。掘方の平面形は直径2.0m以上の円形を呈する。壁は傾斜を急にし、北側では遺構面から1.4m付近で、一度緩やかになるが、再び井側に向かって急となる。井側は遺構検出面から確認しており、直径70cmの円形であるが、下面では直径55~60cmと細くなる。覆土は茶褐色土を主体とし、木質等は確認できなかった。また、遺構検出面から約50cm下で、一辺25~30cm、厚さ10cmの偏平な花崗岩が出土した。井戸を廃棄する際、祭祀的な意味で置かれたものと考えられる。標高1.5m付近まで掘削したが、崩落の危険があるため、水溜等の確認まで至らなかった。

出土遺物 (Fig.47　Ph.72)　697~710は井側内から出土した遺物である。697は丸底坏で、復元口径は15.0cmを測り、胎土に金雲母を含み、色調は明橙色を呈する。698は黒色土器B類の椀で、内面は横方向の磨き、外面の口縁下には指オサエが残る。699は瓦器椀で、内外面ともにナデで調整する。700~704は白磁である。700は碗で、体部は深く丸味をもって立ち上がり、口縁端部は外反する。内面に櫛目で花文を描く。701は碗Ⅵ-1b類、702は碗Ⅵ-2b類、703は碗Ⅴ-1a類である。704は壺で、粘土紐を一周させたものを貼り付け、耳とする。外面肩部下位に段を有する。白灰色の精良な胎土にやや緑味を帯びた灰白色の釉が外面から口縁部内面までかかる。口縁部上面の釉は掻きとり露胎とする。705は龍泉窯系青磁皿Ⅰ-1c類である。706は瓦玉で、白磁皿Ⅶ類の高台の縁辺を打ち欠いて円盤状に整形する。重さは57.1gを量る。707は滑石製石鍋の転用品で、内面には擦痕が残る。外面には煤が付着する。708は須恵質の丸瓦で、凸面は格子目叩き、凹面には細かい布目が残り、側面はヘラナデを施す。709は土師質の磚で、器面は粗いナデで調整する。710は棒状の粘土塊で、断面2.6~3.0cmの楕円形を呈し、長さ3.8cmが残る。きれいな円形ではなく、やや多角形気味で、稜線を有する。胎土は白色砂粒を含み、色調は橙色であるが、部分的に被熱しており、褐色となる。711~717は掘方出土の遺物である。711は回転ヘラ切り底の土師器の坏で、復元口径16.0cmを測り、外底部に板状圧痕を有する。胎土に金雲母を含み、暗橙色を呈する。712は施釉陶器の壺の肩部片で、把手の下位には沈線で文様を描く。灰色の胎土に緑濁色の釉がかかる。713は石製の錘で、重さは23.7gを量る。緑色片岩と思われ、光沢を帯びた粒子を含み、色調は青灰色を呈する。端部が一部欠損するが、ほぼ完形品である。鈕の省略された裁頭四角錐形を呈し、横方向の紐通し孔を有する。上端には吊り下げによる擦れた痕跡が観察され、長期間使用されたことがうかがえる。714は土製の外型鋳型ではないかと考えられる。両面ともに被熱しており、暗赤褐色を呈する。胎土は2.0mm程度の白色砂粒を含む。器面は磨滅しており、調整不明である。なお中央部はすでに剥離が始まっている。715は都城系の土師器の坏で、口縁部は端部をわずかに折り返し、内側に段を有する。精良な胎土で、色調は明橙色を呈する。丁寧なナデで仕上げた後、内面に一定の間隔で、暗文を施す。716は古墳時代前期の土師器の高坏である。胎土は精良で、金雲母を多く含み明褐色を呈する。外面は横方向の細密な磨き、内面は縦方向の磨きで、暗文を施す。717は弥生土器の甕の底部片で、上げ底気味の平底である。底部内面は放射状の刷毛目、外部は強いナデで調整される。他に白磁の紅皿、越州窯系青磁、棒状のガラス (Ⅲ-34 Fig.23-526)、炉壁、鉄釘、鉄塊系遺物が出土する。井戸の掘削時期は出土遺物から11世紀後半から12世紀前半で、12世紀中頃には廃絶されたと考えられる。

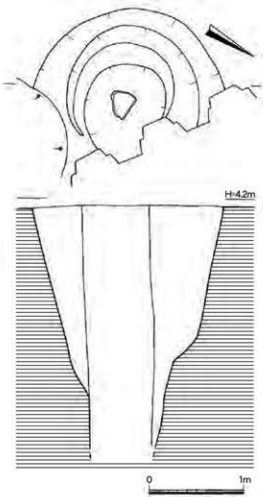


Fig.46　SE030669 実測図（1/40）

Ph.70　SE030669（西から）

Ph.71　SE030669 井側内石材（南から）

Ph.72　SE030699 出土遺物

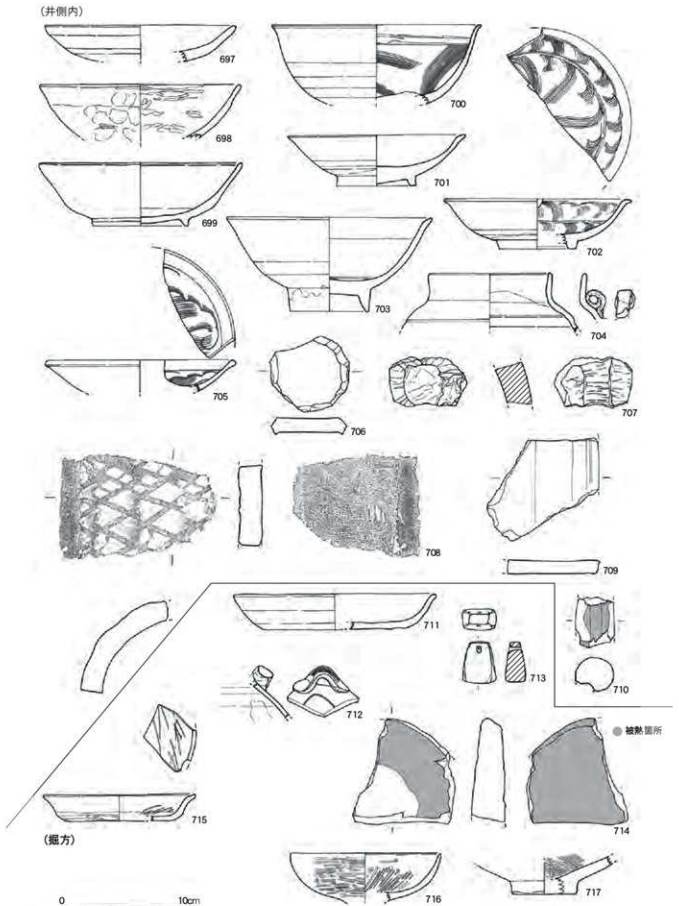


Fig.47　SE030669 出土遺物実測図（1/3）

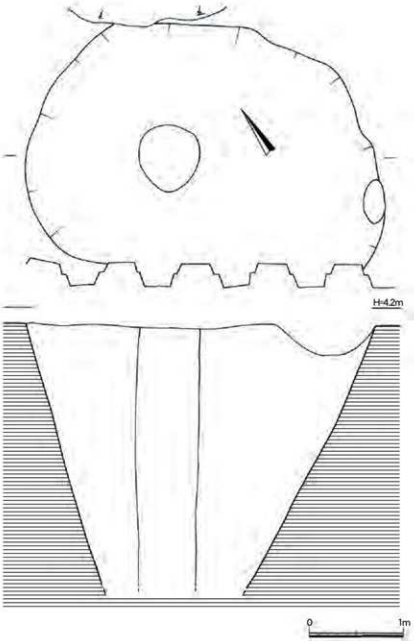


Fig.48　SE030718 実測図（1/40）

Ph.73　SE030718（北から）

Ph.74　SE030718 井側検出状況（北から）

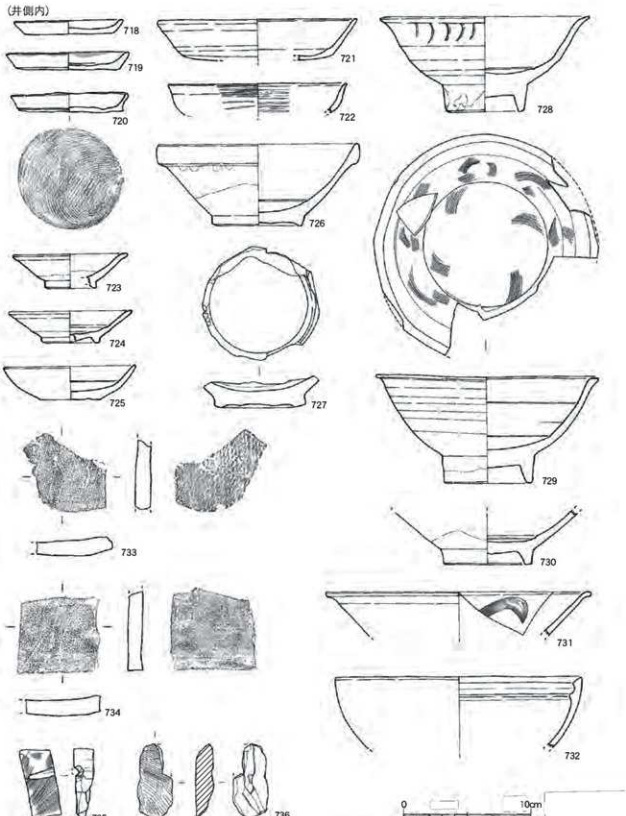


Fig.49　SE030718 出土遺物実測図①（1/3）

SE030718（Fig.48　Ph.73・74）　調査区西北端に位置し、南側は調査区外へ延びる。掘方の平面形は楕円形を呈し、長径 3.8m、短径 2.8m を測る。井側は検出面から確認でき、掘方のやや西側寄りに付き、直径約 65cm の円形を呈する。覆土はやや粘質を帯びた灰黒色土で、炭化物、焼土が混入する。標高 1.3m 付近まで掘削を行ったが、木質等は確認できなかった。

出土遺物（Fig.49・50　Ph.75）　718~736 は井側内から出土した遺物である。718~720 は回転糸切り底の土師器の小皿で、口径は 8.7~9.4cm を測る。外底部に板状圧痕を有し、720 は細かい板目となっている。719 の口縁部には煤が付着し、灯明皿として使用している。721 は回転糸切り底の土師器の坏で、復元口径は 15.8cm を測る。金雲母、赤褐色粒を含み、明橙色を呈する。722 は楠葉型の瓦器の皿で、口縁内面に沈線が巡る。内外面ともに細かい横方向の磨きを施す。723~731 は白磁で、723・724 は皿Ⅲ -1 類、725 は皿Ⅷ -1a 類である。726・727 は碗Ⅳ類、727 は瓦玉で、高台の縁辺を打欠き、円盤状としている。重さは 148.5g を量る。728 は碗Ⅴ -2b 類、729 は碗Ⅴ -4b 類、730 は碗Ⅷ類、731 は大型の椀で、鉄絵が内面に描かれる。732 は無釉陶器の鉢で口縁内面に二条の突起を有する。733 は瓦質、734 は須恵質の平瓦である。凸面は縄目叩きの後、部分的にナデ消し、凹面には布目が残る。735 は滑石製石鍋の転用品で、外面にはノミの痕跡が残る。破面も研磨されており、直径 0.8cm の穿孔が残る。重さは 41.7g を量る。736 はスタンプ状の滑石製品で、楕円形であったと思われる。把手部分は低く、粗い整形を施し、下面は平坦で、多くの擦痕が残るが、滑らかである。重さは現状で 22.8g である。737~759 は掘方出土の遺物で、737~743 は中層、744~759 は上層である。737・738 は土師器の丸底坏で、外底部に板状圧痕を有し、復元口径は 15.7cm を測る。738 は回転糸切り底の土師器の坏で、復元口径 15.0cm である。ともに胎土に金雲母を含み、橙色を呈する。739・740 は白磁碗Ⅳ類の底部片である。739 の高台内には「九綱」の墨書が残る。740 は瓦玉として整形され、重さは 82.7g を量る。741 は施釉陶器の壺の頸部片で、肩部に横耳が付く。黒色粒を含む胎土に緑濁色の釉がかかる。742 は施釉陶器の盤で、砂粒を多く含む灰色の胎土に暗灰緑色の釉が口縁部から内面にかかる。口縁上端部の釉は掻きとり、露胎となった部分は褐色を呈する。743 は粘板岩の敲石である。下面のみ使用され、磨滅している。上部は窪んでおり、握りやすくなっている。重さは 139.6g を量る。744 は回転糸切り底の土師器の小皿で、口径 9.2cm、745 は回転ヘラ切り底の土師器の小皿で、口径 9.5cm を測る。ともに外底部に板状圧痕を有し、胎土には金雲母を含み、橙色を呈する。746 は瓦器皿で、口縁部内外面は丁寧に磨きを施す。747 は白磁碗の底部片である。白橙色の胎土に化粧土が施され、柔らかい白色の釉が高台畳付を巻き込んで高台内までかかる。外面に縦筋で刻みを入れ、花弁とし、内面は箆と櫛目で花文を描く。748 は瓦玉で、白磁碗Ⅳ類の底部片を利用し、重さは 135.4g である。749 は天目茶碗の口縁部片で、濃茶色の釉がかかり、部分的に黒色を呈する。口縁内面直下には目跡が残る。750 は施釉陶器の壺の肩部片で、砂粒を含む灰色の胎土に濃緑色の釉がかかる。体部外面には箆による花文を描く。751 は円盤状の土製品である。土器の再利用と思われるが、磨滅が著しく、調整不明である。重さは 5.9g を量る。752~754 は管状土錘で、752・753 はエンタシス状を呈し、半分を欠損する。現状で重さは 2.6g、8.0g である。754 は円筒状を呈し、ほぼ完形であるが、器壁は荒れる。60.2g を量る。755 は瓦質の平瓦で、凹面は布目が残り、凸面と側面はナデで調整する。756 は滑石製石鍋の加工品である。外面にはノミ痕が残り、体部内面は粗い削りを施す。外面には煤が付着する。757 は砂岩製で、凹面を砥石として使用している。758 は製塩土器で、手捏ねで作られ、口縁端部は内側に折れる。759 は防長産の緑釉陶器で、底部には回転ヘラ切りが残る。橙色の胎土に淡緑色の釉が全体にかかる。他に板状のガラス破片、金属坩堝（Ⅲ -34 Fig.3-37）、炉壁（Ⅲ -34 Fig.4-60）、鉄滓、鉄滓（付編 2 参照）が出土する。井戸の掘削時期

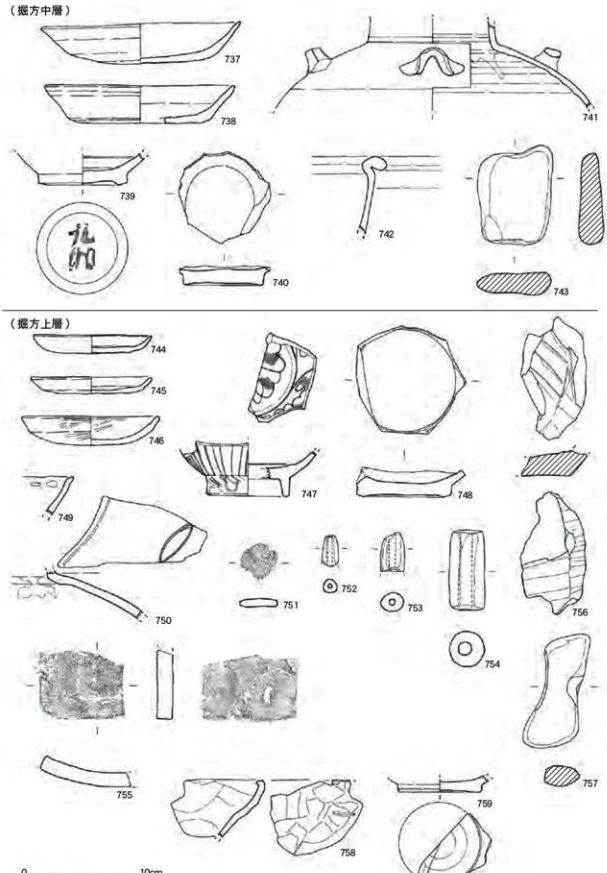


Fig.50　SE030718 出土遺物実測図②（1/3）

Ph.75　SE030718 出土遺物

は 12 世紀前半頃で、12 世紀中頃から後半に廃絶されたと考えられる。

（2）土坑（SK）

SK030240（Fig.51　Ph.76）　調査区東側に位置する。平面プランは偏平な楕円形を呈し、長径 0.7m、短径 0.5m、深さは 45cm を測る。断面は逆台形を呈する。覆土は粘質を帯びた茶褐色土を主体とし、炭化物、赤褐色粒を含む。土坑中位から白磁皿、鉄製の短刀が出土する。

出土遺物（Fig.51）　760 は回転糸切り底の土師器の小皿で、復元口径は 9.0cm を測り、外底部に板状圧痕を有する。胎土に金雲母を含み、色調は明橙色を呈する。761 は瓦器の皿で、丁寧に横ナデを施したのち、粗な磨きを行う。口縁部は黒変しており、伏せた状態で焼成される。762・763 は白磁の皿Ⅵ-1b 類で、762 は口縁部がわずかに欠損するが、ほぼ完形品である。764 は刃部の長さ 18.0cm を測る鉄製の短刀である。茎は 3.5cm が残るが、端部を欠損する。全体に錆化が進む。

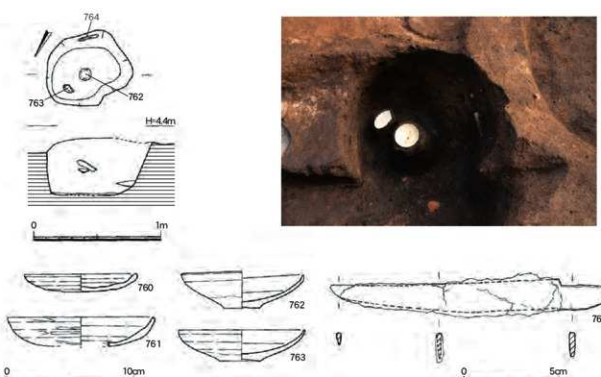
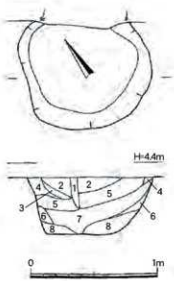


Fig.51　SK030240 実測図（1/30）および出土遺物実測図（1/3・1/2）



SK030248
1 灰褐色シルト（木根含）
2 明灰褐色シルト（白色土の小塊を少量含む）
3 灰褐色シルト（白色粘質土、黒色粘質土層状に混入、褐色粒、炭化物少量含む）
4 黒褐色シルト（褐色粒多量に含む）
5 灰黒色シルト（灰色シルト、粉色シルト層状に混入、炭化物少量含む）
6 暗黒褐色シルト（褐色シルト、黒色シルト層状に混入、炭化物少量含む）
7 黒褐色粘質土（灰色シルト、白褐色シルト層状に混入、褐色粒、炭化物少量含む）
8 黒褐色砂質土（炭化物少量含む）

Ph.77　SK030248 土層（南から）

Ph.78　SK030248（南から）

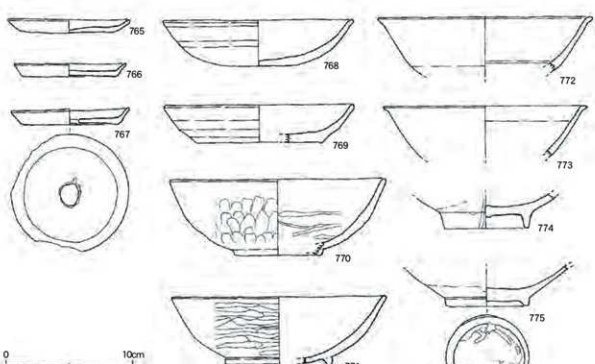


Fig.52　SK030248 実測図（1/30）および出土遺物実測図（1/3）

他に土師器、鉄釘が出土する。土坑の時期は出土遺物から 11 世紀後半と考えられる。

SK030248（Fig.52　Ph.77・78）　調査区東側に位置し、北側は調査区外へ延びる。平面プランは隅丸方形を呈し、一辺約 1.0m、深さは 45cm を測る。断面は逆台形を呈する。覆土は上層が灰褐色シルト、中層が灰黒色シルト、黒褐色粘質土で炭化物、赤褐色粒を含み、下層が茶褐色砂質土である。上層は根等で乱されるが、概ね自然堆積の様相を呈する。

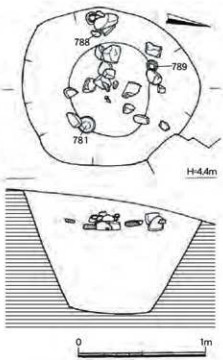
出土遺物（Fig.52）　765~769 は土師器である。765 は回転ヘラ切り底の小皿で、口径は 9.7cm を測り、外底部に板状圧痕を有する。胎土に金雲母、赤褐色粒を含み、色調は明橙色を呈する。766・767 は回転糸切り底の小皿で、復元口径は 8.9cm、9.3cm を測る。767 は外底部に板状圧痕を有し、中央部を焼成後、穿孔している。胎土に金雲母を含み、明橙色を呈する。768 は丸底坏で、復元口径 15.0cm を測り、外底部に板状圧痕を有する。769 は回転糸切り底の坏で、復元口径 15.0cm を測る。胎土に金雲母を含み、明橙色を呈する。770・771 は瓦器椀で、770 の体部上半の内外面は磨きで調整し、体部下半には指オサエが残る。772・773 は白磁碗Ⅴ-4 類、774 は白磁碗Ⅴ類の底部片、775 は白磁碗の底部片で、方形の高台が付き、高台内に胎土目が残る。土坑の時期は出土遺物から 12 世紀前半から中頃と考えられる。

SK030249（Fig.53　Ph.79・80）　調査区中央に位置する。平面プランは楕円形で、長径 1.4m、短径 1.2m を測る。断面は逆台形を呈し、深さは 90cm である。覆土は上層が灰褐色土で、多量の炭化物、焼土が混入する。下層は粘質を帯びた黒褐色土で、炭化物が層状に堆積する。上層からは拳大の花崗岩、砂岩、礫岩が出土する。下層からも図示していないが、土師器がまとまって出土した。

出土遺物（Fig.53）　776~785 は土師器である。776~779 は回転ヘラ切り底の小皿で、復元口径は 9.3~9.6cm を測り、外底部に板状圧痕を有する。胎土に金雲母を含み、色調は橙色を呈する。780~783 は丸底坏で、復元口径は 15.0~16.0cm を測る。すべて外底部に板状圧痕を有し、色調は橙色を呈する。784・785 は椀で、比較的浅い体部をもち、中位で屈曲する。内外面ともに丁寧な磨きを施す。786 は白磁皿Ⅶ-2b 類、787 は白磁碗Ⅳ類である。788・789 は瓦玉で、788 は白磁碗Ⅴ類の底部片、789 は壺の底部を使用し、坏部縁辺全周と、高台の一部を丁寧に打ち欠く。重さは 788 が 114.9g、789 が 200.7g である。790 は須恵質の平瓦である。凸面は格子目叩きとナデ、凹面はナデで調整するが、わずかに布目が残る。土坑の時期は出土遺物から 11 世紀後半と考えられる。

SK030250（Fig.54　Ph.81・82）　調査区東側に位置し、東側は上層の SK030084 に削平される。平面プランは楕円形を呈し、長径 1.1m、短径 0.8m である。断面は「U」字状を呈し、最深で 1.15m を測る。覆土は炭化物を含む灰褐色土を主体とし、中位からは土師器の丸底坏がまとまって廃棄された状況で出土した。完形品やもしくは接合により比較的完形品に近い形まで復元できた個体が多く出土する。下層からも回転ヘラ切り底の土師器や鉄製の刀子が出土した。また、下層からは栽培植物であるモモ炭化核の完形 1 点（参照：付編 3 炭化種実について）が出土する。

出土遺物（Fig.54）　791~799 は土師器である。791 は回転ヘラ切り底の小皿で、口径は 9.3cm を測る。胎土に微量の金雲母を含み、色調は橙色を呈する。792~799 は丸底坏で、復元口径は 14.1~15.5cm を測る。792 は微量の金雲母を含み、色調は淡橙色を呈し、調整は回転ナデで仕上げる。793~799 は同一工人の手によるものと思われ、丸味を帯びた底部から体部を引き延ばし、口縁はやや外反気味におさめる。胎土はすべてごく微量の金雲母を含むが、色調は 793・794 が明橙色、796 が淡橙色、それ以外は橙色である。外面は回転ナデで丁寧に仕上げ、内面は斜方向に粗いナデを行っており、幅約 1.0cm の工具痕が多く残る。800 は鉄製の小刀で、全長 17.0cm 以上を測る。茎は 9.0cm 以上を測る。他に粘土塊（Ⅲ-34 Fig.33-639）が出土する。土坑の時期は出土遺物から 11 世紀後半



Ph.79　SK030249（南西から）

Ph.80　SK030249（南から）

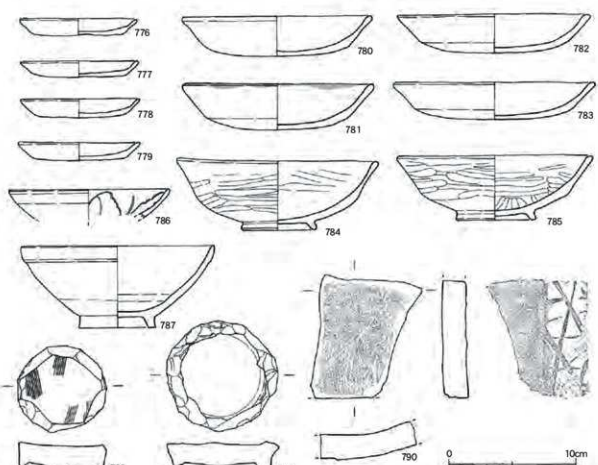
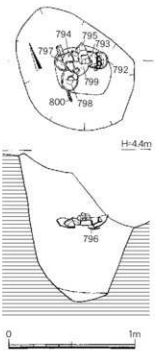


Fig.53　SK030249 実測図（1/30）および出土遺物実測図（1/3）



Ph.81　SK030250 上層（東から）

Ph.82　SK030250 最下層（南から）

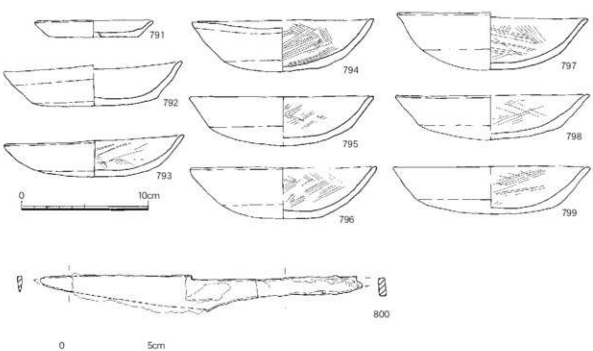
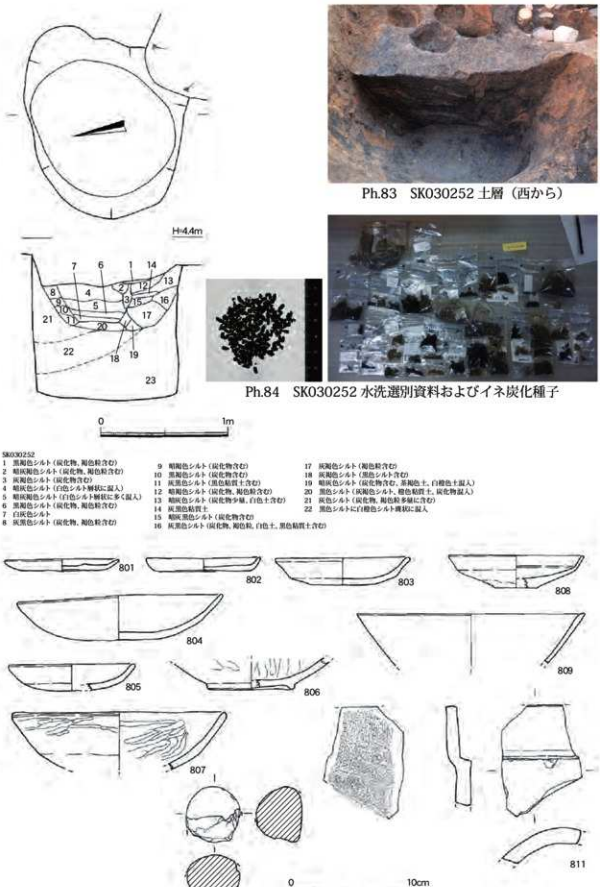


Fig.54　SK030250 実測図（1/30）および出土遺物実測図（1/3・1/2）



Ph.83　SK030252 土層（西から）

Ph.84　SK030252 水洗選別資料およびイネ炭化種子

Fig.55　SK030252 実測図（1/30）および出土遺物実測図（1/3）

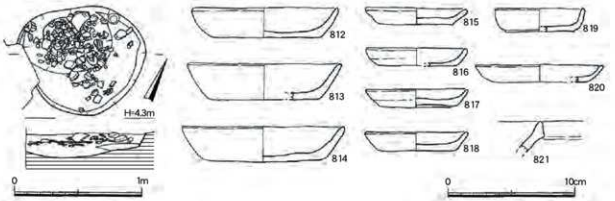


Fig.56　SK030255 実測図（1/30）および出土遺物実測図（1/3）

Ph.85　SK030255（北西から）

Ph.86　SK030255 南側（南から）

Ph.87　SK030255 北側（南から）

Ph.88　SK030255 東側（南から）

と考えられる。

SK030252（Fig.55　Ph.83・84）　調査区東側に位置し、南側を SK030260 に切られる。平面プランは楕円形で、長径 1.6m、短径 1.2m 以上を測る。断面は長方形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がる。深さは 1.15m を測り、床面は平坦である。遺構面から 60cm までは、半裁でき、土層を観察したが、それ以上は崩落の危険をさけるため、全掘を行った。土層は中央部と両端で異なる堆積状況を示しており、境に何らかの仕切りがあったと思われるが、木質等は確認できなかった。中央部は白灰色と灰黒色のシルト層が薄く、互層となる。中位より下位は、詳細な観察はできなかったが、上層ほど細かく層は分かれず、仕切り等の存在も窺えなかった。大きく堆積状況が異なるが、平面プランは同じで、出土遺物もほぼ同時期であったことから、一つの遺構としてとらえた。また、大量の炭化種実が出土したため、土壌を層毎に篩を用いて水洗し、炭化物の抽出を行った。イネが非常に多く、

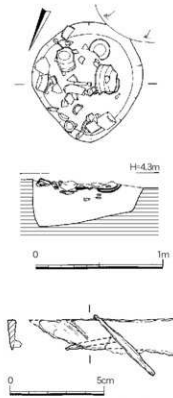


Fig.57　SK030260 実測図（1/30）および出土遺物実測図①（1/2）

Ph.89　SK030260（北から）

Ph.90　SK030260 出土遺物

ほかに、オオムギとアズキ亜属が少量、ヒエ属、コムギ、ダイズ属、ソバ、オニグルミ、カキノキ、ハギ属、マツ属の葉がわずかに出土した。同定については、「付編 3 炭化種実について」を参考にされたい。

出土遺物（Fig.55）　801~804 は土師器である。801・802 は回転糸切り底の小皿で、復元口径は 7.0~8.0cm を測り、801 は外底部に板状圧痕を有する。胎土に金雲母を含み、色調は橙色を呈する。803 は回転ヘラ切り底の小皿で、口径は 10.0cm である。804 は丸底坏で、口径は 16.2cm を測る。外底部に板状圧痕を有し、丁寧なナデで仕上げられ、器壁は滑らかである。805 は瓦器の皿、806・807 は瓦器の椀である。808 は白磁皿Ⅶ-1a 類、809 は施釉陶器の碗で、白色砂粒を多く含んだ灰色の胎土に濃緑色の釉がかかる。810 は砂岩製の石球である。1/3 程度欠損するが、現状で重さは 102.8g である。811 は陶質の丸瓦で、色調は褐色を呈する。玉縁部の凸面はナデを施し、凹面には細かい布目が残る。他に金属坩堝、鍛造剥片（付編 2 参照）、ガラス小玉（Ⅲ-34 Fig.4-54・55）、ガラス坩堝（Ⅲ-34 Fig.4-59）、鉛（Ⅲ-34 Fig.4-58）、魚類の骨（Ⅲ-35 参照）等が出土する。土坑の時期は出土遺物から 12 世紀前半と考えられる。

SK030255（Fig.56　Ph.85~88）　調査区東側に位置し、南側は矢板により削平される。平面プランは楕円形を呈し、長径 1.0m、短径 0.8m である。東側から南側にテラスを有し、北西側が一段低くなり、深さは 25cm を測る。覆土は粘質を帯びた茶褐色土を主体とし、炭化物を多量に含む。上層からは、まとまった状態で土師器の坏・皿や陶磁器、鉄製品がほぼ同じ高さで出土する。中には 812 のように完形のものも含まれる。

出土遺物（Fig.56）　812~819 は土師器である。812~814 は回転糸切り底の坏で、口径は 11.6~12.8cm を測り、814 は外底部に板状圧痕を有する。胎土に金雲母、赤褐色粒を含み、色調は明橙色を呈する。815~819 は回転糸切り底の小皿で、体部の開きで 2 グループに分けられる。815~818

は体部が外に大きく開くタイプである。また、816~818 は胎土に金雲母、赤褐色粒を含み、色調は明橙色を呈し、丁寧な回転ナデで仕上げられ、同遺構から出土した坏と非常に類似している。819 は底径に比して、高さがあり、口縁がほぼ垂直に立つものである。胎土に金雲母を含み、明橙色を呈する。820 は瓦器の皿、821 は東播系須恵器の鉢の口縁部片である。他に白磁、施釉陶器の甕が出土する。土坑の時期は出土遺物や他の遺構との切り合い関係から 12 世紀中頃から後半と考えられる。

SK030260（Fig.57　Ph.89）　調査区東側に位置する。平面プランは円形を呈し、直径 0.9m を測る。深さは西側が 20cm、東側が 35cm と深くなる。覆土は炭化物の塊を多く含み、粘質を帯びた灰黒色土を主体とする。上層には遺物が散乱しており、土師器、陶磁器、鉄器が出土する。

出土遺物（Fig.57・58　Ph.90）　822 は茎部を欠損する鉄製の小刀である。刃部に棒状の木質が数カ所付着する。823~829 は土師器である。823・824 は回転ヘラ切り底の小皿で、復元口径は 9.1cm、10.1cm を測り、外底部に板状圧痕を有する。内底部は粗い指ナデで調整し、色調は明橙色を呈する。825~828 は回転糸切り底の小皿で、口径 8.8~9.2cm を測る。828 以外は外底部に板状圧痕を有する。828 は底の中心に焼成後、両面より直径 0.6cm の孔を穿つ。829 は回転糸切り底の坏で、口径 15.4cm を測り、外底部に板状圧痕を有する。全体に被熱しており、器面が剥離する。830・831 は瓦器の皿で内外面に横方向の粗い磨きを行う。832 は瓦器椀で、逆台形の低い高台を付ける。粗く太めの磨きで調整する。833 は東播系須恵器の片口の鉢である。底部に糸切りが残る。内面下半は捏鉢としてよく利用されており、器面が滑らかとなっている。834~836 は白磁である。834 は壺の口縁部片で、口縁部は下端に折り、頸部には沈線を巡らす。やや灰色がかった白色の胎土に青味を帯びた白色の釉がかかる。835 は碗Ⅱ類、836 は小碗である。837 は施釉陶器の小盤で、黄灰色の胎土に黒色を帯びた黄褐色の釉を内面にかける。838 は無釉陶器の鉢である。839 は陶質の丸瓦で、凸面は篦による強いナデで調整する。凹面は細かい布目、側面には切り離しの痕跡が残る。色調は明褐色から黒褐色を呈する。他に鉄釘が出土し、土坑の時期は出土遺物から 12 世紀中頃と考えられる。

SK030270（Fig.59　Ph.91）　調査区中央に位置し、北側は SK030271 に切られる。平面プランは円形を呈すると思われ、直径約 1.7m を測る。断面は逆台形を呈し、深さは 1.0m である。覆土は灰色シルトを主体とし、わずかに炭化物を含む。

出土遺物（Fig.60　Ph.93）　840~843 は土師器である。840~842 は回転ヘラ切り底の小皿である。840・841 は完形品で、底部はヘラ切り後、丁寧な回転ナデで調整する。口径は 9.8~10.0cm を測る。色調は 840・841 が明褐色、842 は暗橙色を呈する。843 は丸底坏で、外底部に板状圧痕を有し、胎土に金雲母を含み、色調は橙色を呈する。844 は黒色土器 B 類の椀で、体部内外面に磨きを施す。845 は白磁碗Ⅳ類、846 は白磁碗Ⅱ類の口縁部片である。847 は越州窯系青磁碗で、見込みには篦で花文を描く。全面施釉され、見込みと高台内には目跡が残る。848 は中国の緑釉陶器で、白橙色の軟質の胎土に、濃緑色の釉がかかる。外面はジグザグ状の文様が描かれ、内面中位には段を有する。849 は須恵質の平瓦で、凸面は格子目叩きののち、部分的にナデ消し、凹面に細かい布目が残る。850~853 は下層遺物の混入である。850・851 は須恵器で、850 は提瓶の口縁部である。851 は甕の底部片で、内面は強い横方向のナデで仕上げるが、当て具の痕跡がわずかに残る。852・853 は弥生土器の甕で、「L」字状口縁を呈する。他に砥石、鉄釘、鉄塊系遺物（付編 2 参照）、ガラス坩堝が出土する。土坑の時期は出土遺物から 11 紀後半と考えられる。

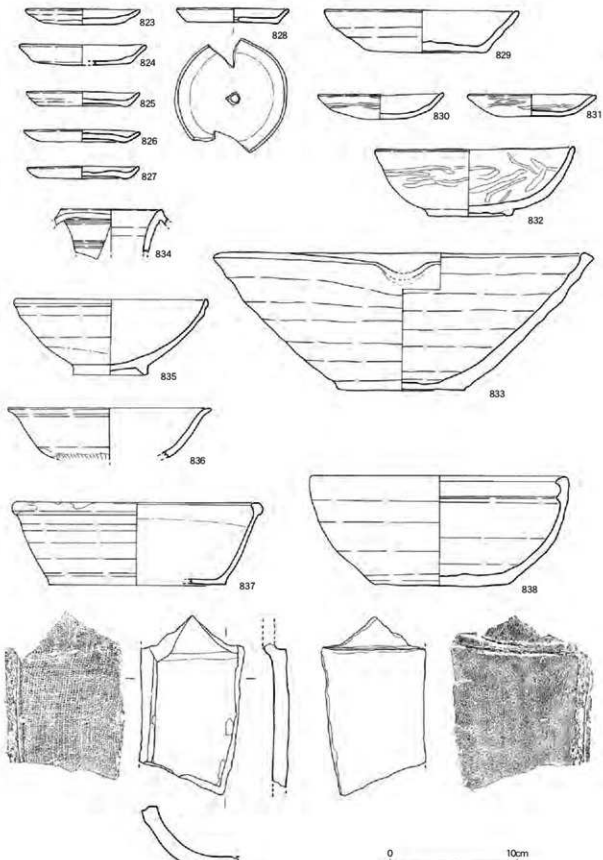


Fig.58　SK030260 出土遺物実測図②（1/3）

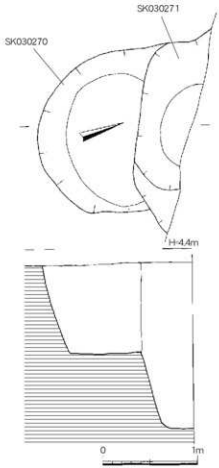


Fig.59　SK030270・030271 実測図（1/40）

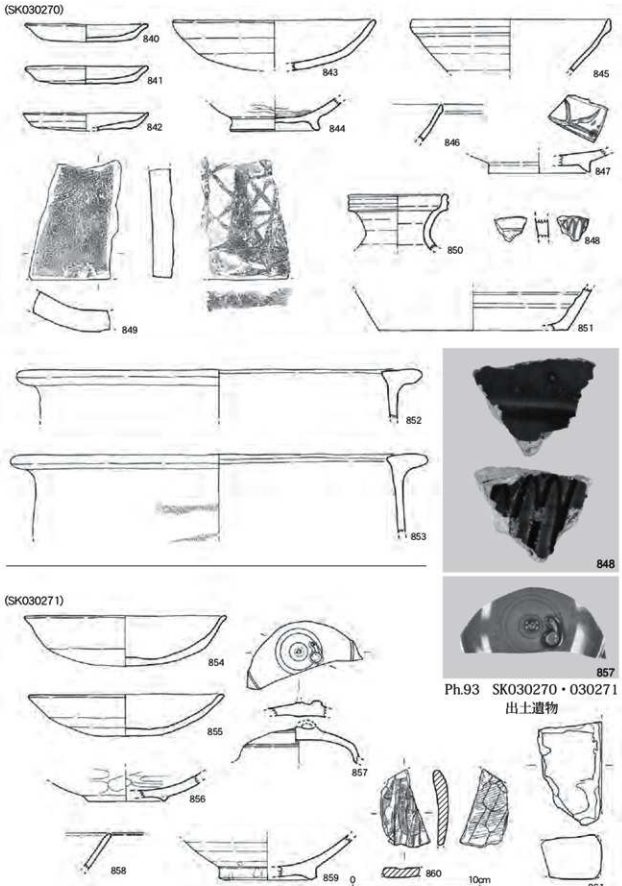
Ph.91　SK030270（南から）

Ph.92　SK030270・030271（西から）

SK030271（Fig.59　Ph.92）　調査区中央に位置し、北側は調査区外へ延びる。平面プランは偏平な楕円形を呈し、長径 2.2m 以上、短径 0.5m 以上、深さは 1.75m を測る。覆土は茶褐色土、黄褐色砂を斑状に含んだ灰黒色土である。炭化物が層状、焼土が粒状に混入する。

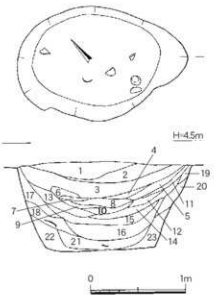
出土遺物（Fig.60　Ph.93）　854・855 は土師器の丸底坏で、外底部には板状圧痕を有する。854 の底部はヘラ切り後、丁寧なナデで仕上げる。色調は 854 が橙色、855 は暗灰色を呈する。856 は瓦器椀で、断面逆台形の低い高台が付く。857 は青白磁の蓋で、天井部には摘みを有する。また、天井と肩部には沈線を巡らす。精良な白色の胎土に青味を帯びた透明釉がかかる。858・859 は白磁で、858 は碗Ⅸ類の口縁部片、859 は碗Ⅳ類の底部片である。860 は滑石製品の欠損品である。下面にはノミ痕が残り、上面は縁を残し、内側を窪ませる。上面は硯状を呈するが、下面は現状では、不安定である。861 は瓦質の埦で、ナデで調整する。他に中国の施釉陶器が出土する。遺構から出土した丸底坏は SK030270 等の混入の可能性があり、土坑の時期は 13 世紀中頃から 14 世紀前半と考えられる。

SK030272（Fig.61　Ph.94~97）　調査区東側に位置する。平面プランは偏平な楕円形を呈し、長径 1.8m、短径 1.2m、深さは 0.95m を測る。断面は逆台形を呈する。覆土からは幾度かの掘り直しの痕跡が窺える。最初の掘り直しは 22・23 層を残して掘削され、2 回目は 16 層より上を掘り直している。最終的には炭化物を多く含む黒色シルトや焼土を含む明褐色シルト、白色粘質土を含む灰褐色シルトが層状に堆積する。被熱した砂岩の偏平な石材や鉄製品、多くの土師器、陶磁器が出土した。



Ph.93　SK030270・030271
出土遺物

Fig.60　SK030270・030271 出土遺物実測図（1/3）



SK030272
1 明灰褐色シルト（炭化物、白土粘土塊含む）
2 明灰褐色シルト（褐色粘、白色シルト混入）
3 暗灰褐色シルト
4 灰褐色シルト（白色シルト、黒色粘質土、褐色粘）
5 黒褐色シルト（炭化物、褐色粘、白色シルト混入）
6 明黒褐色シルト（炭化物、褐色シルト塊少量含む）
7 明灰褐色シルト（炭化物含む）
8 黒褐色シルト（炭化物、褐色粘、白色シルト混入）
9 明黄褐色シルト（炭化物、灰白色シルト少量混入）
10 灰褐色シルト（炭化物少量、褐色粘多量に含む）
11 明黄褐色シルト（炭化物、灰色シルト混入）
12 明灰褐色シルト（炭化物、灰色シルト少量混入）
13 暗灰褐色シルト（炭化物、灰色シルト少量混入）
14 明褐褐色シルト
15 暗灰褐色シルト（炭化物、灰色シルト塊混入）
16 黒褐色シルト（黒色粘質土、灰色シルト・明褐色シルトが縞状に堆積）
17 暗灰褐色シルト（炭化物、白色シルト混入）
18 灰褐色シルト（褐色粘多量に混入）
19 灰褐色シルト（炭化物含む）
20 灰褐色シルト（炭化物、白色シルト縞状に混入）
21 暗灰褐色シルト（褐色粘、黒色シルト、白色シルト多量に混入）
22 暗灰褐色シルト（炭化物、黄褐色シルト縞状に混入）
23 暗灰褐色シルト（黒色、黄褐色、白色シルト縞状に混入）

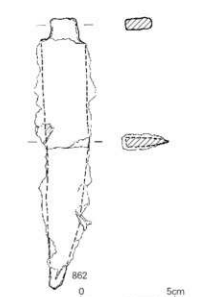
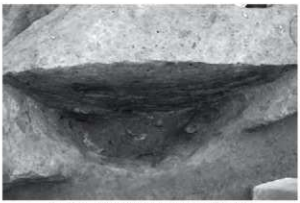
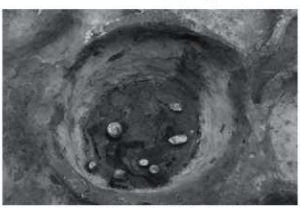


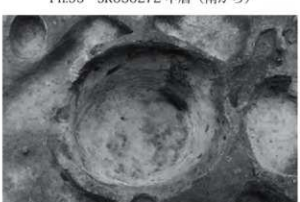
Fig.61　SK030272 実測図（1/40）
および出土遺物実測図①（1/2）



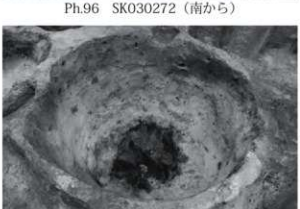
Ph.94　SK030272 土層（南から）



Ph.95　SK030272 中層（南から）



Ph.96　SK030272（南から）



Ph.97　SK030272 炭化物検出状況（北から）

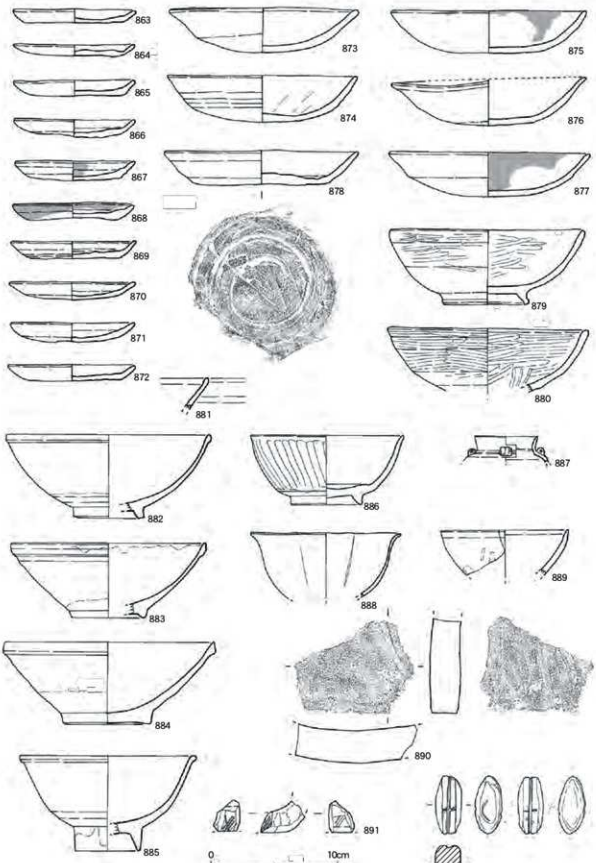
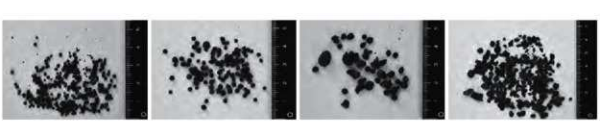


Fig.62　SK030272 出土遺物実測図②（1/3）

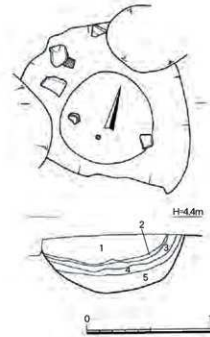
出土遺物（Fig.61・62）　862は鉄製の短刀で、刃部の長さは13.3cmを測り、両関である。断面方形の茎は大半を欠損する。863~878は土師器である。863~872は回転ヘラ切り底の小皿で、復元口径は9.6~10.0cmを測り、外底部に板状圧痕を有する。胎土に少量の金雲母を含み、色調はすべて橙色を呈する。867・868は燈明皿として使用され、内外面に煤が付着する。また、864・866・870・871は底部と体部の境が不明瞭で、底部内面まで丁寧に回転ナデが施されるなど、類似点が多い。873~877は丸底坏で、874と877は外底部に板状圧痕を有する。また、873・874の底部はヘラ切り後、丁寧なナデで調整する。875・877は灯明皿として使用しており、内外面に煤が付着する。878は回転ヘラ切り底の坏で、外底部に板状圧痕を有する。色調は暗橙色を呈する。879・880は黒色土器B類の椀である。880は丁寧な横方向の磨きで調整され、2片が接合したものであるが、1片は黒色、もう1片は橙色から灰黒色と割れた箇所で、全く色調が異なることから、焼成中に破損した可能性が考えられる。881は防長産の緑釉陶器の口縁部片で、口縁は端部で内に折れる。軟質で橙色の胎土に濁緑色の釉がかかる。882~887は白磁である。882は碗Ⅱ類、883・884は碗Ⅳ類、885は碗Ⅴ類である。886は小碗で、黄白色の胎土に化粧土が施され、白濁色の釉がかかる。細かい貫入が入り、外面に縦篦花弁文を描く。887は小壺の口縁部片である。肩部に4か所、把手が付く。888は輪花を有する青白磁の碗で、内面に白堆線を刻む。889は天目茶碗で、口縁の下にわずかに段が付く。黒釉の地に銀色の細い筋が多数現れる禾目天目である。890は瓦質の平瓦で、凸面は強いナデ、凹面には布目が残る。891は滑石製石鍋の底部片を用いた二次加工品である。体部の破面は研磨され、擦痕が残る。重さは24.2gである。892は滑石製の錘で、断面が「工」の字形を呈し、紐用の溝が二面に縦方向に一条巡る。また、それに直交する形で横方向の溝が刻まれる。重さは29.2gを量る。土坑の時期は12世紀前半と考えられる。

SK030273（Fig.63　Ph.99~102）　調査区東側に位置し、上面は他の遺構に切られる。平面プランは楕円形を呈し、長径1.6m、短径1.3mを測る。断面は船底状で、深さは45cmである。覆土は自然堆積の状況を呈しており、灰褐色シルト層に厚さ5cm前後の炭化物層が堆積し、炭化物は遺構全面に広がる。炭化物層に含まれる炭化種実を確認するため、土壌を層毎に篩を用いて水洗し、炭化物の抽出を行った。同定の結果、栽培種実はイネを確認した（付編3参照）。他に鉄滓とともに粒状滓、鍛造剥片（Ph.98）も多量に出土する。小粒（1.5mm以下）の粒状滓が309個、総計1.3g、中粒（1.5~2.5mm）の粒状滓が110個、総計1.5g、大粒（2.5~8.0mm）の粒状滓が40個、総計2.2g、厚さ0.25~1.0mmを測る鍛造剥片が総重量123.6gである（付編2参照）。

出土遺物（Fig.63　Ph.98）　893は白磁の水注部である。灰色の胎土に灰緑色の釉がかかる。894は白磁碗Ⅳ類の底部片、895は砂岩製の敲石で、下端に敲打痕が残る。重さは現状で32.6gである。896は須恵器の大甕の口縁部片で、外面に刻みが入る。他に回転ヘラ切り底と糸切り底の土師器、



Ph.98　SK030273出土粒状滓・鍛造剥片



SK030273
1　茶褐色粘質土(灰褐色粘土粒、炭化物粒少量含む)
2　暗灰褐色シルト(炭化物細粒に富む)
3　灰褐色シルト(黄褐色シルト細粒に富む)
4　黒色シルト(炭化物細、暗灰褐色粘土粒少量含む)
5　暗灰褐色シルト(明灰褐色粘土小礫少量含む)

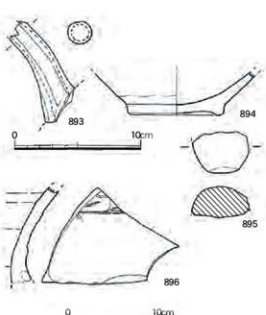
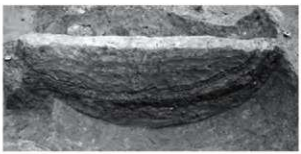


Fig.63　SK030273 実測図（1/30）
および出土遺物実測図（1/3・1/4）

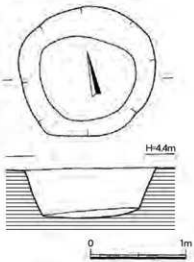


Ph.99　SK030273 土層（東から）

Ph.100　SK030273 炭化物検出状況（東から）

Ph.101　SK030273 炭化物検出状況（南から）

Ph.102　SK030273（東から）



Ph.103　SK030328（東から）

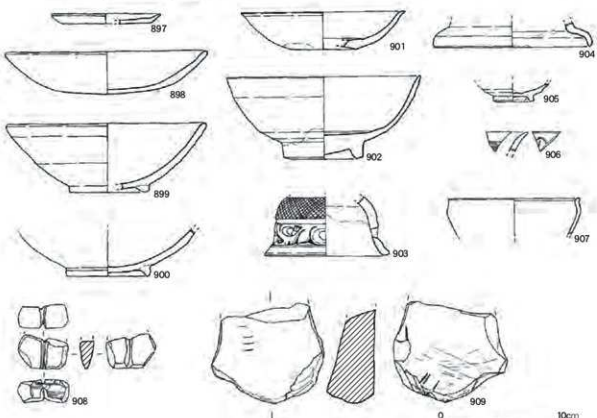
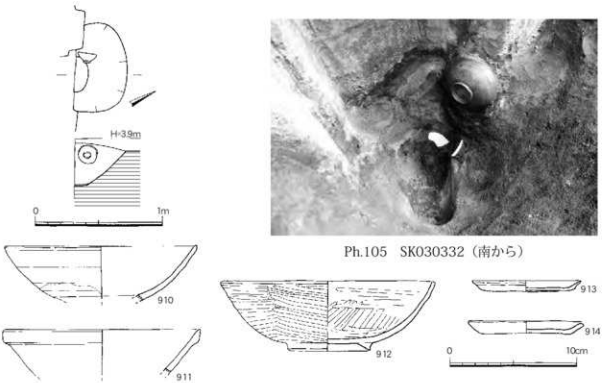


Fig.64　SK030328 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

Ph.104　SK030328 出土遺物



Ph.105　SK030332（南から）

Fig.65　SK030332 実測図（1/30）および出土遺物実測図（1/3）

白磁碗Ⅱ・Ⅳ類、施釉陶器の壺小片、盤、ガラス坩堝、ガラス滓、鉄滓が出土する。土坑の時期は出土遺物から 12 世紀前半と考えられる。

SK030328（Fig.64　Ph.103）　調査区中央に位置する。平面プランは円形を呈し、直径 1.45m を測る。断面は逆台形をなし、深さは 55cm である。覆土は灰褐色土を主体とし、炭化物や焼土がわずかに混入する。なお、この土坑からは白磁の香炉・小碗や青白磁の小鉢等、優品が出土する。

出土遺物（Fig.64　Ph.104）　897~900 は土師器である。897 は回転ヘラ切り底の小皿で、復元口径は 8.6cm を測り、色調は明橙色から橙色を呈する。898 は丸底坏で、復元口径 16.0cm を測る。外底部はわずかに指オサエが残るが丁寧なナデで仕上げる。899・900 は椀で、内面は密なナデ、外面は部分的に横方向のナデを施す。901~903 は白磁である。901 は皿Ⅴ-2a 類、902 は碗Ⅱ-4a 類、903 は香炉の蓋で、上半は格子目状の刻み、下半は唐草の透かし文が彫られる。904 は青白磁の蓋で、白色の胎土に青味を帯びた釉がかかる。905 は白磁の小碗で、黒色粒を含む白色の胎土に白濁色の釉が体部下半までかかる。906 は白磁小碗の口縁部片で、外面に蓮弁、内面は櫛目による文様が描かれる。907 は青白磁の小鉢の口縁部片で、灰白色の胎土に青緑を帯びた透明釉がかかる。908 は滑石製の錘で、上半を欠損する。断面が「工」の字形を呈し、紐用の溝が 2 面に縦方向に 1 条巡る。重さは 29.9g を量る。909 は粘板岩製の砥石で、現状で 327g である。4 面が使用され、いずれも凹状を呈し、細かい擦痕がみられる。他に黒色土器 B 類、軽石、鉄釘、金属坩堝が出土する。土坑の時期は出土遺物から 12 世紀前半と考えられる。

SK030332（Fig.65　Ph.105）　調査区東側に位置し、北側は調査区外へ延びる。平面プランは円形を呈し、一辺 0.7m を測る。断面は逆台形をなし、深さは 35cm、上層で完形の瓦器椀が出土する。覆土は焼土、炭化物を含んだ灰黒色土を主体とする。

出土遺物（Fig.65）　910 は白磁碗Ⅱ-4a 類、911 は白磁碗Ⅳ類の口縁部片である。912 は瓦器椀で、逆三角形の高台が付く。内外面ともに丁寧な磨きが施される。913・914 は回転糸切り底の小

Ph.106　SK030334（西から）

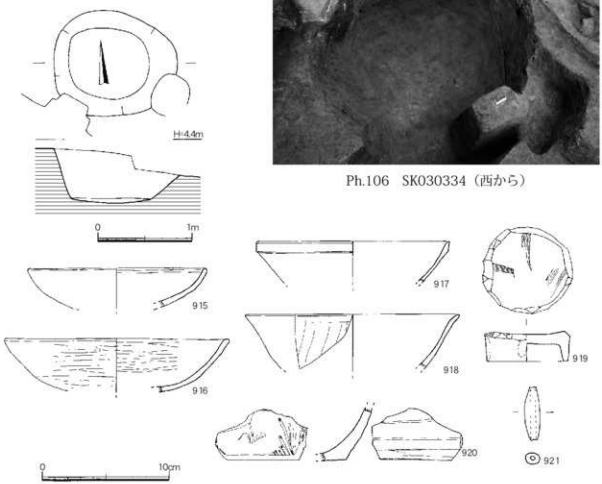


Fig.66　SK030334 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

皿で、口径 8.5cm、9.0cm を測り、914 は外底部に板状圧痕を有する。913 は胎土に金雲母を含み、色調は明橙色を呈する。914 は金雲母、赤褐色粒を少量含み、明橙色を呈する。他に少量のヘラ切り底の土師器が出土し、土坑の時期は 12 世紀中頃と考えられる。

SK030334（Fig.66　Ph.106）　調査区東側に位置し、北側の一部を矢板に切られる。平面プランは偏平な楕円形で、長径 1.3m、短径 1.1m、深さは 55cm を測る。断面は逆台形を呈する。覆土は灰黒色土を主体とし、褐色土が斑状に入る。また、炭化物や焼土も多量に含まれる。

出土遺物（Fig.66）　915 は土師器の丸底坏で、復元口径は 14.2cm を測る。胎土に金雲母を含み、色調は淡橙色を呈する。内面は丁寧なナデを施す。916 は瓦器椀で、体部上半は研磨で調整される。917~919 は白磁である。917 は碗Ⅳ類、918 は碗Ⅴ -2b 類、919 はⅤ類の底部片を用いた瓦玉で、重さは 103.8g を量る。920 は施釉陶器の盤で、黄灰色の粗い胎土に、緑濁色の釉が内面にかかり、草文の鉄絵が描かれる。外面は露胎で褐色に発色する。921 は完形の管状土錘で、重さは 5.1g である。他に鉄滓が出土する。土坑の時期は出土遺物から 11 世紀後半と考えられる。

SK030670（Fig.67　Ph.107・108）　調査区西側に位置し、北側は調査区外へ延びる。平面プランは偏平な楕円形を呈し、長径 3.5m、短径 2.4m、深さ 45cm を測る。ほぼ平坦な床面から壁は緩やかに立ち上がる。覆土は灰褐色土と暗灰褐色土を主体とし、炭化物、橙褐色・白灰褐色粒を含む。

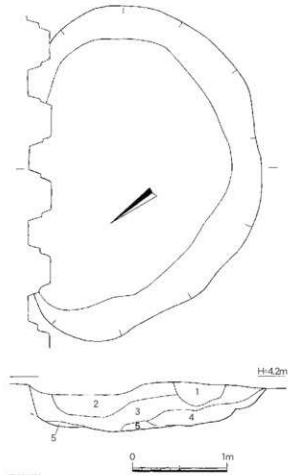


Fig.67　SK030670 実測図（1/40）

Ph.107　SK030670 土層（西から）

Ph.108　SK030670（東から）

出土遺物（Fig.68）　922~925 は土師器である。922 は回転ヘラ切り底の小皿で、復元口径は 9.4cm を測り、外底部に板状圧痕を有する。胎土に金雲母を含み、色調は淡橙色を呈する。923・924 は回転糸切り底の小皿で、復元口径は 9.0cm、10.0cm を測る。925 は回転糸切り底の坏で、復元口径は 14.0cm である。923~925 は胎土に金雲母を含み、色調は明橙色を呈する。926~928 は白磁である。926 は壺の蓋で、淡灰色の胎土に灰緑色の釉がかかる。底部には切り離しの際の回転糸切りが残る。927 は皿Ⅵ-2 類、928 は碗Ⅷ類で、内面見込みの釉を環状に掻き取り、それにそって目跡が残る。929 は青白磁の小碗で、口縁は内湾気味に立ち上がり、端部は外反する。体部外面に縦篦花弁文を描く。930・931 は龍泉窯系青磁で、930 は碗Ⅰ-6a 類、931 は皿Ⅰ-1c 類である。932 は越州窯系青磁碗で、輪状高台を有し、高台内には胎土目が残る。見込みには篦による花文が描かれる。933 は無釉陶器の鉢の口縁部片で、口縁上端には工具による条痕が刻まれる。白色砂粒を多く含む褐色の胎土である。934 は口縁内部に二条の突起を有する無釉陶器の鉢である。935 は施釉陶器の水注の口縁部片で、白色、橙色の砂粒を多く含む粗い胎土に緑褐色の釉がかかる。936~938 は須恵質の瓦である。936 の平瓦は凸面に格子目叩きを行った後、部分的にナデ消し、凹面には布目が残る。937 は玉縁を有する丸瓦で、玉縁凸面には細かい横方向のナデの条痕が残る。玉縁端部は切り離し、未調整である。938 の丸瓦は玉縁部を欠損する。凸面に縄目、凹面に布目を有する。939 は下層の遺物の混入で、須恵器の平瓶の口縁部片である。940 は粘板岩製の手持ち砥石の破片である。砥面はわずかに凹状に窪み、細かい擦痕が残る。941 は粘板岩製の不定形な砥石の破片で、重さは 105.1g を量る。砥面は 2 面残り、不規則な細かい擦痕を多く有する。土坑の時期は出土遺物より 12 世紀中頃と考えられる。

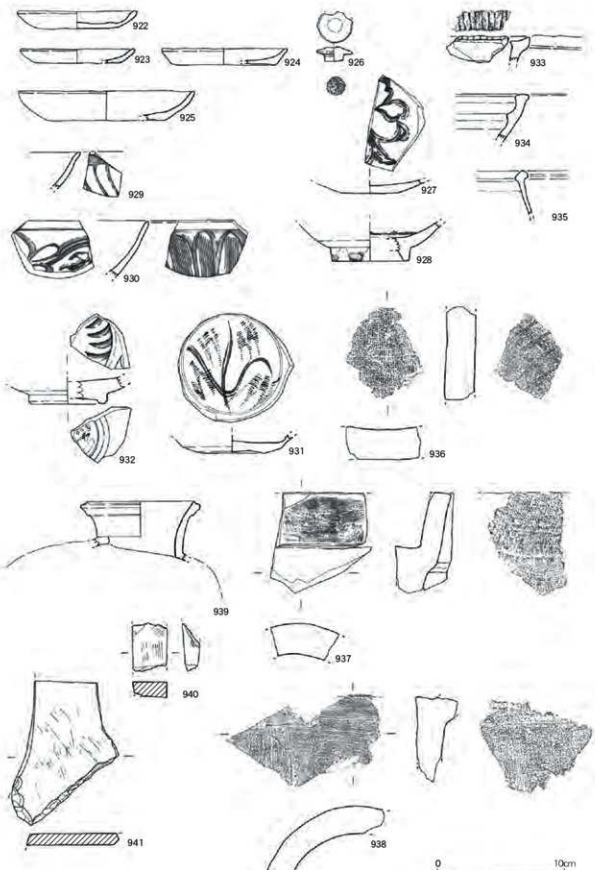


Fig.68　SK030670 出土遺物実測図（1/3）

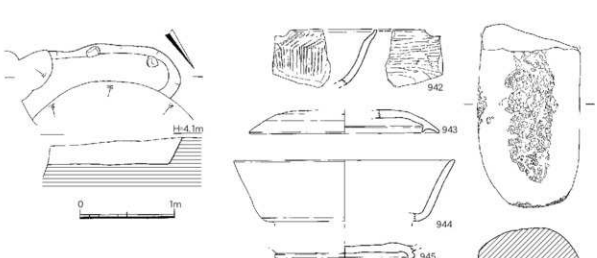


Fig.69　SK030672 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

Ph.109　SK030672 出土遺物

SK030672（Fig.69）　調査区西側に位置し、北側を SE030669、東側を SK030670 に切られる。平面プランは楕円形を呈し、長径 1.7m 以上、短径約 0.6m、深さ 25cm を測る。覆土は茶褐色シルトを主体とする。

出土遺物（Fig.69　Ph.109）　942 は都城系の土師器の坏で、口縁部は端部でわずかに折り返し、内側に段を有する。精良な胎土で、色調は明橙色を呈する。体部外面は横方向の細かい磨き、底部外面はヘラ削りを行う。内面は回転ナデで調整した後、口縁部は斜方向、体部には縦方向の暗文を入れ、放射状に文様を描く。943–946 は須恵器である。943 は返りをもつ坏蓋で、天井部はヘラ削り、口縁部は回転ナデで仕上げる。944・945 は高台付坏で、944 の体部は角張り、口縁に向けて直線的にのび、端部で外反する。945 は高台部片で、高台端部は内に突出し、踏ん張る。高台内は箆切り後、ナデで調整する。946 は皿で、復元口径 16.0cm を測る。947 は敲石で、現状で重さは 1040g を量る。下端、上面と下面、1 側面の計 4 面に細かい敲打痕が残る。玄武岩製である。土坑の時期は出土遺物より 7 世紀末から 8 世紀初頭と考えられる。

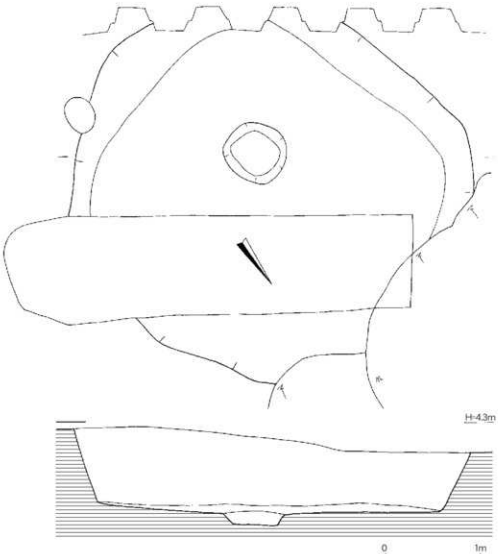


Fig.70　SK030673 実測図（1/40）

Ph.110　SK030673（東から）

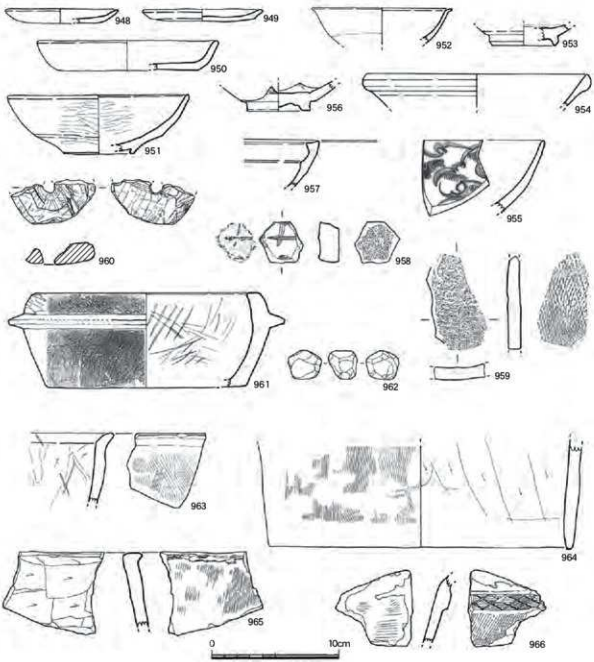
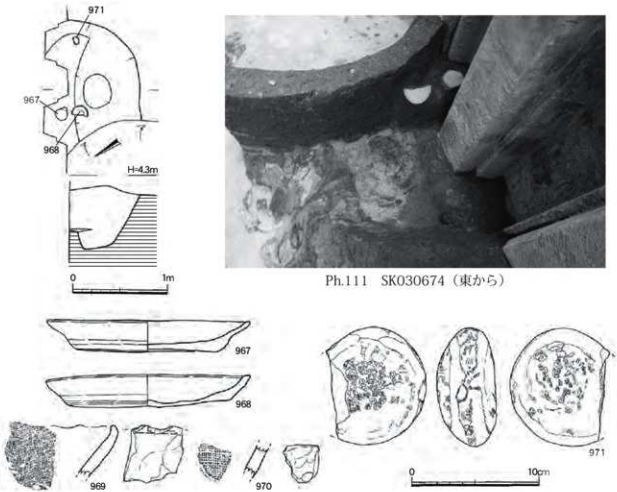


Fig.71　SK030673 出土遺物実測図（1/3）

SK030673（Fig.70　Ph.110）　調査区西側中央に位置し、中央は試掘トレンチ、北側は SK030670 に切られる。平面プランは隅丸方形を呈し、一辺約 3.7m を測る。断面は逆台形で、深さは 80cm である。床面中央部に直径 60cm、深さ 10cm のピットを有する。覆土は茶褐色シルトに黒色シルトがラミナ状に堆積している。

出土遺物（Fig.71）　948~950 は土師器である。948・949 は回転ヘラ切り底の小皿で、復元口径は 9.0cm、9.5cm を測る。949 は外底部に板状圧痕を有する。色調は 948 が淡橙色、949 は白橙



Ph.111　SK030674（東から）

Fig.72　SK030674 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

色を呈する。950 は回転糸切り底の坏で、復元口径は 14.3cm を測る。外底部にすだれ状の板状圧痕を有し、胎土に金雲母を含み、色調は明橙色である。951 は瓦器椀で、高台は内に倒れ、端部は丸味を帯びる。体部内外面は幅広の柔らかい磨きが施され、胎土は精良で、色調は灰色、口縁付近は灰黒色を呈する。952~954 は白磁である。952 は皿Ⅳ類、953 は碗Ⅷ類で、内面見込みの釉を環状に掻き取り、それに沿って目跡が残る。954 は碗Ⅳ類の口縁部片である。955 龍泉窯系青磁碗Ⅰ-3a 類、956 は同安窯系青磁碗の底部片で内外面に櫛目による施文が残る。957 は無釉陶器の鉢である。958 は土師質の平瓦を用いた瓦玉で、平瓦片の周縁部を打ち欠いて整形したものである。凸面には格子目、凹面には布目が残り、重さは 15.9g を量る。959 は須恵質の平瓦片で、凸面には縄目、凹面には布目が残るが、一部ナデ消される。960 は滑石製の紡錘車か。中央に直径約 3.0~1.0cm の片面穿孔を有する。穿孔部も丁寧に磨かれ、幅 5.0mm の削り痕が残る。現状で重さは 42.7g である。961 は小型の鍔付型の滑石製石鍋である。復元口径 17.6cm、高さ 7.5cm を測る。外面は細かい削りで丁寧に調整するが、内面は粗く、削り痕が多く残る。外面底部付近に煤が付着する。962 は砂岩製の石球で、重さは 15.7g である。963~966 は下層遺物の混入である。963 は土師器の甕で、外面は縦方向の刷毛目、内面は削りで調整する。964 は土師器の甑で、外面は刷毛目、内面は削りを施し、端部はナデで仕上げる。胎土に白色砂粒、褐色粒を含み、橙色を呈する。965 は土師器の移動式竈の受部片である。966 は弥生土器の甕である。幅広の突帯に格子目状の刻みを施す。外面は縦方向、内面は

Ph.112　SK030675（南から）

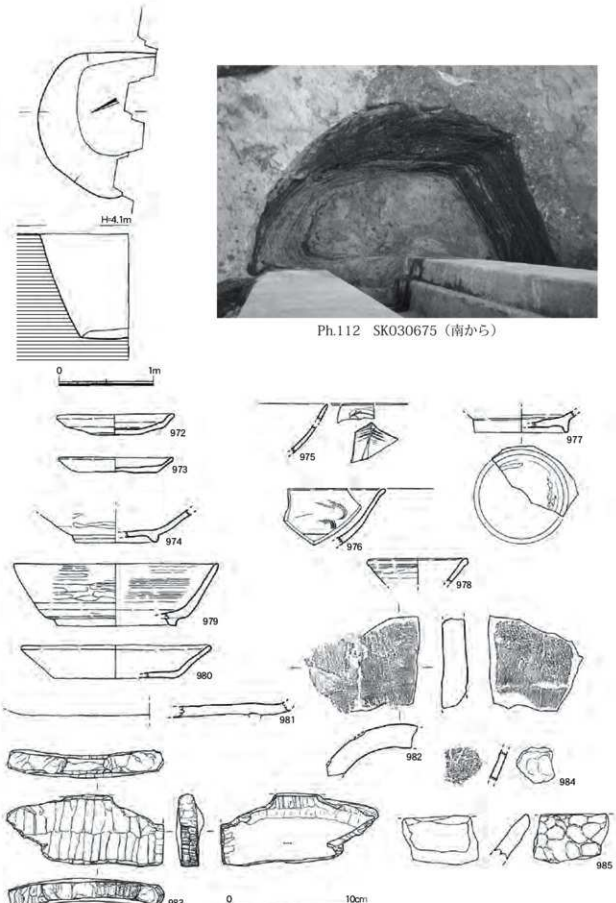


Fig.73　SK030675 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

横方向の刷毛目で調整する。胎土に白色砂粒、赤褐色粒を含む。他に炉壁等が出土し、土坑の時期は12世紀中頃と考えられる。

SK030674（Fig.72　Ph.111）　調査区西側に位置し、北側は調査区外へ延び、西側はSK030670に切られる。平面プランは楕円形を呈すると思われ、長径1.4m以上、短径1.0m以上を測る。北側にテラスを有し、深さは70cmである。覆土は炭化物を多く含む茶褐色シルトである。

出土遺物（Fig.72）　967・968は回転糸切り底の坏で、口径は16.0cmを測る。外底部に板状圧痕を有する。967は多量の金雲母を含み、色調はともに明橙色である。969・970は製塩土器である。969の口縁端部は内側に摘み上げ仕上げる。外面はナデ、内面には細かい布目が残る。胎土に白色砂粒、金雲母を含み、橙色を呈する。970は体部片で、外面は指オサエ後、ナデで調整し、内面には細かい布目が残る。金雲母を多く含み、色調は褐色である。971は花崗岩製の敲石で、上下面、側面に叩き痕が残る。一部欠損するが、現状で510gを量る。他に越州窯系青磁、龍泉窯系青磁、白磁が出土する。土坑の時期は出土遺物から12世紀中頃と考えられる。

SK030675（Fig.73　Ph.112）　調査区西側に位置し、南側は調査区外へ延びる。平面プランは隅丸方形を呈すると思われ、南北方向は1.1m以上、東西方向は1.5mを測る。断面は逆台形を呈し、深さは1.1mである。覆土は茶褐色シルトを主体とし、炭化物や焼土塊を含む。

出土遺物（Fig.73）　972は回転ヘラ切り底、973は回転糸切り底の土師器の小皿で、口径は9.3cm、9.0cmを測る。外底部に板状圧痕を有する。色調は972が橙色、973が明橙色である。974は瓦器椀で、内面はナデで調整した後、部分的に磨きを施す。975は白磁碗Ⅺ-4類、976は白磁碗Ⅴ-4b類である。977は越州窯系青磁碗の高台片で、灰色の胎土に灰緑濁色の釉が全面にかかる。高台内には細長い胎土目が残る。978は施釉陶器の小碗で、褐色の胎土に黄灰色の釉が内面から口縁部外面までかかる。979~981は下層遺物の混入の土師器である。979は高台付坏で、内外面共に細かい横方向の磨きを施す。金雲母を含み、明橙色を呈する。980は皿で、平底の底部から体部が外へ大きく開く。胎土は橙色を呈し、精良である。981は高台付の大皿の底部片である。底部外面はナデで調整するが、内面は磨滅が著しく、調整不明である。982は陶質の丸瓦で、凸面には縄目、凹面には布目が残る。983は滑石製石鍋の破片で、外面にはノミの痕跡が残る。破面は部分的に研磨し、二次加工の痕跡がうかがえる。984・985は製塩土器である。984は体部片で、外面ナデで調整し、内面には布目が残る。胎土に細かい白色砂粒を含み、明橙色を呈する。985は口縁部片で、外面には指オサエが残る。内面はナデで調整する。胎土に多量の金雲母を含み、色調は灰色である。他に金属坩堝、炉壁、鉄釘が出土し、土坑の時期は12世紀前半と考えられる。

SK030712（Fig.74）　調査区中央に位置し、遺構の大半は北側の調査区外へ延び、深さは55cmを測る。覆土は茶褐色シルトを主体とする。

出土遺物（Fig.74）　986は回転糸切り底の土師器の小皿で、口径は9.0cmを測る。外底部に板状圧痕を有する。灯明皿として使用され、体部内面と口縁部内外面には炭化物の塊と煤が大量に付着し、本来の色調等はうかがえない。底部は黒色を呈する。987は青白磁の合子の蓋である。型作りで、体部を菊花状とし、蓋の天井部には花文を施す。他に龍泉窯系青磁、白磁、滑石片が出土する。土坑の時期は出土遺物から12世紀中頃と考えられる。

(3) 柱穴（SP）

SP030286（Fig.75　Ph.114）　調査区東側中央に位置する。平面プランは隅丸方形を呈し、東西方向の一辺が50cm、南北方向が40cmを測る。底面付近から小型丸底壺が出土した。覆土は灰色シルトを主体とする。

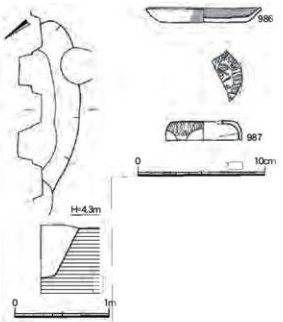
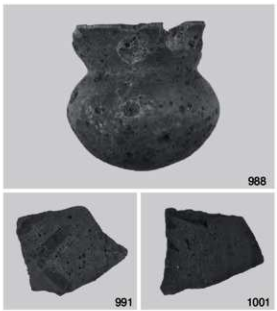


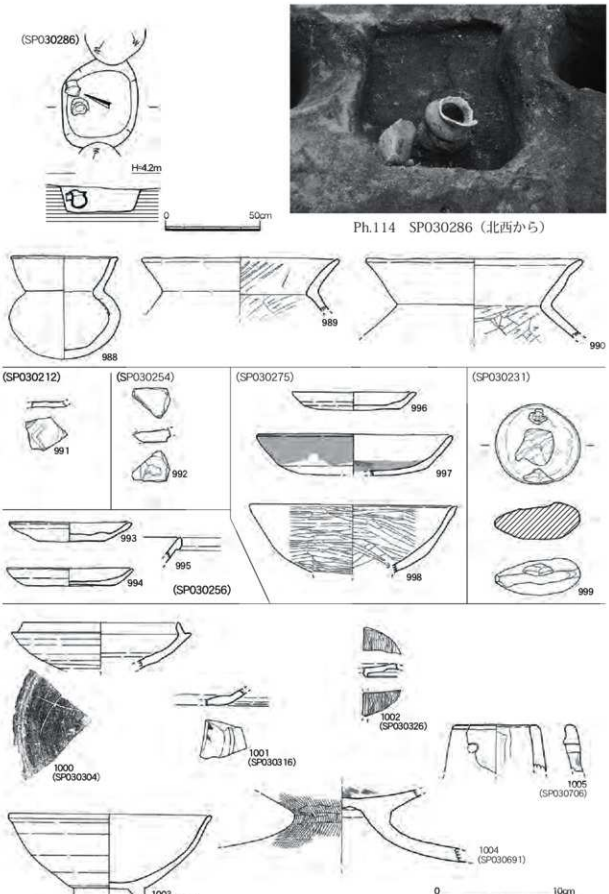
Fig.74　SK030712 実測図（1/40）
および出土遺物実測図（1/3）



Ph.113　第 3 面 SP 出土遺物

出土遺物（Fig.75　Ph.113）　988 は土師器の小型丸底壺である。器面に剥離が多く認められるが、全体は磨滅しておらず、部分的に故意に行ったものと考えられる。外面と口縁部内面はナデが施され、体部内面は指オサエの痕跡が残る。胎土に金雲母と白色砂粒を含み、色調は明橙色を呈する。989・990 は土師器の甕の口縁部片である。体部外面はナデ、内面は削りで調整する。989 は口縁端部外面に、990 は口縁内部頸部付近に煤や焦げが付着する。胎土に金雲母を多量に含み、明橙色を呈する。出土遺物よりピットの時期は古墳時代前期と考えられる。

SP 出土遺物（Fig.75　Ph.113）　991 は SP030212 出土の墨書を有する土師器の底部片である。胎土に金雲母を含み、色調は明橙色を呈する。992 は SP030254 出土の防長産の緑釉陶器の底部片で、低い蛇ノ目高台を有する。軟質で橙色の胎土にやや緑色がかる橙色の釉がかかる。993~995 は SP030256 出土で、993 は回転ヘラ切り底、994 は回転糸切り底の小皿で、復元口径は 9.8cm、10.0cm を測る。胎土に金雲母を含み、色調は 993 が白橙色、994 が明橙色を呈する。995 は白磁碗Ⅳ類の口縁部片である。996~998 は SP030275 出土で、996 は回転ヘラ切り底の土師器の小皿で、外底部に板状圧痕を有し、口径は 9.8cm を測る。997 は丸底坏で、外底部に板状圧痕を有し、復元口径は 15.4cm を測る。灯明皿として使用され、体部外面と底部内面に焦げが付着する。998 は瓦器椀で、銀化する。細かい磨きで調整される。999 は SP030231 出土の砂岩製の敲石で、上面と側面を使用している。重さは 168.9g を量る。1000 は SP030304 出土の須恵器の坏身である。外底面は回転ヘラ削りを行い、ヘラ記号が残る。1001 は SP030316 出土の墨書を有する土師器の底部片である。底部の切り離しは回転ヘラ削り、未調整である。胎土に金雲母を多量に含み、色調は明橙色を呈する。1002 は SP030326 出土の楠葉型黒色土器 B 類の皿である。低い方形の高台を付し、底部内面は密な磨きが施される。1003 は SP030683 出土の白磁碗Ⅱ -1 類で、高台に緑灰色のガラスが付着する。1004 は SP030691 出土の弥生土器の脚付鉢である。外面は刷毛目で調整される。坏部内面はナデで調整されるが、刷毛の痕跡が残る。1005 は SP030706 出土の蛸壺である。内外面ともにナデで丁寧に調整され、口縁下に穿孔を有する。



Ph.114　SP030286（北西から）

Fig.75　SP030286 実測図（1/20）および第 3 面 SP 出土遺物実測図（1/3）

5）第４面の調査（Fig.76　Ph.115・116）

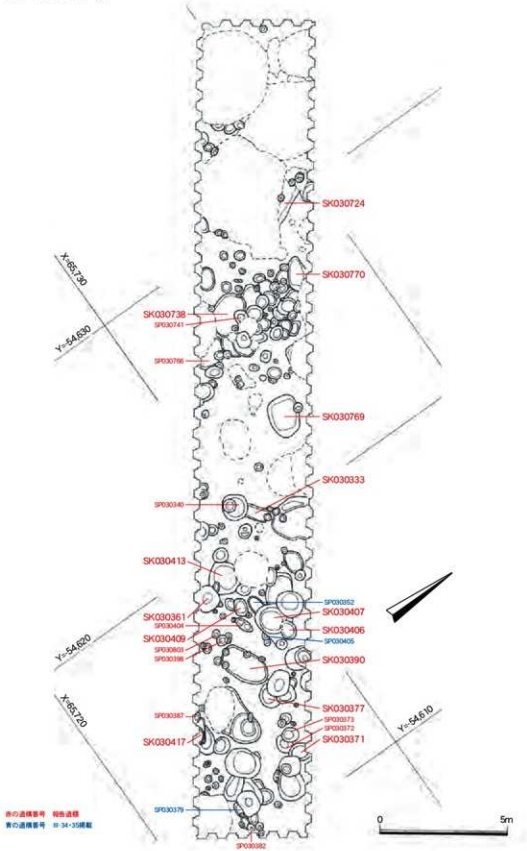
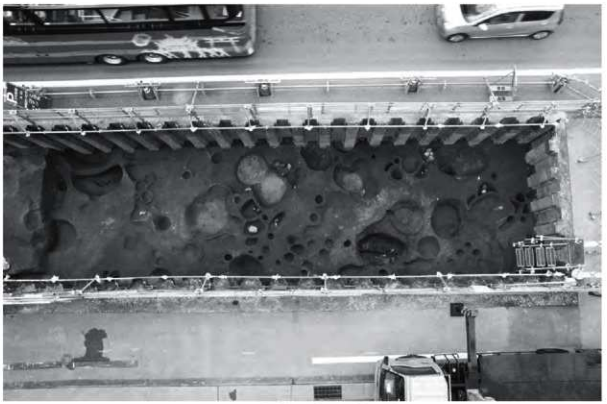


Fig.76　第４面全体図（1/150）



Ph.115　東側 4 面全景（南から）

Ph.116　西側 4 面全景（南から）

第4面は黄褐色砂質土が層状に混入する灰褐色シルトの上面で検出し、標高は東側から中央部までが4.0m、西側は3.9mを測り、わずかであるが、西側へと傾斜する。検出した主な遺構は土坑14基、柱穴である。時代としては、弥生時代中期の土坑を調査区中央で検出した。なお、古墳時代前期、古代の遺構は増加する。また、上面で検出できなかった11世紀から12世紀にかけての土坑、ピットも確認した。

(1) 土坑 (SK)

SK030333 (Fig.77　Ph.117)　調査区中央に位置し、南西側は別遺構に切られる。平面プランは長方形で、長辺0.9m以上、短辺0.6mを測る。断面は逆台形を呈し、深さは10cmである。覆土は灰色砂質土を主体とし、床面には弥生土器の甕が出土する。

出土遺物 (Fig.77)　1006は弥生土器の甕の底部片で、外面は刷毛目、内面はナデで調整する。胎土は白色粒、金雲母を多く含み、色調は黄褐色を呈する。土坑の時期は弥生時代中期と考えられる。

SK030361 (Fig.77　Ph.118)　調査区東側に位置し、南側は調査区外へ延びる。平面プランは隅丸方形を呈すると考えられ、一辺約1.0mを測る。断面は船底状をなし、深さは50cmである。覆土は茶灰色砂質土を主体とし、わずかに炭化物を含む。

出土遺物 (Fig.77)　1007は越州窯系青磁碗Ⅱ類で、底部は上げ底風の円盤状高台である。胎土は粗く、胎土中に黒色粒を含む。底部内外面に重ね焼きの目跡を有する。1008~1010は下層の遺物の混入である。1008は赤焼土器の甕で、回転ナデで調整され、口縁端部に沈線を巡らす。1009・1010は返りを有する須恵器の坏身で、底部はヘラ削りが残り、1010はヘラ記号を有する。1009は胎土に白色粒を含み、灰色を呈する。1010は1009に較べ器壁は薄く、堅緻に焼成される。胎土に白色粒を含むが、色調は暗紫灰色である。他に獣骨、金属坩堝、鉄釘が出土する。土坑の時期は8世紀末から10世紀中頃と考えられる。

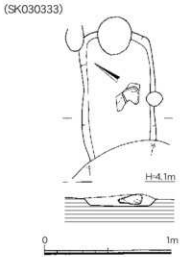
SK030371 (Fig.78　Ph.119)　調査区東側に位置し、北側は調査区外へ延びる。平面プランは直径約0.8mの円形を呈する。断面は逆台形をなし、深さは18cmである。覆土は灰黒色シルトに褐色土や橙色土が斑状に混入する。砂岩、片岩の偏平な石材が上層より出土する。

出土遺物 (Fig.78)　1011は土師器の丸底坏で、復元口径は15.2cmを測る。丁寧に調整され、内面は滑らかで、わずかに工具痕が残る。外面もナデで仕上げられる。金雲母をわずかに含む精良な胎土で、色調は明橙色である。外面は廃棄後と思われる煤が付着する。1012は瓦器椀の底部片で、内面は灰白色、高台部は黒色を呈する。1013は白磁の小碗の口縁部片で、口縁は緩やかに外反する。他に白磁碗Ⅴ類、中国の施釉陶器が出土し、土坑の時期は11世紀後半と考えられる。

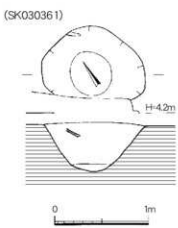
SK030377 (Fig.78　Ph.120)　調査区東側に位置し、北側は他の遺構に切られる。平面プランは楕円形を呈すると思われ、長径0.9m以上、短径0.9mを測る。底面はほぼ水平で、西側の壁は急であるが、東側は緩やかに立ち上がる。深さは25cmを測り、上層より甕の体部片が出土した。覆土は茶灰色シルトで、炭化物が少量混入する。

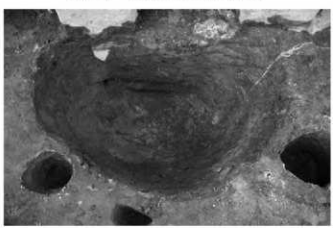
出土遺物 (Fig.78)　1014は土師器の小型丸底壺の小片である。口縁部は内外面ともに縦方向の刷毛目の後、横方向の磨きを施す。体部内面は横方向の磨き、外面は削りの後、部分的に磨く。橙色の精良な胎土で、色調は明橙色を呈する。1015は土師器の甕で、球状の体部をもつ。外面は斜方向の刷毛目、内面は削りで調整される。胎土に赤褐色粒と金雲母を含み、橙色を呈する。他に金属坩堝が出土するが、混入と思われる。土坑の時期は古墳時代前期後葉と考えられる。

SK030390 (Fig.79　Ph.121)　調査区東側中央に位置する。平面プランは長方形で、長辺2.0m、



Ph.117　SK030333（北西から）





Ph.118　SK030361（北から）

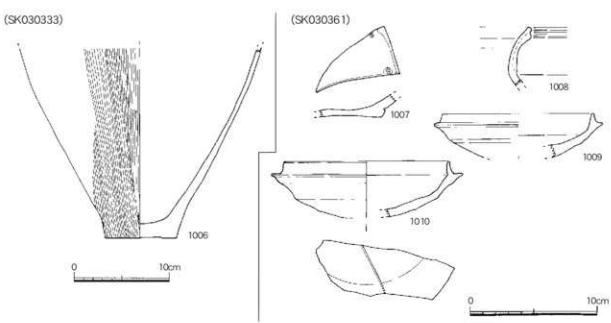
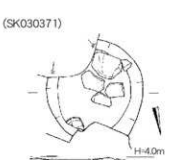


Fig.77　SK030333・030361 実測図（1/30・1/40）および出土遺物実測図（1/4・1/3）



Ph.119　SK030371（南から）

Ph.120　SK030377（北西から）

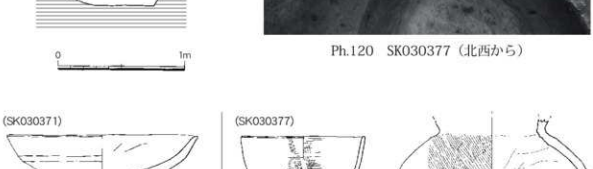
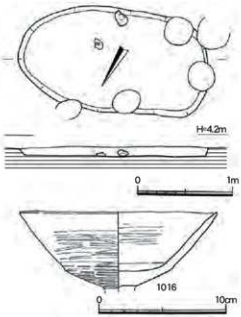


Fig.78　SK030371・030377 実測図（1/30）および出土遺物実測図（1/3）

短辺 1.1m を測る。底面はほぼ水平で、深さは 10cm である。覆土は灰褐色シルトを主体とし、床面より高坏の坏部が出土した。

出土遺物(Fig.79)　1016は土師器の高坏の坏部片である。精製品で、金雲母を含む精良な胎土で、色調は明橙色を呈する。坏部外面は横方向の細かい磨き、内面はナデで調整したのち、部分的に磨く。他に土師器の小片、弥生土器が出土するが、土坑の時期は古墳時代前期後葉と考えられる。



Ph.121　SK030390（東から）

Fig.79　SK030390 実測図（1/40）
および出土遺物実測図（1/3）

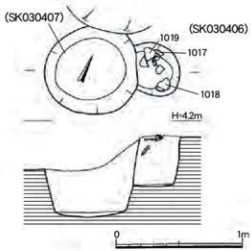
SK030406（Fig.80　Ph.123）　調査区中央に位置し、西側は SK030407 に切られる。平面プランは円形を呈し、直径 0.4m を測る。底面はほぼ水平で、壁は直に立ち上がり、深さは 40cm である。覆土は灰黒色シルトを主体とし、上層に土器が散乱していた。

出土遺物（Fig.80　Ph.122）　1017 は須恵器の高台付坏である。体部は角張り、高台は底部と体部の境よりやや内に付く。回転ナデで調整され、胎土に金雲母を多く含み、色調は灰黒色を呈する。1018 は都城系の土師器の坏である。1/2 の残存で、口縁部外面は薄く剥がれ、欠損する。底部は丸みを有し、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁は丸くおさめる。内外面ともに密なヘラ磨きで調整され、体部内面は放射状、底部は連結輪状の暗文が施される。焼成は良好で、色調は明褐色、部分的に黒褐色を呈する。1019 は土師器の甕である。丸底を呈する長胴形の体部から口縁は外へ大きく開く。外面は刷毛目、内面は削りで調整する。出土遺物より土坑の時期は 7 世紀末から 8 世紀初頭と考えられる。

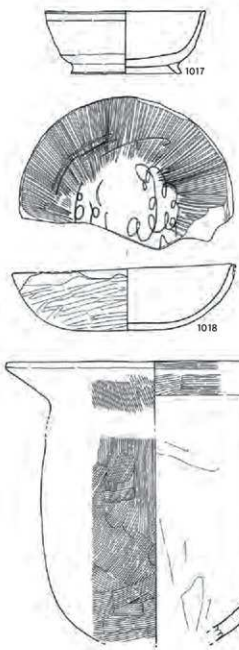
SK030407（Fig.80　Ph.123）　調査区中央に位置する。平面プランは円形を呈し、直径 0.7m を測る。断面は逆台形を呈し、深さは 60cm である。覆土は灰色シルトを主体とする。

出土遺物（Fig.80　Ph.122）　1020~1024 は SK030406 と SK030407 の土器を誤って混合してしまったため、ここでは SK030407 の頁で報告する。1020 は須恵器の坏蓋である。天井部は回転ヘラ削りが残り、他は回転ナデで調整する。1021 は赤焼土器の坏で、底部はヘラ切り未調整である。灰色の胎土で、内外面ともに暗紫灰色を呈する。1022 は須恵器の小壺で、ほぼ完形品である。細く外に踏ん張った高台が付く。1023 は須恵器の平底鉢で、底部外面と体部内面はナデ、体部外面にはタタキ、底部内面には当て具痕が残る。1024 は土師器の甑の底部片である。外面は刷毛目、内面は削りで調整する。胎土に白色砂粒を多く含み、明橙色を呈する。SK030406 の切り合い完形と出土遺物から SK030407 の時期は 8 世紀前半頃と考えられる。

Ph.122　SK030406・030407 出土遺物



Ph.123　SK030406・030407（南から）



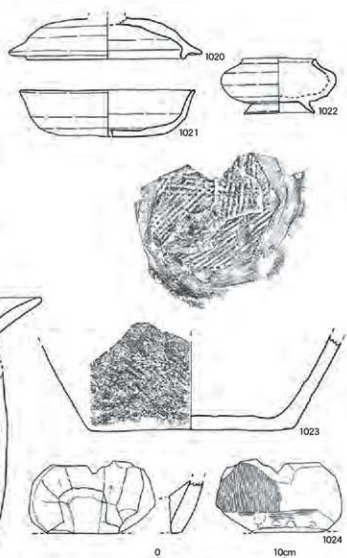


Fig.80　SK030406・030407 実測図（1/30）および出土遺物実測図（1/3）

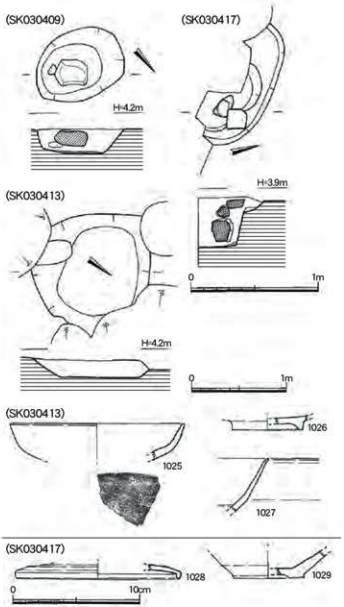


Fig.81　SK030409・030413・030417 実測図
（1/30・1/40）および出土遺物実測図（1/3）

Ph.124　SK030409 根石（南から）

Ph.125　SK030417 根石（北から）

Ph.126　SK030417 根石（北から）

SK030409（Fig.81　Ph.124）　調査区中央に位置する。平面プランは楕円形を呈し、長径 0.75m、短径 0.55m を測る。断面は逆台形で、深さは 18cm である。底面より 5cm ほど浮いた状況で玄武岩の偏平な石材が出土し、その下に小振りの礫岩が据えられていた。根石と考えられ、下層は掘りすぎた可能性もある。覆土は灰褐色シルトを主体とする。遺物は須恵器小片が 1 点出土し、時期は古代と考えられる。

SK030413（Fig.81）　調査区中央に位置し、北側を SK030328 に切られる。平面プランは偏平な方形で、一辺 1.25m を測る。断面は逆台形を呈し、深さは 18cm である。覆土は灰色シルトを主体とする。

出土遺物（Fig.81）　1025 は土師器の丸底坏で、外面に工具痕が残る。1026 は畿内産の緑釉陶器と思われ、灰色の精良な胎土に淡緑色の釉が全面にかかる。輪状高台を有し、回転ナデで調整される。1027 は越州窯系青磁碗の口縁部片で、底部と体部の境に段を有する。他に須恵器甕の小片、砥石が出土する。土坑の時期は 11 世紀前半頃と考えられる。

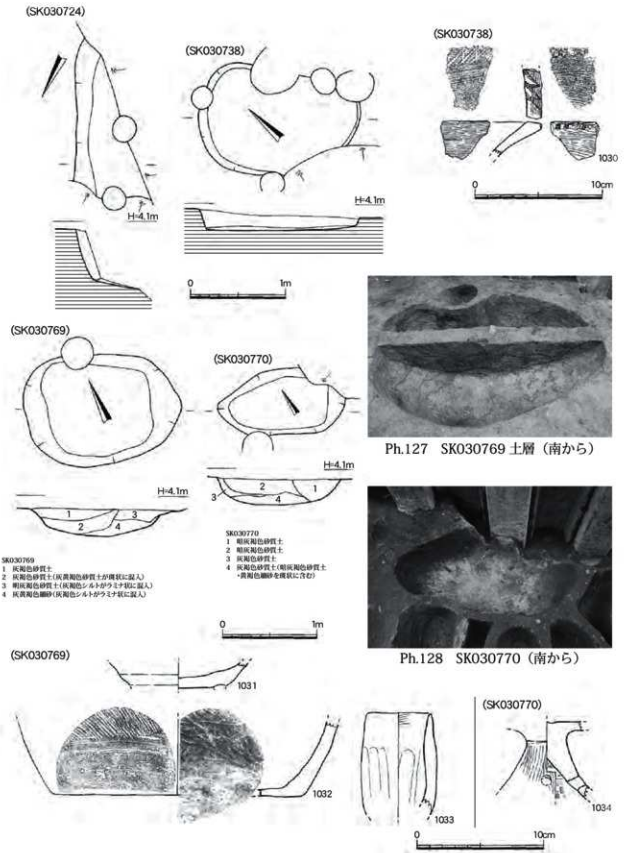


Fig.82 SK030724・030738・030769・030770 実測図（1/40）および出土遺物実測図（1/3）

SK030417（Fig.81　Ph.125・126）　調査区東側に位置し、遺構の大半は南側の調査区外へ延びる。断面は逆台形を呈し、深さは 40cm を測る。花崗岩と礫岩が出土し、根固め石として使用された可能性も考えられる。覆土は灰色シルトを主体とし、多量の炭化物と橙色土が斑状に混入する。

出土遺物（Fig.81）　1028 は須恵器の坏蓋で、口縁部を端部で折り曲げる。1029 は越州窯系青磁碗の底部片である。黒色粒をわずかに含む灰色の胎土に濃緑色の釉が全面にかかり、高台畳付けの釉は掻き取る。他に鉄滓が出土する。土坑の時期は 9 世紀頃と考えられる。

SK030724（Fig.82）　調査区東側に位置し、南側の SK030673 に遺構の大部分は切られる。断面は逆台形を呈すると思われ、現状での深さは 55cm である。覆土は茶褐色シルトを主体とする。土坑からは回転ヘラ切り底の土師器、白磁片、中国の施釉陶器のほかに含紅雲母ペグマタイトの石材（Ⅲ-34 Fig.31-622）が出土する。これらの遺物から土坑の時期は 11 世紀後半と考えられる。

SK030738（Fig.82）　調査区中央に位置し、東側は他の遺構に切られる。平面プランは隅丸方形を呈し、長径 1.7m、短径 1.1m を測る。底面はほぼ水平で、深さは 20cm である。覆土は茶褐色シルトを主体とする。

出土遺物（Fig.82）　1030 は畿内系二重口縁壺の口縁部片である。内外面に横方向の刷毛目が残り、口唇部と上端に刻目を施す。胎土は白色砂粒、金雲母を含み、色調は黄橙色である。他に布留系土器の甕、鉄片が出土する。土坑の時期は古墳時代前期である。

SK030769(Fig.82　Ph.127）　調査区中央に位置する。平面プランは隅丸方形を呈し、長辺 1.7m、短辺 1.1m を測る。断面は船底状をなし、深さは 30cm である。土層からは掘り返された状況が確認でき、3・4 層の明灰褐色砂質土、灰黄褐色細砂が堆積した後、再度掘削され、その後、1・2 層の炭化物、焼土を含む灰褐色砂質土で埋まる。

出土遺物（Fig.82）　1031 は黒色土器 A 類の椀の底部片である。胎土に金雲母、白色粒を含み、内面は黒色、外面は明橙色を呈する。底部内面には使用時につけられたものか、多くの擦痕が残る。1032 は須恵器の鉢の底部片で、体部外面にはタタキ、内面には当て具痕が残る。1033 は蛸壺である。体部中位より下は縦方向の指ナデ、上位は横方向の工具によるナデで調整する。他に製塩土器が出土し、土坑の時期は 9 世紀末と思われる。

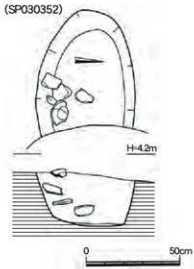
SK030770（Fig.82　Ph.128）　調査区中央に位置し、北側は矢板に切られる。平面プランは歪な楕円形で、長径 1.3m、短径 0.7m を測る。断面は船底状を呈し、深さは 28cm である。覆土は灰褐色砂質土を主体とする。

出土遺物（Fig.82）　1034 は土師器の高坏脚部片で、中位には 4 か所の円形透かしをもつ。外面は縦方向、内面下位には横方向の刷毛目が残る。胎土に金雲母を含み、色調は明橙色を呈する。他に土師器の甕、壺片が出土し、土坑の時期は古墳時代前期と考えられる。

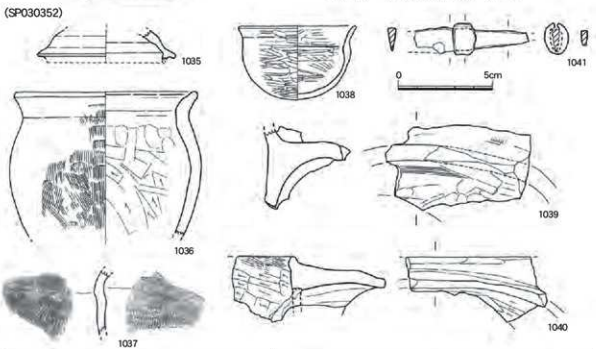
（2）ピット（SP）

SP030352（Fig.83　Ph.129）　調査区中央に位置し、東側を SK030406 に切られる。平面プランは楕円形を呈し、長径 0.6m 以上、短径 0.5m を測る。断面は逆台形で、深さは 25cm である。覆土は茶褐色砂質土を主体とし、灰色シルトが斑状に混入する。

出土遺物（Fig.83）　1035 は須恵器の坏蓋で、口縁は返りをもつ。白色砂粒を多く含み、色調は黄味を帯びた灰色を呈する。1036 は土師器の甕で、器壁が厚く、口縁は緩やかに外反する。外面の頸部から体部にかけては縦方向の刷毛目、内面の体部は削り、頸部は指オサエ、口縁部内外面は横方向の強いナデで調整する。胎土に白色粒、赤褐色粒、金雲母を含み、色調は褐色を呈する。外面は



Ph.129　SP030352（南西から）



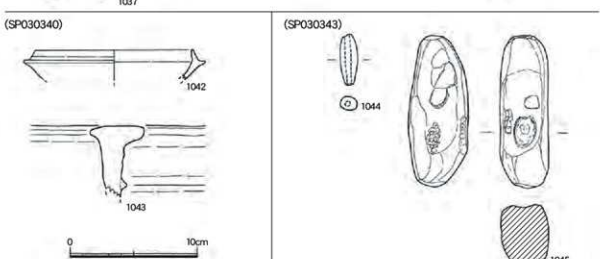


Fig.83　SP030352 実測図（1/20）**および**第 4 面 SP 出土遺物実測図①（1/3・1/2）

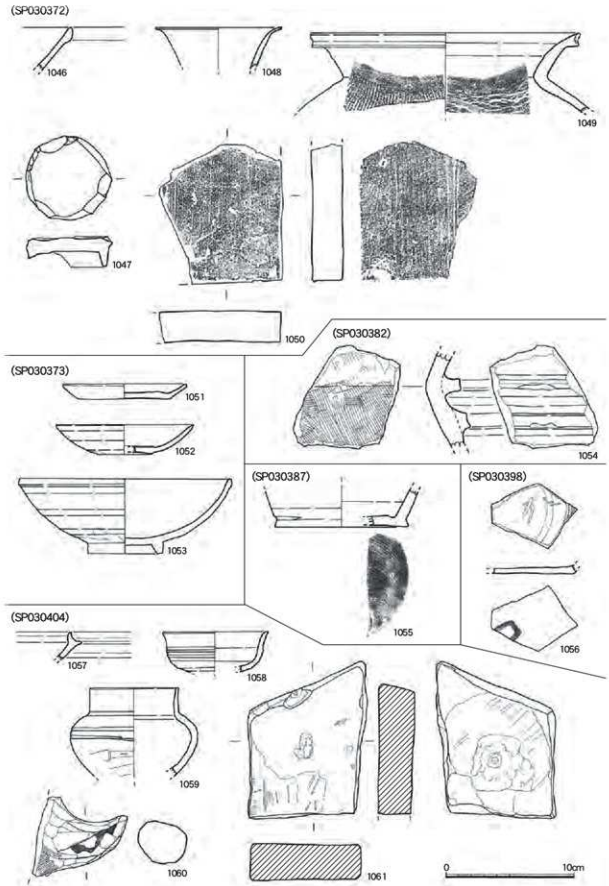


Fig.84　第 4 面 SP 出土遺物実測図②（1/3）

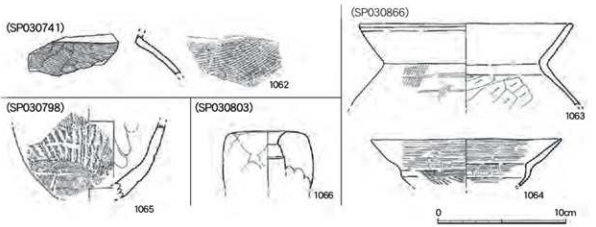


Fig.85　第 4 面 SP 出土遺物実測図③（1/3）

部分的に煤が付着する。1037 は赤焼土器の甕で、体部外面にタタキ、内面は刷毛目が残る。胎土に白色粒、金雲母を含み、色調は明褐色を呈する。1038 は下層からの混入品と考えられる土師器の小型丸底壺である。外面と体部中位から口縁にかけては、細かい横方向の磨きが施される。胎土に細かい金雲母を多く含み、色調は明赤褐色を呈する。1039・1040 は土師器の移動式竈の庇部分である。1039 は焚口部がわずかに残る。庇部分は刷毛目調整の後、ナデ、内面は削りで調整される。内面と庇の下部にわずかに煤が付着する。1040 は受部が残り、調整はほぼ 1039 と同じであるが、庇下面は削りを施す。内面には多量の煤が付着し、庇上部には垂れた焦げが残る。1041 は鉄製の刀子片で、茎の一部に木質の柄が遺存する。ピットの時期は 7 世紀前半と考えられる。

SP 出土遺物（Fig.83~85　Ph.130）　1042・1043 は SP030340 出土で、1042 は返りをもつ須恵器の坏身である。1043 は弥生時代中期中頃の須玖式土器の甕棺の小片である。1044・1045 は SP030343 出土で、1044 は管状土錘である。完形品で、重さは 53g を量る。1045 は敲石である。玄武岩製で、重さは 382g である。側面 4 面と側縁部には敲打痕が残り、上下面も擦痕等の使用痕が認められる。1046~1050 は SP030372 出土である。1046 は白磁碗Ⅳ類の口縁部片、1047 は瓦玉で白磁碗Ⅴ類の高台縁辺を打ち欠いて円盤状に整形する。重さは 89.5g を量る。1048 は青白磁の壺の口縁部片で、口縁は頸部から緩やかに立ち上がり、端部で外に大きく開く。胎土は精良で、白色を呈し、青緑色を帯びた透明釉がかかる。全体に細かい貫入が入る。1049 は須恵器の甕で、口縁端部は凹状に窪む。体部外面はタタキ、内面は当て具痕が残る。口縁部内外面はナデで調整する。白色砂粒を多く含む暗紫灰色の胎土で、色調は灰色を呈する。1050 は陶質の埦で、厚さ 2.4cm を測る。胎土に白色砂粒を多く含み、色調は暗褐色である。調整は工具によるナデで行う。1051~1053 は SP030373 出土である。1051 は回転糸切り底の土師器の小皿で、復元口径は 9.8cm を測り、外底部に板状圧痕を有する。胎土に金雲母を含み、明橙色を呈する。1052 は白磁皿Ⅵ-1b 類、1053 は白磁碗Ⅱ-1 類である。1053 は黒色粒をわずかに含む灰白色の胎土に化粧土が施され、淡緑白色の釉が体部外面下半までかかる。露胎は明橙色に発色する。1054 は SP030382 出土の弥生土器の大壺の頸部片である。断面台形の 2 条の突帯を巡らせる。体部は縦方向の刷毛目で調整され、頸部はナデで仕上げられるが、刷毛目がかすかに残る。白色砂粒を多く含む粗い胎土で、色調は橙色を呈する。1055 は SP030387 出土の須恵質土器の甕の底部片か。底面に回転糸切りが残る。胎土には黒色粒、白色砂粒を含み、色調は灰色である。1056 は SP030398 出土の土師器の底部片である。内面はナデで調整した後、体部は横方向の沈線状の磨き、底部にも暗文風の磨きを施す。底部外面は指オサエと

Ph.130　第 4 面 SP 出土遺物

ナデで調整し、墨書が残る。胎土は微量の白色粒と金雲母を含み、明赤褐色を呈する。1057~1061 は SP030404 出土の遺物である。1057~1059 は須恵器である。1057 は返りを有する坏身である。1058 は坏身で、丸味を帯びた体部は口縁で緩やかに外反する。体部中位下に 3 条の沈線を巡らせる。胎土は白色砂粒を多量に含み、色調は灰褐色を呈する。1059 は台付小壺と思われ、体部中位に 2 条の沈線を巡らせる。体部下位は削り、他は回転ナデで仕上げる。胎土に白色砂粒を多く含み、やや青味を帯びた灰色を呈する。1060 は土師器の把手である。1061 は砂岩製の台石の破片で、重さは 594g を量る。当初は図示の左面にみられる擦痕から砥石として使用されている。欠損後、右面のように台石として使用しており、中央部に敲打痕が残る。その後、被熱を受け、表面が部分的に薄く剥落する。1062 は SP030741 出土の土師器の庄内式甕の口縁部片である。器壁は薄く、体部外面はタタキが残るが、内面は刷毛目で調整される。色調は橙色を呈し、部分的に煤が付着する。1063・1064 は SP030766 出土の土師器である。1063 は布留系の甕で、体部外面から口縁部内外面はナデ、体部内面は削りで調整する。胎土に金雲母、白色砂粒を含み、色調は暗橙色である。外面に煤が付着する。1064 は精製の小型丸底壺の破片である。口縁部内外面は横方向の強いナデを施し、体部内外面は部分的に磨く。色調は明橙色を呈する。1065 は SP030798 出土の土師質の甕である。体部外面は刷毛目で調整した後、縦位の粗いタタキを施す。内面は工具によるナデが残る。胎土に白色粒、細かい金雲母を多量に含み、外面は暗褐色、内面は明褐色を呈する。1066 は SP030803 出土の弥生土器の支脚で、頂部に穿孔を有する。器壁は厚く、指ナデで整形される。

6）第５面の調査（Fig.86　Ph.131・132）

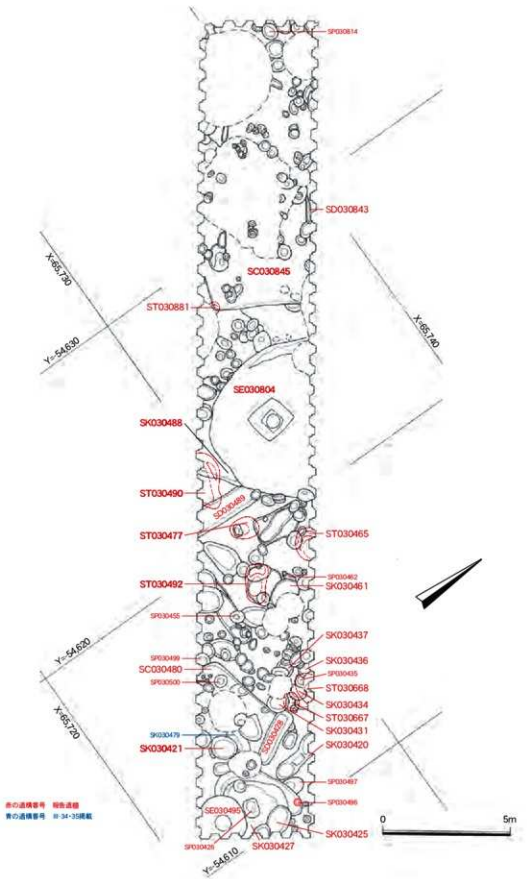
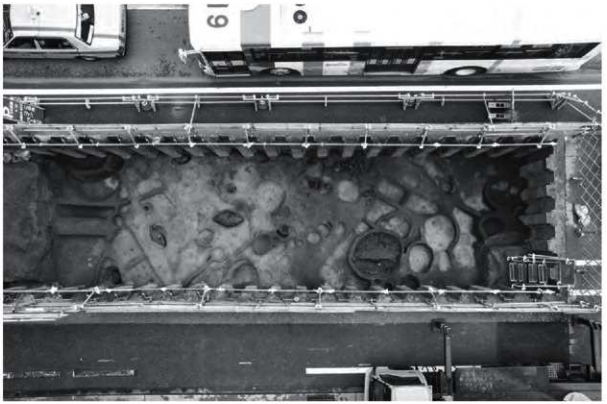
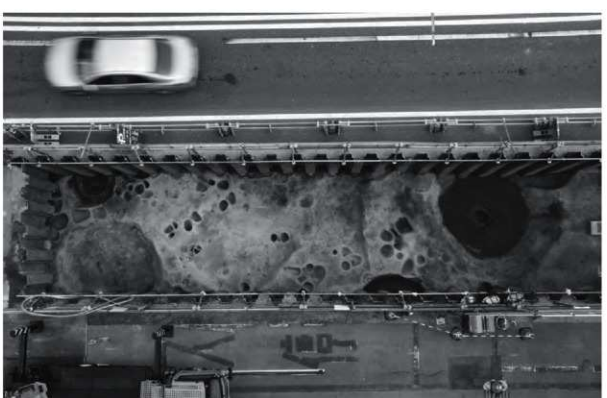


Fig.86　第５面全体図（1/150）



Ph.131　東側５面全景（南から）



Ph.132　西側５面全景（南から）

第5面は地山の明黄褐色砂の上面で検出し、標高は東側から中央部までが3.7m、西側は3.6mを測り、わずかであるが、西側へと傾斜する。検出した主な遺構は竪穴住居跡2軒、井戸2基、溝1条、甕棺墓7基、土坑10基、柱穴である。第5面で最も古い遺構は、弥生時代中期初頭から前葉の甕棺墓である。調査区中央で検出し、東西方向に並ぶ。検出時、甕棺内には既に砂が入り込んでいたが、甕棺の遺存状況は良好で、成人棺からは、人骨も出土する。小児棺では、人骨は確認できなかったが、歯が数個体残されていた。その後、弥生時代後期後葉の土坑やピットが散見でき、終末から古墳時代前期にかけて、竪穴住居が営まれ、調査区全体に土坑、ピットが拡がる。竪穴住居の遺存状況は悪く、柱穴や壁面等が確認できたものはごく一部である。ただ、住居内からは大量の遺物が出土し、包含層中に含まれる遺物量とは全く異なる。一方、古代になると井戸、土坑、ピットを検出するが、遺構の数は減少する。井戸は調査区中央で検出し、直径6.0mを測る大型のものである。調査区で確認した古代の井戸はこの1基のみである。井側を方形区画で2重に組み、水溜には曲物を用いる。遺物量は少ないが、墨書土器の小片が出土する。他の遺構や包含層からも墨書土器や都城系の土器が出土する。なお、上層で数多く検出した古代末から中世前期の遺構も上層で確認できなかったもの、切り合いの関係で、最終面で調査を行ったものが残る。

(1) 竪穴住居跡 (SC)

SC030480 (Fig.87　Ph.133)　調査区東側に位置し、南側は調査区外へ延びる。残存状況は悪く、北側の壁面を確認したのみであるが、この壁面より南側から土器がまとまって出土したため、竪穴住居跡とした。東側のSD030428はこの住居跡と軸を一にし、出土土器の時期も、ほぼ同じであるため、付属する遺構と捉えた。竪穴住居跡の平面プランは方形を呈し、東西方向の一辺は約4.1mを測る。壁は約10cm程度の残存で、炭化物を少量含む茶褐色砂質土で覆われていた。

出土遺物 (Fig.88)　1067~1071はSC030480の竪穴住居跡から出土した土師器と弥生土器である。1067は甕で、頸部内面にかすかな稜線をもち、口縁部は大きく外反する。内外面ともに密な刷毛目で調整する。1068は布留系甕の口縁部片で、口縁端部はわずかに内に張り出す。1069は畿内系二重口縁壺で、口縁部は屈曲部から長く、立ち気味に開く。体部内面には縦方向の指ナデが残る。1070は小型の高坏脚部片で、外に大きく開き、中位に穿孔を有する。胎土は精製され、色調は明橙色である。内外面ともに細かい刷毛目で調整した後、外面は横方向の磨きを部分的に施す。1071は器台で、外面にはタタキが残り、他は指ナデ、指オサエで調整する。1072~1075はSD030428出土の土師器である。1072は高坏で、口縁部は上方にわずかに摘み、端部中央を凹ませる。内外面ともに刷毛目で調整した後、外面は斜方向、内面は縦方向に暗文を施す。1073は小型の山陰系二重口縁壺の口縁部片である。1074は大甕の胴部片か。内面は刷毛目、外面もナデが施されるが、かすかに刷毛目が残る。胴部に巡る幅広の突帯には工具による刻目が施される。1075は基部を欠損する偏平な無茎式の鉄鏃で、鏃切りで整形される。身の中央部に木質が残る。竪穴住居の時期は出土遺物より古墳時代前期前葉と考えられる。

SC030845 (Fig.89　Ph.134)　調査区中央に位置し、西側はSK030673に切られ、北側と南側は調査区外へ延びる。残存状況は悪く、東側の壁面と南東のコーナー、北側の壁溝 (SD030843) を確認した。平面プランは長方形で、東西方向は一辺約4.0m以上、南北方向は一辺約4.5mを測る。壁は約8cm程度しか残存しておらず、覆土は炭化物を少量含む茶褐色砂質土を主体とする。柱穴は4本確認でき、南西の柱穴の底面は標高約2.4mと深く、他3本は標高2.8~2.9mである。

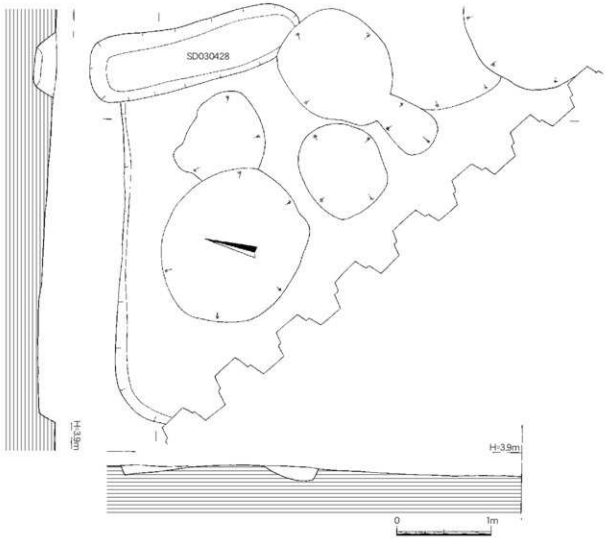


Fig.87　SC030480 実測図（1/40）

Ph.133　SC030480　3 区東側 5 面東側（南から）

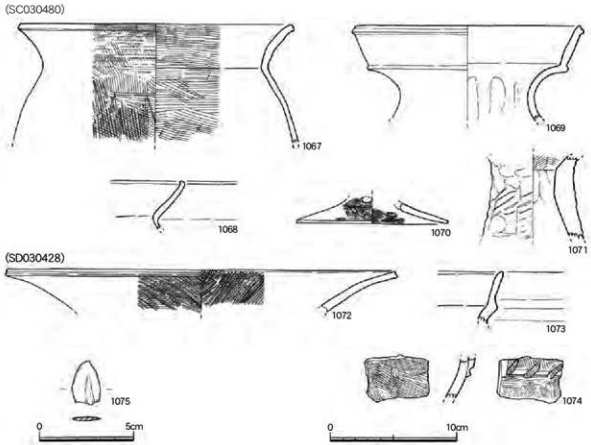


Fig.88　SC030480 出土遺物実測図（1/3・1/2）

出土遺物（Fig.90　Ph.135）　1076~1082 は土師器である。1076 は甕の口縁部で、内外面ともに刷毛目で調整する。外面には多量の煤が付着する。1077 は鉢で、口縁と体部がわずかに欠損するが、ほぼ完形である。胎土は精選され、色調は明橙色である。底部付近は削りで調整されるが、全面に細い磨きを施す。1078 はV様式系の脚付鉢で、坏部内面、脚部内面に放射状の刷毛目調整が認められる。精製した胎土で、金雲母を多量に含み、色調は明橙色を呈する。1079 はV様式系の小型器台で、脚部は中実である。外面は縦方向の粗い削りが施される。1080 はV様式系の二重口縁壺である。1081 は山陰系の二重口縁壺で、体部外面に刷毛目が残り、口縁はナデで調整する。1082 は東海系の壺の口縁部片と体部片である。直立する頸部から口縁部はほぼ水平に延び、屈曲部で垂直に立ち上がる。口縁下端には工具による刻みを巡らせ、襞状とする。屈曲部の下端は欠損するが、一部箆で山形を描く。体部は球状を呈し、肩部には 3 条の櫛描平行線文が施され、その間に山形波状文を描く。最下段には羽状文を巡らす。外面は丁寧なナデ調整、内面は指ナデ、指オサエが残る。胎土は精良で、細かい金雲母、白色砂粒を含む。色調は外面が明褐色、内面は灰黒色を呈する。1083・1084 は弥生土器の複合口縁壺である。1083 は屈曲部より直立し、端部は平坦におさめる。内外面は刷毛目で調整する。1084 は器壁が厚く、外面には刷毛目が残る。ともに色調は橙色を呈する。1085 は大甕の体部片で、断面台形の突帯に刻みを施す。内面は横方向、外面は縦方向の細かい刷毛目で調整する。1086 は弥生土器の甕で、逆「L」字状の口縁をもち、口縁下に三角突帯を巡らす。内面はナデ、外面は刷毛目で仕上げる。外面には煤が少量付着する。1087 は砂岩製の砥石片で、1 面使用面が残る。他に鉄片、敲石が出土する。出土遺物から竪穴住居の時期は古墳時代前期前葉と考えられる。